グローバル地域ケア IPE+創生人材の育成

Global & Regional Interprofessional Education Plus (GRIP)

年次報告書　2022

令和 5 （2023）年 7 月

CHIBA UNIVERSITY | grip Global & Regional Interprofessional Education Plus Program

目　次

ごあいさつ 3
1. 事業概要 5
1-1. 「大学の世界展開力強化事業」について 5
1-2. GRIP について（申請内容から 5 年分の予定） 6
1-3. GRIP 推進のための組織と体制 27
2. 2022 年度の取り組み 30
2-1. 大学院博士前期課程副専攻 GRIP の開講準備 30
2-2. 教材開発 32
2-3. カウンターパートとの連携 36
2-4. メタバース環境の開発 39
2-5. ISL プログラム開発 41
2-6. ISL プログラム派遣　実施 45
2-7. ISL プログラム受け入れ　実施 50
2-8. 成果発表会 80
3. 事業評価 83
3-1. 事業評価の観点と方法 83
3-2. プロセス評価 84
3-3. 学習成果の評価 87
3-4. 外部評価 95
Fact Sheet 98
資料 1　GRIP 実績 98
資料 2　受け入れプログラム実績 98
資料 3　派遣プログラム実績 99
資料 4　教員交流実績 99
資料 5　研究計画書 101
資料 6　学習の進め方 120

ごあいさつ

このたび、千葉大学は 2022 年度「大学の世界展開力強化事業」に採択されました。これにより、グローバル地域ケア IPE プラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP） が 2022 年 10 月にスタートいたしました。この目的は、SDGs の開発目標３「すべての人に健康と福祉を」を実現し、WHO が提唱する Universal Health Coverage「全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」の推進のために、地域ケアを創生する人材を育成することです。

この事業に応募するに至った背景を説明しておきたいと思います。

まず、千葉大学亥鼻キャンパスでは 2007 年より、亥鼻 IPE（ https://www.n.chiba-u.jp/iperc/inohana-ipe/aboutinohanaipe/index.html）という、医学部・看護学部・薬学部・工学部による専門職連携教育を必修科目としてスタートさせていました。これにより、多様な学問領域の学生が共通の目的・目標に向かって共に学びお互いから学びお互いについて学ぶための学習内容、方法、資源の集約ができていました。加えて、2015 年 1 月に千葉大学看護学研究院に附属専門職連携教育研究センター（Interprofessional Education Rsearch Center IPERC)が開設されました。これにより世界の専門職連携教育拠点や担当者との交流プラットフォームとして IPERC が機能することとなり、イギリス、オーストラリア、ドイツ、インドネシア、中国、台湾、カナダなどの IPE プログラムとの交換留学プログラム（Global IPE プログラム）の開発がスタートしていました。

また千葉大学では全員留学 ENGINE プログラムが 2020 年よりスタートし、この準備のために、看護学部では Global Health and Nursing II という短期留学科目を開講しこの科目の中で、インドとの交換留学プログラムをスタートさせていました。また COIL プログラムもこの科目の中で展開しておりました。おりしも世界的に COVID-19 のパンデミックのため、オンライン留学プログラム、オンライン IPE プログラムを開発し、実装を完了させていました。

以上の基盤整備と、IPE および留学プログラムが開発されていたことにより、これらを統合した GRIP プログラムの原型ができていたといえます。

そして 2022 年 10 月から事業がスタートしたわけですが、初年度事業として学習環境の整備、プログラムのカウンターパートであるイギリスレスター大学、オーストラリアモナシュ大学、インドのシンビオシス国際大学とのプログラム開発ミーテイング、フィールド調査を行いました。そしてシンビオシス国際大学のサービスラーニングセンターSCOPE を拠点とした千葉大学 10 名の派遣、同大学からの 10 名の学生の受け入れのトライアルを実施することができました。

本事業初年度トライアルを実施できましたのは、シンビオシス国際大学の千葉大学生の受け入れ整備に尽力してくださった、国際教育部門 SCIE（Symbiosis Centre for International

Education)、 SCOPE (Symbiosis Community Outreach Programme and Extension)部門 、看護学部 SCON（Symbiosis College of Nursing)、のみなさまと、日本での受け入れを快く引き受けてくださった施設、自治会、千葉大学の各部門の方々の多大な貢献のたまものであり深く感謝申し上げます。また学生のアテンドとして間に入ってくださった SGS、JTB の皆様にも深く感謝申し上げます。本当に多くの方々のご協力により、GRIP 初年度事業はほぼ目標を達成したと考えております。

2 年目の事業実施に向けた課題として、以下の点が考えられます。まずプログラムの学習効果をさらに高めるために、学習目標に見合った内容であるかという視点からさらにブラッシュアップすること、ブリーフィングおよびデブリーフィングの時間を十分にとることが重要です。またカウンターパート国の文化的背景をさらに理解したうえで社会課題のアセスメントと解決策の検討ができるように、文化的感受性の涵養および文化的謙虚さを高められるようにプログラムを改善すること、そして継続可能性を高めるように、効率的な事業運営を工夫すること、事業の経過を記録すること、これらを統合して、教材ケーススタディの開発と蓄積を行っていくことなどです。

またプログラムの改善のために定期的な内部外部評価を受けながら進めていくことは前述した課題解決のための基盤となります。

これからも GRIP の発展のためにご指導をよろしくお願いいたします。

千葉大学看護学研究科　教授
GRIP プログラム責任者
酒井　郁子

1. 事業概要

1-1. 「大学の世界展開力強化事業」について

1-1-1.「大学の世界展開力強化事業」全体の概要

「大学の世界展開力強化事業」INTER-UNIVERSITY EXCHANGE PROJECT とは、日本の文部科学省が 2011（平成 23）年度から実施している事業である。その趣旨は「世界的に学生の交流規模が拡大する中において、我が国にとって重要な国・地域の大学と質保証を伴った連携・学生交流を戦略的に進め、国際的通用性を備えた質の高い教育を実現するとともに、我が国の大学教育のグローバル展開力を強化する」ものである。

この趣旨の下、日本全国の大学からの事業の公募・審査・評価を担当する日本学術振興会では同事業については、「国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指し、高等教育の質の保証を図りながら、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受入を行う事業対象国・地域の大学との国際教育連携の取組を支援することを目的」とされている。（日本学術振興会，大学の世界展開力強化事業．https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/index.html）。

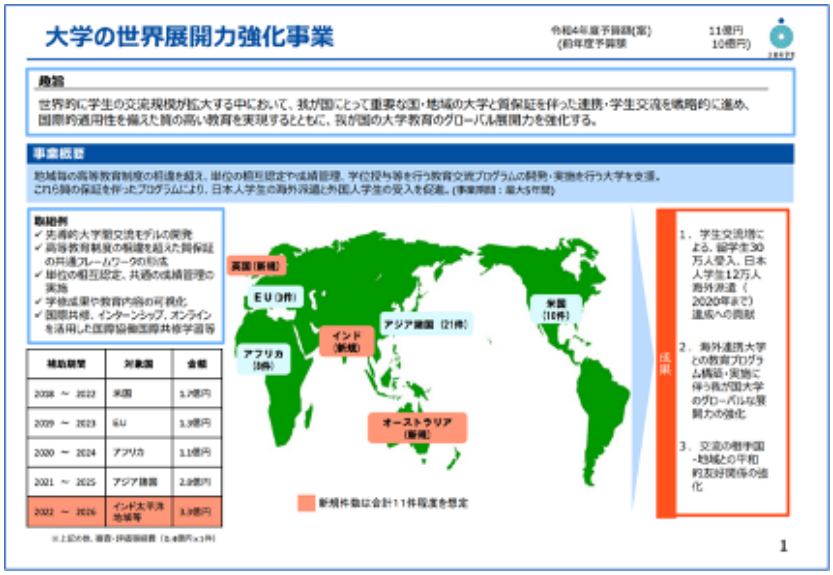


図 1　　概要　大学の世界展開力強化事業　令和 4 年度

事業概要は、「地域毎の高等教育制度の相違を超え、単位の相互認定や成績管理、学位授与等を行う教育交流プログラムの開発・実施を行う大学を支援。これら質の保証を伴ったプログラムにより、日本人学生の海外派遣と外国人学生の受入を促進。（事業期間：最大 5 年間）」である（文部科学省：大学の世界展開力強化事業、令和 5 年度）。

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/

1-1-2. 大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

図 1 に示した通り、日本政府が日本国にとって重要と見なす国・地域を戦略的に選定し、学生の交流を促進するものである。2022 年度からの 5 年間については、インド太平洋地域等（英・印・豪）を対象地域として、想定の新規採択件数 11 件、予算 3．3 億円として公募がされた（R4 大学の世界展開力概要 https://www.mext.go.jp/content/20220131-mxt_koutou03-000020212_1.pdf）。公募時の概要は図 2 に示す通りである。

図 2　大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～

申請数は、交流対象国を、英国のみ、インドのみなどから、英国・インド・オーストラリアの 3 国までとするなど、複数の交流先を含めると、総計 30 件の申請があり、うち 14 件（新規は 11 件）が選定された。そのうち、交流先を、英国・インド・オーストラリアの 3 国とする申請数は 6 件であり、本事業「グローバル地域ケア IPE プラス創成人材の育成（GRIP Program）を含む 4 件が選定された。この選定・採択を受けて、GRIP は 2022 年 10 月より、事業開始に至った。

1-2. GRIP について（申請内容から 5 年分の予定）

1-2-1. 交流プログラムの目的・概要等

交流プログラムの目的及び概要等

グローバル地域ケア IPE プラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP） の目的は、SDGs の開発目標 3「すべての人に健康と福祉を」を実現し、WHO が提唱する Universal Health Coverage「全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等

の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」の推進のために、地域ケアを創生する人材を育成することである。その人材とは、世界中どこにおいても文化的謙虚さに基づいた異文化対応能力を基盤として、多様な専門職とともにケアに関わる社会課題に取り組み、現場での最適解を導き出すべきものであり、生命科学に限らず、広く多様な専門の人材、エンジニアから行政官まで文理を問わず対象となる。このようなプログラムは世界のどこにもなく、世界初のプログラムとして実施するものである。千葉大学では 2007 年から日本では初めて医療系学部を横断した「専門職連携教育プログラム－亥鼻 IPE」を 15 年間、必修科目として推進している。この専門職連携教育を、全学に発展させ、日本以外の国や地域の課題に対応できる専門職業人材を育成する。本事業では、「地域特有の健康課題」に対して、専門領域の異なる学生がインター・プロフェッショナルかつインター・ナショナルに協働して取り組み解決方策を提案する地域対応型の人材を、専門を跨いだサービス・ラーニングにより育成するものである。

本事業の特徴は、以下の 3 つである。

(1) 医療系学部にとどまらず地域ケア創生に関わる全学部および全大学院が参加し、国際的な「地域ケア創生ネットワーク」を構築する
(2) IPE を基盤としたソーシャルラーニングにおける専門領域の異なる学生による相互の知識提供で、地域ケアのサービスを構築し実施
(3) 千葉大学が COIL-JUSU とグローバル IPE（現地交流型）を組み合わせ、継続的アクティブラーニングで、学習の相乗効果を得る

本事業で開発する能力は、専門職連携実践能力―Interprofessional Competency と、社会課題解決能力―Social Issue Solution であり、この二つは文化的対応能力及び文化的謙虚さ－Cultural Competency and Cultural Humility に立脚した具体的な実践能力である。この能力を学部、修士、博士と段階的に獲得できるようにプログラムを構築し、新たな専門職教育モデルとしての普及を以下の 2 段階で実施する。第一に、オンデマンド教材の開発と JV-Campus での開講、教材評価、教育ロジスティクス評価を実施する。千葉大学とシンバイオシス大学（インド）において現地フィールドスタディを実施し、バーチャルワークショップの開催、社会課題に関する学生のケーススタディをオンデマンド教材に追加する。これらにより、インタープロフェッショナル・サービスラーニング（ISL）の初期モデルを構築し、さらに上位の修士・博士のプログラムを開発する。第二段階では、モデルの横展開普及として、国内の大学や連携校以外の大学（札幌医科大学、台北医学大学など）に展開し実施する。社会課題への対応について、事後評価を実施、さらにアウトカム評価を蓄積することで、専門職連携教育の効果評価に貢献する。

養成する人材像

社会課題の解決はまさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要とされる。本事業で養成する人材像は、Universal Health Coverage 推進のために地域ケアを創生できる専門職である。

具体的には、こどもたちの健康状態の改善のためのアクションを取ることができる、その国に必要な医療機器、介護機器を開発できる、健康的な環境を考慮した地域開発ができる、健康資源へのアクセシビリティを改善する、健康習慣の獲得のための教育ができる、高齢者のポリファーマシーの改善に取り組むことができるなど、どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人を養成する。そのため、本事業は千葉大学全体を対象として多様な専門の人材をこのような、グローバル地域ケア IPE プラス（GRIP）型人材として育成する。

本事業で計画している交流学生数

次の表の通りである。

表 1　事業期間 5 年間の交流学生数　（人）

2022 年度		2023 年度		2024 年度		2025 年度		2026 年度	
派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
10	10	15	15	20	20	30	30	40	40

事業の概念図

本事業全体を概念図として、図 3 に示す。

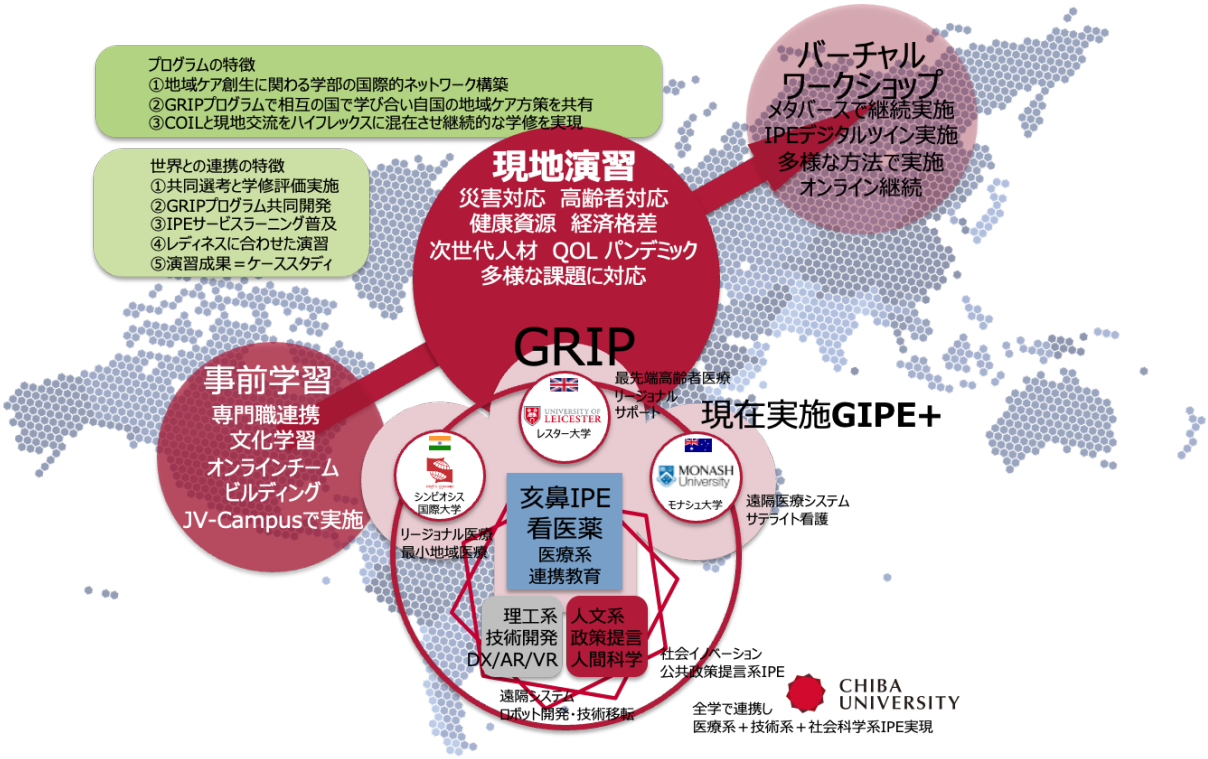


図 3　本事業全体の概念図

1-2-2. 交流プログラムの内容　【計画内容】

世界初のプログラムを６つの観点で実現

本事業 GRIP（Global & Regional Interprofessional Education Plus）は、学部学生、修士学生（医学部薬学部は５年生および６年生）、博士学生を対象として、大学全体に看護学の理念を展開し、SDGs の開発目標３「すべての人に健康と福祉を」を実施できる人材をあらゆる専門領域で育成するものである。そのために、本事業では、以下の６つの具体的内容を実施していく。

(1) IPE とソーシャルラーニングをグローバル＆ローカルに推進する世界初のプログラム

IPE は、専門家や知識の利用者と向き合うことで、現在の実践やパラダイムに疑問を投げかけることができる学習である。この IPE に、同じ国の異なる専門職の間だけでなく、異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進し、インターカルチュラルなプログラムを構築する。このような新しい IPE の取り組みは、世界の看護ケア・アプローチの多様性に対処することができ、実践やコンピテンシーが均等性ではない、というユニークさがある。このような国際的 IPE コースは世界に存在していない。本事業は、世界をリードするプログラムとして構築する。

(2) 副専攻「グローバル地域ケア IPE プラス（GRIP)」の設置

本事業では、大学院グローバルプログラムである大学院国際実践教育に、新たに副専攻プログラム GRIP を全学履修可能として設置する。本副専攻は、修士課程および博士課程を対象とし、亥鼻 IPE 科目履修済みの学部学生（看護学部生４年生、医学部、薬学部５年生、工学部・医工学４年生、および連携大学）も受講可能とし、プログラムの３ポリシーを明確にし、受講させることで、人材を育成する。連携大学が承認すれば、海外の連携大学の学生も、千葉大学の副専攻の学位を取得できる。将来的には、海外連携大学での設置も促進してもらい、世界共通のマイナープログラムの設置を目指す。

(3) 健康関連社会課題の世界共通化と地域特性対応の双方型解決の実践

GRIP の専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL　２単位）は、事前学習、現地演習、バーチャル・ワークショップで構成する。

(i)事前学習は基本的にオンラインでチームビルディングとケース・シナリオを用いたシミュレーションにより社会課題を解決する。

(ii)現地演習では、多様な文化的・学際的背景をもつ学生が協働して、現地の問題解決に専門職連携を基盤にして取り組む。

(iii)バーチャル・ワークショップでは、社会課題解決に向け取り組んだチームにより、学習成果の具現化とその地域への実装、自他国への移転可能性の検証などをまとめる。最終課題は社会課題解決の成果は、ケース・スタディ・シナリオとして蓄積し、次年度以降の教材として利用する。

(4) 医療系学生が履修可能なインテンシブ・イシュー・プログラムで実施

本プログラムは、全学で実施するものであるが、看護系（医療系）が履修していなければ、グループワークの効果が薄れることは間違いない。看護系（医療系）のカリキュラムは、過密で長期間の留学などが難しいことから、これらの専攻の学生が GRIP の履修をしやすい、インテンシブ・イシュー・プログラムで実施する。これは、すでに国際教養学部が知識集約型教育で実施しているモデルを活用し実現する。

(5) カリキュラム・マップによる学習到達目標の明確化と質保証

プログラムの３ポリシーを明確にするとともに、設置する授業科目のカリキュラム・マップを学部・大学院ともに設置、その中で留学における学習到達目標も明確にし、学生の興味と準備状態に応じて、段階的に学習到達目標をクリアできるようにする。海外の大学にも同様にこのプログラムとポリシーを提供し、共同で実施する。

(6) ハイフレックスによる授業運営

GRIP 科目のうち、専門職間社会課題解決演習（ISL）以外の６科目は、オンラインでの学修を可能とし、世界のどこからでも受講可能な環境を作る。千葉大学では、スマート・ラーニングでハイフレックス型の授業を展開している。医・看護・薬・工の４学部、300 名以上の専門職連携教育をオンライン同時双方向で、かつグループワーク（６人程度）で学習目標の達成までファシリテーションできる環境が整っているため、それを活用する。

２フェーズでカリキュラムのレビューを実施しプログラムの質を保証

さらに本事業では、以上の実施計画を２つのフェーズで実現させる。

【PHASE　1】―GRIP モデルの構築　（2022－2023 年　中間評価まで）

初年度（2022 年度）は、IPE オンデマンド教材開発を行い、JV-Campus に搭載する。現在すでにその一部となる高齢者ケアについては、すでに JV-Campus で公開している。このメディアを、千葉大学及びシンバイオシス大学の学生に受講してもらい、教材評価を実施する。一方で、オンライン・チーム・ビルディング・プログラムを開発し、フィージビリティ評価を実施する。またフィールド･スタディの予備調査を行い、課題を選定する。

これらを演習課題アーカイブとし、課題に取り組むためのテンプレートを作成する。さらに、2023 年度には、インドと日本で現地演習プログラム開発し、フィールド・スタディをスタートさせる。さらにバーチャル・ワークショップを開催する。また、その成果としてフィールド・スタディをケース・スタディ・アーカイブとし、事前学習コンテンツとして利用する。

【PHASE　2】―GRIP モデルの世界普及　（2024－2026 年　中間評価以降）

JV-Campus を活用し、国内・海外の大学をリクルートする。一方で、これまで連携のある、札幌医科大学、群馬大学、ハノイ大学、台北医学大学、ライプチヒ大学、シンシナティ大学などの参加を促進する。これにより、ローカル・フィールドの拡張を行う。また毎年バーチャル・ワークショップを開催し、ケース教材のアーカイブを継

続する。健康課題の取り組みプロジェクトのフォローアップ・スタディをスタートさせ、現地でのインパクト及びアウトカム評価の指標を明確にする。最終年度には、プロジェクト全体の最終評価を行い、共有する。

本事業のプログラムに関する質保証

(1) GRIP プログラムに関する反転授業教材の蓄積と活用

本事業の実施により、JV-Campus 上に千葉大学提供の IPE コンテンツ、およびサービスラーニング教材を公開する。これを活用する大学教員および学生からの授業評価をもとに持続的に改善していく。

(2) GRIP プログラムの質保証　4 能力の評価

サービスラーニングを用いたグローバル IPE に関しては、その堅牢な学習者評価のツールおよび方法が確立していない。本事業を通して、「１．専門職連携実践能力」「２．文化的対応能力」「３．文化的謙虚さ」「４．健康課題解決能力」における自己評価と他者評価の項目を開発することで、学修者評価を適切に実施させる。

(3) 副専攻学位、サーティフィケートの付与

GRIP を大学院副専攻として設置し、大学が運営する履修管理および成績管理に基づいて受講させる。博士課程では、グローバルな演習の一つのプログラムとして位置付け、留学の一部とする。このように、正規科目及び副専攻と位置付けることにより受講管理・成績管理を厳格に実施する。

本事業で学生に習得させる人材能力

本事業では、学生には大きく 2 つの能力を修得させる、そして、それぞれに 6 つの目標があり、合計 12 の修得すべき能力の習得を目標とする。

修得させる 2 つの能力とは、「A.専門職連携実践能力」および「B.社会課題解決能力」である。「A.専門職連携実践能力」は、「B.社会課題解決能力」の前提にある。

「A.専門職連携実践能力」は、IPE では生命科学に関する知識とその利用法に関するものである。これを全ての専門領域に拡張して目標とする。従って、これまでの IPE の目標をもとに、以下のような能力を設定する。

もう一方の「B.社会課題解決能力」は、ソーシャル・ラーニングとしての能力であり、幅広い知識が必要となると共に、それを地域に還元できるような能力が必要となる。また社会課題を発見し、よく理解し、かつ持続的に継続できる解決方法も重要となる。即効性はあるが持続できないものはいずれ社会から排除されるため、SDGs の理念に沿った持続的な解決方法が本事業の能力でも求められる。

一方で、この 2 つに共通する具体的能力には、文化的対応能力および文化的謙虚さが含まれる。つまり、２つの知識、専門的な深い知識と、社会的な幅の広い知識が必要となり、それらを裏付けするための「文化的対応能力および文化的謙虚さ」が重要となる。

これを学部と大学院に効果的に修得させるため、以下の学習到達を目標とする。

「A.専門職連携実践能力」における能力は、WHO が示す専門職連携教育をもとに、以

下の 6 つを GRIP1-6 として策定している。

（GRIP1）専門混在のチームワークでの課題解決
（GRIP2）各専門ごとの役割と責任の明確化
（GRIP3）コミュニケーションとリーダーシップ
（GRIP4）チーム学習とその成果の反映
（GRIP5）ニーズを伴うユーザーとの関係円滑化
（GRIP6）倫理を伴う実践教育

次に、「B.社会課題解決能力」における能力は、SDGs の理念を参考にし、以下の 6 つを GRIP7-12 として作成した。

（GRIP7）地域のアセスメント評価
（GRIP8）地域課題の抽出
（GRIP9）実践型課題の解決目標設定
（GRIP10）社会政策菜等の方策立案
（GRIP11）効果測定の評価計画立案
（GRIP12）地域における合意形成

上記の能力を獲得することを学習到達目標としている。

以上のように、本プログラムでは、プログラムの実施により。グローバル＋ローカルな「グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成」を実現する。

1-2-3. 学生主体の国際交流プログラム　【計画内容】

本事業は、基本的に全てが共同学習となっている。特に、専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL　2 単位)は、千葉大学―海外大学―課題提供大学および国内大学と幾つもの大学が連携し、共同学習を実施する。このような中で、以下の 2 つを積極的に実施し、現地に行かなくても共同学習が可能なプログラムとして構築する。

(1) オンラインチームビルディングワークショップ

健康課題の解決に向けて現地演習を行うが、事前準備として、参加大学の異なる専攻の学生が興味のある演習課題に取り組む。演習課題は、医療施設と地域、都市部とへき地、ジェンダー、母子と高齢者など対極にある概念を含む課題として学生の興味に応じて選択する。国や専門領域を超えて取り組むチームを学生が主体となって構築していく活動を、教員がサポートしながら行うことができるように、アイスブレーク手法、チームの発展段階に応じたファシリテーションなどを共有しつつ学生チームの構築を促進し演習課題に取り組む目的目標を明確にし、具体的な行動目標を立案する

までをオンラインで行う。この学部学生のチームビルディングに修士および博士が入ることにより、お互いとともにお互いからお互いについて学ぶ IPE のコアコンピテンシーを獲得することを期待する。

(2) メタバースを活用したバーチャルワークショップ

現地演習に取り組んだ後は、ワークショップでの共有に向け、メタバースでのプレゼンテーション準備の話し合い、プレゼンテーションの実施、各大学教員からのフィードバックののち、学びの共有を行う。最先端の SNS を学習に利用するとともに、ミラー社会での成功を現実世界に反映させる。

またこの際には、このプロジェクトの興味のある学生にもワークショップ参加を促し、次のプロジェクトのイメージをつかんでもらうとともに、フィールドへの理解を深める機会となることを期待する。将来的には GRIP に関する学生と教員の実践報告の場として機能し、社会課題解決に関する実践知の集積プラットフォームとなることを期待する。

1-2-4. オンライン（「JV- Campus」等）を活用したプログラム　【計画内容】

GRIP では、全体の実施計画と同様に、中間評価までと中間評価後の 2 つのフェーズでオンラインプログラムを構築し、JV-Campus で公開し、事前学習で利用する。本事業では、JV-Campus をプログラムの一部として利用するものである。

(1) PHASE1（2022－2023）

事前課題コンテンツを JV-Campus に公開し、連携する大学の教員および学生から評価を受け洗練する。事前課題コンテンツは、以下の内容とする。①専門職連携学習および演習②文化的対応能力学習および社会課題解決学習、①②のコンテンツを海外連携大学とともに洗練しパッケージ化する。JV-Campus 搭載コンテンツをパッケージ化する際に、連携校であるシンバイオシス大学、レスター大学、モナシュ大学からもコンテンツを提供してもらい、ワークシートおよび反転授業資料を拡充する。

(2) PHASE2（2024－2026）

上記①②のパッケージを活用し現地演習の準備性を高める。また現地演習で得られた社会課題解決 Case を難易度別にリスト化し、事前課題コンテンツに加える。これにより学生のレディネスに応じた演習準備を可能とする。PHASE2 での事前学習、現地演習、バーチャルワークショップのサイクルに連携大学以外の大学の学生が参加できるように JV-Campus で効果的に周知する。また大学院生のリクルートに使用できるような GRIP 動画コンテンツを、海外連携大学とともに作成する。

予定しているコンテンツの内容は以下の通りである。

①専門職連携学習コンテンツ

アイスブレーク、チームワークとチームビルディング、専門職の役割・責任の理解の方法、コミュニケーションとリーダーシップ、リフレクションとフィードバック、

倫理的実践、カンファレンス（会議）での意思決定、対立の解決と交渉、など

②文化的対応能力学習と社会課題解決学習コンテンツ

現地演習地域の文化、風習、医療福祉制度、地区診断、ヘルスプロモーションと社会的決定要因、プロジェクトマネジメント、文化的謙虚さ、など

③社会課題とその解決方法のケース

７つのプログラム(1)専門職連携基礎、(2)専門職連携実践１、(3)専門職連携実践２、(4)Cultural Competency and Cultural Humanity、(5)社会課題解決基礎、(6)社会課題解決応用、(7)専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL）を実施し、オンライン化する。

1-2-5. 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成　【計画内容】

本事業では、学部、修士、博士の学生を対象とし、既存の留学科目を活用した履修管理及び単位認定を行うとともに、大学院に「Global & Regional Interprofessional Education Plus」を置き、副専攻の学位を付与する。また既存科目を活用し単位を付与することで、学部から博士までどのレベルの学生でも GRIP に参加しやすくするとともに、その準備状態に応じた学修を保証する。

質保証における４つの枠組み

本事業の質保証で重要な(1)GRIP 参加学生の選抜、(2)レベル別の学習到達度目標の設定、(3)GRIP の履修および単位認定、(4)GRIP の質保証の拡張、の４つについて以下のように推進する。

(1) GRIP 参加学生の選抜

全学に向けて、GRIP の説明会を行い、参加学生の募集を行う。また同時に説明動画を作成し、連携大学と共有する。受講学生の選考基準、共通選考要件を作成しそれぞれの大学で選考を実施する。またプログラムの稼働に伴い、選考要件の評価会議を設定し、選考方法および要件の改善を実施する。

(2) レベル別の学習到達度目標の設定

本事業は、全学では大学院を対象に、IPE 受講済み学生は学部の３年生以上を対象にする。したがって、受講学生は学部、修士、博士とレベルが異なっている。これらの学生が単一の成果を上げるのではなく、それぞれの授業においても、各自のレベルにおいて課題に対してどのような提言を成果とするかを図１のように設定し、レベル別の学習到達度目標で学習の質を担保する。後述する 12 の学習到達目標とともにレベル別の学習到達度目標で学修成果を管理する。

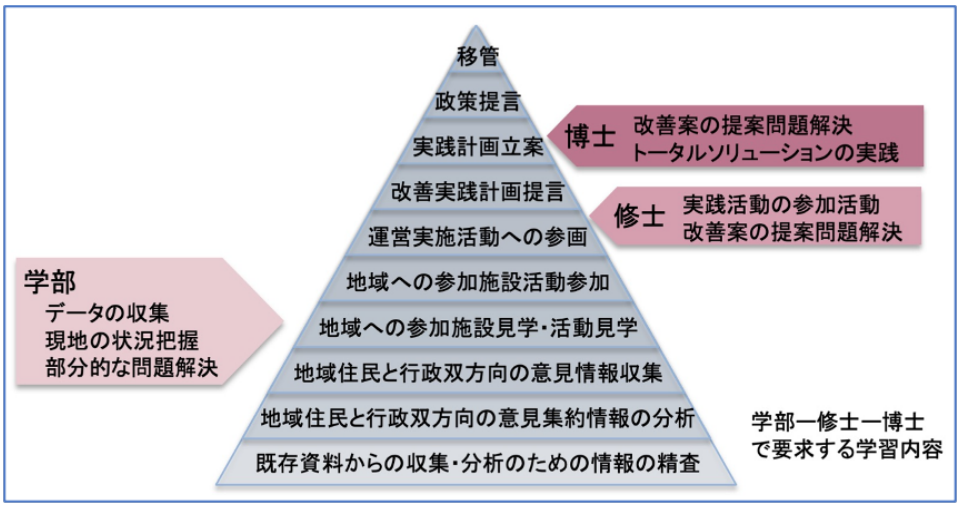


図 4　レベル別の学習到達目標

(3) GRIP の履修および単位認定

副専攻 GRIP の科目および概要を表 2 に示す。

表 2 副専攻　グローバル地域ケア IPE プラス(Global & Regional Interprofessional Education Plus: GRIP) 科目

NO	科目	単位	選択/必修	概要
1	専門職連携基礎	1	選択	IPEの起源と理論的背景、必要性をSDGsとの関連から論述し、基本的な理論から専門職連携実践活動を学ぶ
2	専門職連携実践 1	1	選択	専門職連携実践活動に必要な役割と責任、コミュニケーション、患者利用者住民との関係構築を学ぶ
3	専門職連携実践 2	1	選択	利用者住民へのサービス品質向上に向けた専門職連携実践のためのリーダーシップとメンバーシップと倫理的実践を学ぶ
4	Cultural Competency and Cultural Humility	1	選択	異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進するインターカルチュラルな実践を学ぶ
5	社会課題解決基礎	1	選択	社会課題の解決に必要な地域アセスメント、課題抽出、目標設定方策立案、評価計画立案の一連の流れをシミュレーションシナリオを用いて学ぶ
6	社会課題解決応用	1	選択	社会課題の解決に必要なステークホルダーとの合意形成と対立の解決方法、コンサルテーションの実際をシミュレーションシナリオを用いて学ぶ
7	専門職間社会課題解決演習 (Interprofessional Social Learning)	2	必修	事前学習、現地演習、バーチャルワークショップで構成する（詳細後述）

この 7 つの科目の中で、一番重要なのが、専門職間社会課題解決演習(ISL)である。この演習は、連携する大学、対象とする地域によってそのテーマが異なっていく。

〇専門職間社会課題解決演習（ISL）テーマ案

学部、博士前期課程、後期課程の学生が、ともに学びお互いから学び合えるように、連携大学が保有するフィールドを共有し、学生が選択したテーマにふさわしいフィールドを選択できるよう支援することを目標とする。教員は学生のレディネスに合わせた学習支援を行う。そのために、社会課題解決能力のラダーを開発し、これをもとに学修者評価のための共通ルーブリックを作成し、参加大学が共通の評価基準をもって学修者評価ができるようにする。社会課題解決演習（現地演習）のテーマの例を表３に示す。それとともに、どのように全学の学生の専門領域を巻き込みながら課題を解決するかについて、想定される専門領域について括弧内に示す。

表 3 専門職間社会課題解決演習（ISL）テーマ

NO	テーマ案	概要	期待するアウトカム
1	災害被災者の健康	災害の局面に応じた被災者の健康課題を取り上げ解決方略を提案する	住民教育による誰一人取り残さない社会の実現。そのための地域災害対応能力の向上、避難所環境向上のためのテクノロジー開発、被災地域の緑化、復興に向けた街づくり
2	医療資源へのアクセシビリティ	医療資源の偏在と不足に関連した健康課題を取り上げ解決方略を提案する	遠隔医療テクノロジーの実装提案、伝統的代替医療と調和したプライマリヘルスケアシステムの構築、急性期病院のケアの質の向上、長期ケア施設での大住生を支えるテクノロジーとケアモデル提案
3	認知症者とともに作る介護	認知症者の暮らしのなかの健康課題を取り上げ解決方略を提案する	認知症者への尊厳あるケア提供を支援する介護ロボット開発、ケアラー支援テクノロジー開発、認知症者のWellBeingを促進する環境提案
4	パンデミックと文化	パンデミック下の文化的背景および制度に依存した健康課題を取り上げ解決方略を提案する	隔離による孤独を解消するテクノロジー提案、ワクチン忌避への政策提言、国民への情報提供の在り方提言
5	ホームレスネスと社会	文化的文脈から見たホームレスネスが引き起こす健康課題を取り上げ解決方略を提案する	犯罪者のリハビリテーションプログラム提案、シェルター運営へのテクノロジーの応用、長期的支援のための政策提案

◇テーマ No1　「災害被災者の健康」

受講予定学生　＜看護・医・工・園芸・公共政策・総合国際＞

本テーマでは、災害における被災者の健康に関する課題を取り上げ、その具体的解決方法を提案する。住民参画型のインクルーシブな活動により、誰一人取り残さない社会を実現する。そのために、どのような避難所の環境が必要なのか（建築・都市環境)、必要な社会テクノロジーは何か（ロボット)、さらには、被災地の緑化再生によるグリーン・ヒーリングの応用（園芸・緑化)、復興に向けた新たな街を作るサービスやデザインなど（ランドスケープ・デザイン)、多岐にわたる戦略を構築し実現する。日本やマレーシアの地震や津波、タイやインドの水害などが対象となる。

◇テーマ No2　「医療資源へのアクセシビリティ」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・公共政策・総合国際＞

本テーマでは、医療資源の偏在から発生する課題を取り上げ、その解決法について

提案するものである。遠隔医療（医・IoT・情報・AI）とそのテクノロジー（工・公共政策）を実装することによる問題を政策提言し、代替医療を実現する。さらに、さまざまな場面におけるケアを実現し、医療により QOL（看護・薬・機会・サービス）を向上させることが可能な政策提言とその実行を実践する。

◇テーマ No3　「認知症者とともに作る介護」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策・総合国際＞

認知症者とどのように生活をともにし、尊厳あるケアを提供できるかを社会が考え、社会で提供する（文・法政経・人文・公共政策）。認知症者だけではなく、ケアラーを支援するテクノロジーの開発も重要な課題として取り上げる（看護・医・理・工）。日本などはヤング・ケアラーの課題などがこれに当たるが、国や地域によって、ケアラーも異なる。このような課題を多様な専門により解決する（看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策）。

◇テーマ No4　「パンデミックと文化」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・公共政策・地方行政・メディア＞

今回の新型コロナウィルスのようなパンデミック下において、精神的な健康課題を文化的な背景をもとに健康課題を解決する（看護・地方行政・メディア・総合国際）。孤立、隔離などメンタルストレスに直結するような環境を最先端技術により解決し、新しい形でのコミュニティの形成により、解決する（看護・工・公共政策・地方行政・メディア・総合国際）。このような、パンデミック下における情報の提示から、コミュニティの形成まで、ソフトな提案を実現する。世界共通でありながらその対応が全く異なることも学習する。

◇テーマ No5　「ホームレスネスと社会」

受講予定学生　＜看護・医・薬・理・工・文・法政経・人文・公共政策・総合国際＞

文化的な背景からくるホームレス化が引き起こす健康課題について取り組む。イギリスの労働型ホームレス、インドの路上生活者など多様である。ホームレスに至った経緯と、犯罪者には犯罪防止を、生活困窮者にはシェルターなど、それぞれの国や地域の特性に合わせたホームレス生活者の健康課題を解決していく（看護・医文・法政経・人文・公共政策・総合国際）。特に、政策提言が重要であり、それを実現する医療看護ネットワークをどのように推進するかを提案する（人文・公共政策・総合国際）。

本事業は、事前学習、現地演習、バーチャルワークショップを組み合わせて実施することが骨格である。ワークショップをメタバースプラットフォームにて継続的に複数回実施することにより社会課題解決のシナリオ case が蓄積していく。これを GRIP の社会課題解決演習で活用することにより、現地演習の学習の質の向上を図り、現地演習での学習の質の向上はバーチャルワークショップでのシナリオ・ケース・スタディの精度の向上につながるという好循環を期待する。

(4) GRIP の将来展望

本プログラムの特徴は、地域ケア創生に関わる学部、大学院の国際的ネットワーク構築、複数の国の複数の専門領域の学生が、お互いからお互いについてお互いに学びあうことにより地域ケア創生を目指した社会課題解決方策の共有、COIL と現地演習をハイフレックスに混在させた継続的な学習の実現である。従来大学生が現地ボランティアとして活動しさまざまな体験から経験的に獲得してきた社会課題解決のための実践能力の向上を可視化し、正規の学習プログラムとして履修管理と単位認定するものである。また、社会課題の解決に不可欠な専門職連携実践能力の獲得を大学院生レベルで正規科目とする試みでもある。

地域ケアを創生し、持続可能な開発目標３ Universal Health Coverage を実現することのできる専門職が GRIP により育成されることにより、WHO などの国際機関での活躍、ヘルスプロモーション関連の NGO での活躍を期待できる人材育成プログラムになり得る。またこれらの人材の国際ネットワークの強化に貢献することができる。

魅力的な大学間交流

本事業では、インドのシンバイオシス大学、英国のレスター大学、オーストラリアのモナシュ大学と連携し、グローバル地域ケア IPE プラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP）を実現させる。上記の質の保証のために、３つの大学とはカリキュラムの調整を行なっているが、それぞれの大学で以下のような強みを有していることにより、特徴あるプログラムの内容を適切な場所で実施し、さらなる大学間の交流を実現させる。

(1) シンバイオシス大学（インド）の特徴

2000 年代以降に著しい経済発展を遂げたインドにおいて、先進的な看護教育を実施している。一方で、インドは、さまざまな地域課題を有しており、連携大学の学習フィールドとして、貧困、持続、人口の課題に取り組むことができる大学となる。これまでの連携を強化してプログラムを着実に実施する。

(2) レスター大学（英国）の特徴

看護発祥であり、看護先進国にある英国において、地域看護に強い大学である。卓越した知識を有し十分な実践教育が可能な大学である。また、千葉大学の医学部との連携が強くグローバル IPE+から発展した、先進看護工学などを実践できる。これまでの医療連携を強化してプログラムを着実に実施する。

(3) モナシュ大学（オーストラリア）の特徴

広大な国土のもと、遠隔医療の最先端国でもあり、その一翼を担う大学である。他の３つの国とは全く異なる国土の成り立ちにより、ネットワークでの看護が発達している。これらの技術を知識として習得するプログラムや次世代遠隔看護を積極的に検討する大学である。千葉大学とはすでに 30 年近い歴史がありプログラムを着実に実施できる。

以上のように、学習の質保証とそれを利用した多様な大学間交流を加速させる。

1-2-6. 達成目標

将来の関係を見据えた連携強化に資する目標について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本事業の特徴は、1. 地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築、2. GRIP プログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有、 3. COIL と現地交流をハイフレックスに混在させ継続的な学修を実現であり、この特徴をもとに、以下の評価視点を設定した。

1. 地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築

・定量的目標：2022 年度派遣・受入学生を 10 名で開始し、最終年度 2026 年度には派遣・受入を 40 名に拡大する。地域ケア創生に関わる人材育成のため大学間連携および部局間連携を 3 件程度新たに締結する。

・定性的目標：副専攻 GRIP が完成し、 6 つのオンライン科目および専門職間社会課題解決演習が運用され、カリキュラムおよび授業改善のための評価が終了し、改善が定期的に行われている。そのためのプログラム委員会およびプログラム評価委員会が定期的に開催されている。GRIP 科目が JV-Campus に搭載され、視聴活用されている。

2. GRIP プログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有

・定量的目標：事業展開期間において、毎年定期的にメタバースでの自国の地域ケアに関する課題・解決目標・方策を共有する成果発表会が開催され、case シナリオが最終年度において少なくとも 10 例蓄積している。

・定性的目標：GRIP 履修により参加学生の専門職連携実践能力、文化的対応能力と文化的謙虚さ、社会課題解決能力が向上している。また各フィールドにおける社会課題の解決方策オプションが増えており、かつ他国への解決方策の移転可能性が明らかになっている。

3. COIL と現地交流をハイフレックスに混在させ、社会課題解決に関する継続的な学修を実現

・定量的目標：メディア授業、リアルタイムオンライン、E ポートフォリオ、メタバースミーティング、メタバースプレゼンテーション、ケーススタディシナリオシミュレーション教材が効果的に配置され、稼働し、8 割以上の受講学生が学習到達目標を達成している。

・定性的目標：参加大学間で専門職間社会課題解決のための継続的な学習が行われている。

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

事業計画全体における中間評価における達成目標を以下の 3 つの点において、定量的目標及び定性的目標を設定する。

1. 地域ケア創生に関わる学部大学院の国際的ネットワーク構築

・定量的目標：2022 年度派遣・受入学生を 10 名で開始し、2023 年度には派遣・受入を各 15 名とする。地域ケア創生に関わる人材育成のため大学間連携および部局間連携を 1 件程度新たに締結する。

・定性的目標：副専攻 GRIP の 6 つのオンライン科目が 2023 年度に完成しており、専門職間社会課題解決演習トライアルがインドにおいて 2023 年度に実施されている。また日本におけるトライアルフィールドが 1 か所以上決定している。カリキュラムおよび授業改善のための評価項目が明らかになっている。そのための GRIP に関するプログラム委員会およびプログラム評価委員会が 1 回以上開催されている。GRIP 科目のうち 3 分の 1 程度が JV-Campus に搭載され、視聴活用されている。

2. GRIP プログラムで相互の国で学び合い自国の地域ケア方策を共有

・定量的目標：2023 年度にメタバースでの自国の地域ケアに関する課題・解決目標・方策を共有する成果発表会が開催され、case シナリオが 2023 年度に少なくとも 2 例完成し、 2 例が完成に向けた準備を行っている。

・定性的目標：GRIP 履修の学修者評価スケールおよび成績評価基準を参加大学で合意している。専門職連携実践能力については千葉大学が開発した Chiba Interprofessional Competency Scale の使用を予定する。文化的対応能力と文化的謙虚さについては世界で数種類開発されている Cultural Competency Scale から選択、専門職間社会課題解決能力については本事業で開発するため、その方法論が確定している。

3. COIL と現地交流をハイフレックスに混在させ、社会課題解決に関する継続的な学修を実現

・定量的目標：メディア授業、リアルタイムオンライン、E ポートフォリオ、メタバースミーティング、メタバースプレゼンテーション、ケーススタディシナリオシミュレーション教材が効果的に配置され、稼働している。

・定性的目標：2023 年度に継続的な学修実現に向けた初期課題が明確になっている。

養成しようとするグローバル人材像について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本プログラムは、千葉大学で全学部・全大学院を対象として実施する。社会課題の解決はまさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要とされるためである。

本プログラムで要請する人材像は、Universal Health Coverage 推進のために地域ケアを創生できる専門職である。具体的には、こどもたちの健康状態の改善のためのアクションを取ることができる、その国に必要な医療機器、介護機器を開発できる、健康的な環境を考慮した地域開発ができる、健康資源へのアクセシビリティを改善する、健康習慣の獲得のための教育ができる、高齢者のポリファーマシーの改善に取り組むことができるなど、どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課

題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人、が養成する人材像である。Universal Health Coverage のスローガンである「すべての人に健康を」を実現させるため、あらゆる専門領域の人材にこの Universal Health Coverage を定着させ推進するための、世界規模の人材育成を行う。

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

採択後ただちに、副専攻 GRIP の設置準備に取り掛かり、2023 年度までに７つの科目（合計８単位）を開講する。この７科目は全学共通の新規科目と看護学研究科の開放科目（一部名称変更を行う）の２種類となっている。

〇全学共通の新規科目

専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning　ISL)、Cultural Competency and Cultural Humanity、社会課題解決基礎、社会課題解決応用

〇看護学研究科の科目の開放

専門職連携基礎、専門職連携実践１、専門職連携実践２

このように構成し、学内にあまり多くの科目を設置せずスムースに展開する。また、専門職間社会課題解決演習についてはトライアルで行う。これらの科目の学修者評価と科目評価のルーブリックの試行が終了している。また専門職連携実践能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さ、社会課題解決能力の客観的測定指標について参加大学と合意形成が完了している。

学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

(1) 本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

表４　外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

単位：人（延べ人数）

	外国語力基準	達成目標	
		中間評価まで（～2023 年度まで）	事後評価まで（～2026 年度まで）
	【参考】本事業計画において派遣する日本人学生合計数	25	115
1	学部向け GRIP 履修・Global Health and Nursing Ⅱで単位認定（CEFR B1 以上）	15	50
2	GRIP 副専攻履修学生（CEFR B2 以上）	8	20
3	博士後期課程 Global 演習で単位認定（CEFR B2 以上）	2	5

(2) 外国語力基準を定めた考え方

千葉大学では、現在入学後に TOEFL によるプレイスメントテストを入学生全員に実施している。この結果は、その後の学力別クラス編成に利用している。現在では５段階で、CEFR の定める B1(TOEFL iBT 71 以下)、B2(72-79)、B2+(80-94)、C1(95-)、C2 の５段階としている。千葉大学ではスーパーグローバル大学創成支援事業において、グローバル人材としての外国語力基準を CEFR の B2+以上、TOEFL iBT 80（TOEIC730）点以上と定めている。その目標数は、令和５年度までには、学部では 5,600 名 46.7%、大学院では 2,000 名 44.4%を目標としている。本事業では、この SGU で目標としている能力を有していることを条件とするため、大学院生はこの CEFR の B2 以上、TOEFL iBT 80（TOEIC730）程度をプログラム参加の要件とする。学部生に関しては B1 とする。

(3) 事業計画全体の目標達成に向けたプロセス(事業開始～2026 年度まで)

本事業では、英語によるディスカッションおよびプレゼンテーションで英語力を必要とする。大学院生は CEFR の定める B2+以上のレベルの学生を対象とし、学部生は B1 以上の学生を対象とする。千葉大学では、令和２年度入学の学生より、英語カリキュラムを全面的に改訂して、卒業に必要な単位数を増加させ、専門科目を英語により学習する「アカデミック・プレゼンテーション」を主に実施している。さらに、令和元年度以前に入学した学生には、外国語の授業（必修）以外に、イングリッシュ・コミュニケーション（ブリティッシュ・カウンシルとの連携による会話やディスカッション主体の授業)、イングリッシュ・ハウス（常勤教員によるプレゼンテーションやディスカッションのスキルアップ・トレーニング）の３つの英語学習を備えている。プログラムに参加する学生には、その英語のレベルに合わせて、イングリッシュ・コミュニケーションの履修や、イングリッシュ・ハウスでのトレーニングを推奨し、プログラムでのディスカッションや学生同士のチュートリアルに対応できるようにする。また本事業では、様々な課題に関する現地でのインタビューおよび会議への参加、専門家からの意見聴取などを想定している。従って、そのための英語力を確保することを要件とする。この能力は、選抜時点にチェックできるようにする。また、学部生が副専攻 GRIP を聴講することも可能とする。なお、令和２年度より開始された英語カリキュラムの改訂により、令和４年度以降に専門科目の英語による授業が実施される。これは学部の授業であるが、本プログラムで提供される授業の一部を解放して学部生に受講させることも可能である。以上のように、英語の授業の倍増、単位外授業としてのイングリッシュ・ハウスでの学びを通じて語学力の目標を達成させる。

(4) 中間評価までの目標達成に向けたプロセス（事業開始～2023 年度まで）

本事業では、英語のレベルをクリアしていることを選抜の要件とするが、選抜時に英語の要求レベルに到達していない、あるいはスキルをあげたいと希望する学生

は、イングリッシュ・コミュニケーションおよびイングリッシュ・ハウスで実施している、全学共通のディスカッションとプレゼンテーション用の授業を、英語のレベルによって受講する。授業は以下の６つの種類を構築する。（１）英語によるジェネラル・コミュニケーションの取得（インタビュー方法など）（２）英語によるディスカッションのポイントと討議内容のまとめ方の構築（３）英語によるプレゼンテーションのプロセスの理論と実践（４）英語によるプレゼンテーション・マテリアルの作成法（５）スチューデント・チュートリアル・システム（STS）に対応する英語による指導方法の基礎（６）ビジュアル・サマリー・レポート、ポートフォリオ、プレゼンテーション資料の作成方法これらの内容を含めた事前学習コンテンツを利用する。これらの授業はすべてオンデマンド方式で行う。さらに、必要に応じて、プレゼンテーションやディスカッションは、イングリッシュ・ハウスのネイティブの教員の個別指導、看護学研究科のアカデミック英語担当教員の指導を受けられるように調整する。

学生に修得させる具体的能力のうち、外国語力以外について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本事業で学生に習得させる具体的能力は、A.専門職連携実践能力および B.社会課題解決能力である。専門職連携実践能力は社会課題解決能力の前提にあり、この二つに共通する具体的能力に文化的対応能力及び文化的謙虚さが含まれる。これを学部生と大学院生に効果的に修得させるため、以下の通り展開する科目ごとに学習到達目標を示す。

A.専門職連携実践能力

WHO が示す専門職連携教育の学習到達目標がチームワーク、専門職の役割と責任の理解、コミュニケーション、内省と学習、住民・患者とのニーズの把握を伴う関係性の構築、同僚への倫理である。この到達目標を基盤として本事業における学習到達目標を図 5 の通りに設定した。

図 5　専門職連携実践能力

B.社会課題解決能力

SDG s の取り組みを参考に、社会課題を見出しアセスメントし、目標と評価の視点を設定したうえで具体的な方策を立案し、実施に向けたアクションを取ることができること、また挑戦し失敗から学ぶことができることとともに、現地の文化や制度をリスペクトし、住民及びステークホルダーと良好な関係を維持しながら社会変革を進めていくことのできる能力であるとした。この能力を獲得することを学習到達目標として図 6 の通りに設定した。

地域のアセスメント評価	社会政策等の方策立案
地域課題の抽出	効果測定の評価計画立案
実践型課題の解決目標設定	地域における合意形成

図 6　社会課題解決能力

また社会課題解決能力は学生の準備状態に応じて図 7 の通りに定める。学部生レベルでは、社会課題に関するフィールドワークスキルとデータ収集方法を理解し、実際に地域住民と指導の下でコミュニケーションをとることができ、これらの意見と情報から部分的な課題解決の方向性を検討できること、博士前期課程では地域住民の意見とともに地域のステークホルダーの意見を集約分析したうえで、実践活動に参加し、学生チームの意見をまとめ改善案を提案できること、博士後期課程では、社会課題解決にむけたトータルソリューションの実践ができることを到達目標に学生のレディネスをアセスメントし適切な到達レベルを設定する。

低い
入門・導入

高い
実践・アドバンス

学生のみによる既存資料からの知識の獲得	専門家・実践家・利用者・地域住民らによる OD	専門家・実践家・利用者・地域住民らによる リアルタイム講義・ディスカッション	現地での施設・コミュニティ・組織・プログラム 見学	現地での施設・コミュニティ・組織・プログラム 見学＋一部活動参加	現地での施設・地域・プログラム活動 シャドウイング・運営活動への参加	現地での施設・地域・プログラム活動 実践計画立案 コンサル SV(super vision)	現地での施設・地域・プログラム活動 実践計画立案・実施・評価 コンサル SV	現地での施設・地域・プログラム活動 人材育成 政策提言など コンサル SV	現地・当事者への移管 遠隔支援 コンサル SV
				直接介入		直接介入 間接介入			間接介入 持続可能性
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

医療系学部2年生～4年生　医療系学部5年生～6年生/修士　博士後期課程

図 7　専門職間社会課題演習学習到達目標のレベル

以上の学習到達目標を達成するために、本事業で設定する副専攻 GRIP 科目の到達目標を表 5 の通りに定める。

表 5　副専攻　グローバル地域ケア IPE プラス（GRIP）各科目到達目標

NO	科目	単位	選択/必修	学習到達目標
1	専門職連携基礎	1	選択	IPEの必要性、理論的背景をSDGSと関連付け説明できる。専門職連携実践活動のタイプと分類を説明できる
2	専門職連携実践１	1	選択	WHOが提案している専門職連携実践の学習到達目標、役割と責任、コミュニケーション、患者利用者住民との関係構築の内容と方法を説明できる
3	専門職連携実践２	1	選択	WHOが提案している専門職連携実践の学習到達目標、チームワーキング、同僚への倫理的実践、自己の省察の内容と方法を説明できる
4	Cultural Competency and Cultural Humility	1	選択	文化的謙虚さ及び文化的対応能力の内容と具体的な行動を説明できる
5	社会課題解決基礎	1	選択	社会課題の解決に必要なプロジェクトマネジメントのプロセスを説明できる
6	社会課題解決応用	1	選択	社会課題の解決に必要な合意形成（アコモデーションとコンセンサス）、対立の分析と解決が説明できる
7	専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Social Learning）	2	必修	学部レベル、修士レベル、博士レベルごとに設定する（詳細は図4）

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

本事業 GRIP を受講した学生はこれまで述べてきた通り、GRIP 各科目の学習到達目標を達成したことを確認できた場合に単位認定をする。そのため派遣学生、受入学生の人数が予定通りに推移し、2022 年度それぞれ 10 名、2023 年度それぞれ 15 名の学生が GRIP 専門職間社会課題解決演習まで履修し単位認定ができれば、グローバルな地域ケア創生を専門職連携により実現できるコンピテンシーを獲得できたと判断できる。

なお、これまで IPE を受講したことのある学生については、GRIP 1 から 3 を既修得単位として読みかえる。また看護学部 4 年生で学部選択授業 Global Health and Nursing I,および II を受講した学生については、GRIP4 から 6 を既修得単位とする。また看護学研究院博士前期課程共通基盤科目専門職連携実践論および専門職連携教育論、災害時専門職連携演習はおなじく GRIP 科目 1， 2， 3 を既修得単位とする。2023 年度までにこのような既修得単位認定の仕組みを作り、医療系学生の履修しやすさに配慮する。

質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について

(1) 事業計画全体の達成目標（事業開始～2026 年度まで）

本事業は、大学間の国際的な連携により、多様な領域の学生が連携して社会課題解決への取り組みを実施するなかで、お互いからお互いについてお互いに学びあいつつ、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤とした専門職連携実践能力、社会課題解決能力を獲得することを目指すものである。その究極の目的は、Universal Health Coverage の推進にある。この目的を参加大学が共有しつつ、以下の表 6 に示す 2 つの Phase、

5 つの step で推進する。

2026 年度以降の展望として多様な国の多様な専門性を有する地域ケア創生人材の国際ネットワークを形成し、Universal Health Coverage を実現する専門職の輩出により、WHO など国際機関で活躍する人材育成プログラムとして確立することを目指す。

表 6　質の保証を伴った大学間交流の枠組み形成プロセス

年度	Phase	Step	プロセス
2022	1	1	教材、教育ロジスティックス、教育プログラム質保証の仕組みづくり シンバイオシス大学で社会課題解決演習およびバーシャルワークショップのトライアル
2023		2	ISLトライアルスタート 参加大学プログラム委員会による管理と学修の質保証を本格稼働 副専攻GRIPプログラム完成、他大学に参加呼びかけの準備
2024	2	3	GRIPを周知普及する。ドイツ（ライプチヒ大学）、アメリカ（シンシナティ大学）、台湾（台北医学大学）、北アイルランド（アルスター大学）、オーストラリア（シドニー大学）、ベトナム（ハノイ大学）を候補とし準備を進める。
2025		4	プログラム評価委員会を設置し、質改善の仕組みをスタートさせる 社会課題解決プロジェクトのフォローアップスタディをスタートさせる
2026		5	GRIPの全体評価を行い、継続実施のためのシステムを構築する

(2) 中間評価までの達成目標（事業開始～2023 年度まで）

表 6 の Phase1 が、本事業における質の保証を伴った大学間交流の仕組み構築に関する中間評価までの達成目標への形成プロセスである。本事業の中間評価達成目標は、①参加大学間で教育プログラム委員会、評価委員会などの設置に向けて合意している。②学生の選抜条件、履修ルール、成績評価ルーブリック、学修者評価に関する方法と評価項目について合意している。③①および②の活動により大学間の人事交流事例が増加する、の 3 点である。なお、メディア授業プラットフォーム、メタバース、オンラインの環境整備は 2022 年度中に完成させ、学習環境として十分整える。

1-2-7. 5 年間の学生交流および展開段階のまとめ

下記の表 7 の通り、5 年間の事業展開とともに学生交換国および学生数を増加する予定としている。

表７　５年間の事業展開および学生交換国および学生数

年		学生交換数		学生交換国		展開段階	
年次	年度	派遣	受入	学生の派遣国	学生の受け入れ国	PHASE	STEP
初	2022	10	10	インド	インド	1	1
2	2023	15	15	インド、英国	インド、英国		2
3	2024	20	20	インド、英国、オーストラリア	インド、英国、オーストラリア	2	3
4	2025	30	30	インド、英国、オーストラリア他	インド、英国、オーストラリア他		4
5	2026	40	40	インド、英国、オーストラリア他	インド、英国、オーストラリア他		5
計		115	115				

1-3. GRIP 推進のための組織と体制

1-3-1. GRIP 推進委員会の設置

GRIP 推進のため、初年度である 2022 年度は学内を中心に、組織と体制を下記の図 8 の通り策定した。

国際的な IPE プログラムであり、IPERC の下部組織として位置づけ、亥鼻 IPE に係る教員も GRIP 推進委員として加わった。また、海外連携大学は連携大学 GRIP 推進委員会として、さらに外部者を GRIP 評価委員として委員会を形成する。

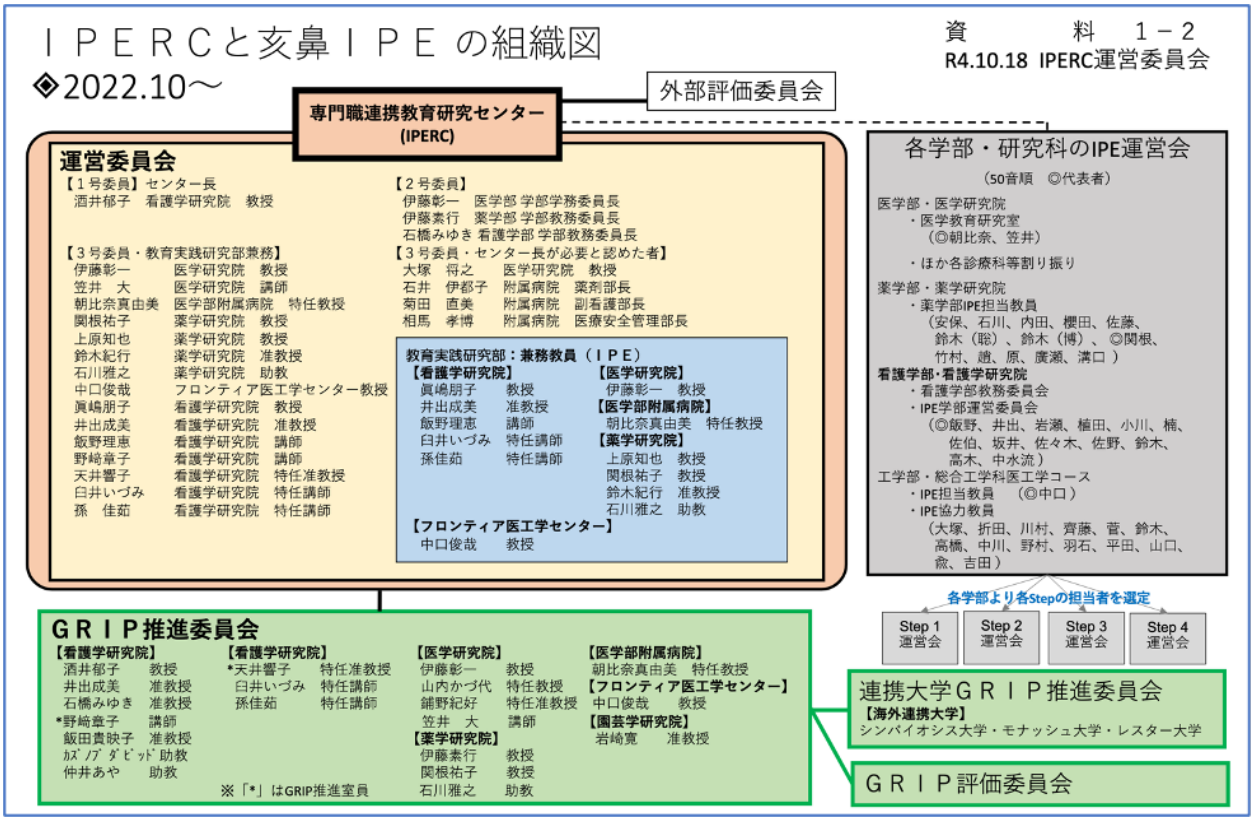


図８　GRIP 推進委員会と関係部署等の組織図

1-3-2. GRIP にかかわる規定の整備

規定の改定

GRIP 推進委員会の設置にあたり、千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター規程に以下の条文を追加し、令和５年４月１日より施行した。

（グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会）
第１３条　グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program。以下「GRIP」という。）に関する事業を推進するため，センターに，GRIP 推進委員会を置く。
２　GRIP 推進委員会に関し必要な事項は，別に定める。

規定の制定

以下の通り、千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター　グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会に関する内規を新たに制定し、令和５年４月１日より施行した。

千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター　グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会に関する内規

（趣旨）
第１条　この規程は，千葉大学大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター規程第１３条第２項の規定に基づき，グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program。以下「GRIP」という。）推進委員会に関し必要な事項を定める。
（目的）
第２条 GRIP の教育，実践，研究を実施し，またプロジェクトの運営に関する関係機関との調整や状況の管理を行うことにより，GRIP 活動の発展・充実に資することを目的とする。
（組織）
第３条　委員会は，次に掲げる委員をもって組織する。
一　大学院看護学研究院附属専門職連携教育研究センター長（以下「センター長」という。）
二　医学部，薬学部及び看護学部の教務担当委員長
三　その他センター長が必要と認めた者
（任期）
第４条　委員の任期は２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。
（委員長及び副委員長）

第５条　委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。
２　副委員長は，委員の互選によって定める。
３　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
４　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故あるときはその職務を行う。
（会議）
第６条　委員会は，委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。
２　委員会の議事は，出席委員の過半数の同意をもって決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。
（委員以外の出席）
第７条　委員長は，必要と認めるときは，委員以外の者を委員会に出席させ，意見を聴くことができる。
（GRIP 評価委員会）
第８条　プログラムの質の評価と改善を実施するために GRIP 推進委員会に GRIP 評価委員会を置く。
２　GRIP 評価委員会に関し必要な事項は，別に定める。
（小委員会）
第９条　委員会が必要と認めたときは，小委員会を置くことができる。
２　小委員会の名称，組織及び運営については，委員会が定める。
（事務）
第１０条　委員会の事務は，GRIP 推進室，亥鼻地区事務部総務課において処理する。
（雑則）
第１１条　この内規に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，別に定める。
附　則
この内規は，令和５年４月１日から施行する。

【制定理由】
グローバル地域ケア IPE プラス創生人材の育成プログラム推進委員会設置に伴い制定するもの。

2. 2022 年度の取り組み

2-1. 大学院博士前期課程副専攻 GRIP の開講準備

本 GRIP プログラムは、千葉大学の Global Education 大学院国際実践教育の該当科目として、開発・実施を行うものである。

2-1-1. Global Education 大学院国際実践教育

千葉大学の Global Education（https://global-education.chiba-u.jp/）の一つである、「大学院国際実践教育」とは、「大学院国際実践教育は、将来グローバルに活躍できる高度な実践型人材を育成することを目的とした千葉大学の大学院グローバルプログラムで、海外協定校の学生との協働学習を中心とした大学院国際実践教育の指定科目を、主専攻である研究科・学府での修了要件単位以外で、所定の履修要件に基づき履修するもの」である（https://global-education.chiba-u.jp/globalstudies/）。

本 GRIP プログラムにおいては、2022 年度の申請時より、この大学院国際実践教育に該当するプログラムとして開発・実施することを想定し、千葉大学学務部国際企画課と調整を行ってきた。選定・採択後には、実質的な準備に着手し、2023 年度には下記の図 9 の通り、「大学院国際実践教育」の全 9 プログラムのうちの一つとなった。

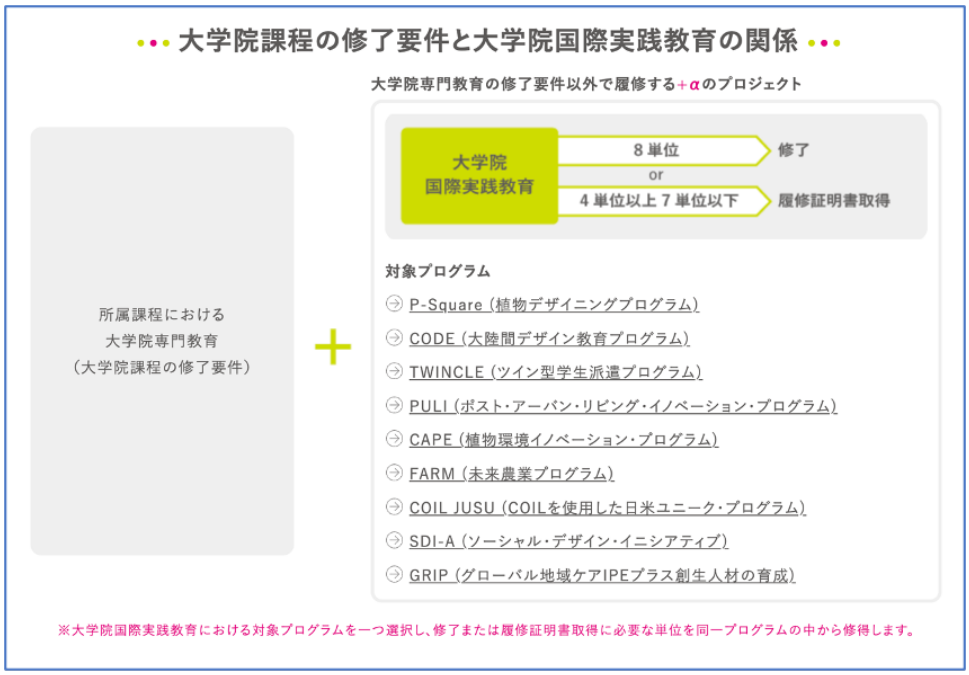


図 9　大学院課程の修了要件と大学院国際実践教育の関係（千葉大学，2023 年度）
（千葉大学　Web サイトより，https://global-education.chiba-u.jp/globalstudies/）

上記の図 9 にも示した通り、「大学院国際実践教育」の学修については、「修了」と「履修証明書取得」の 2 通りがあり、本 GRIP プログラムは「修了」のパターンとして設定する。つまり、図　にもあるように、各大学院生が所属課程における大学院専門教育(大学院課程の修了要件)に加えて、GRIP の指定する 7 科目（8 単位）を履修し単位認定されれば、大学院国際実践教育 GRIP 修了とする。なお、これら 7 科目については、すべてが自由科目であり、千葉大学の全学部・全研究科所属の学生が履修可能である。

2-1-2. 看護学研究科での開講準備

副専攻としての、大学院国際実践教育 GRIP 修了のための 7 科目開講は、2022 年度に千葉大学大学院看護学研究科において承認され、同看護学研究科において 2023 年度の 10 月に開講する。これら 7 科目の概要は以下の通りである。

講義科目については、第 4 ターム（10、11 月）であり、演習科目である「専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Service Learning: ISL）は、2022 年度はターム 5, 6 であり、オンラインでの事前学習開始は 1 月頃、現地渡航・演習は 2 月、事後のオンライン学習は 3 月実施としている。大学院国際実践教育 GRIP 修了認定のためのこれら 7 科目の履修順序は、特に規定しない。7 科目計 8 単位が認定されれば、同修了認定となる。また、これらの科目は個別の履修も可能である。さらに、亥鼻 IPE の科目を終えている学生については、専門職連携基礎、専門職連携実践 1、専門職連携実践 2 については、既修得単位での読み替えも可能である。

表 8　GRIP 関連科目一覧

授業科目	単位数	形態	授業方法	授　業　科　目　の　内　容
専門職連携基礎	1	講義	メディア授業（非同期・双方向）	IPE(Interprofessional Education)の起源と理論的背景、必要性を SDGs の関連から論述し、基本的な理論から専門職連携実践活動を学ぶ。
専門職連携実践 1	1	講義	メディア授業（非同期・双方向）	専門職連携実践活動に必要な役割と責任、コミュニケーション、患者・利用者・住民との関係構築を学ぶ。
専門職連携実践 2	1	講義	メディア授業（非同期・双方向）	患者・利用者・住民へのサービス品質向上に向けた専門職連携実践のためのリーダーシップとメンバーシップと倫理的実践を学ぶ。
Cultural Competency and Cultural Humility	1	講義	メディア授業（非同期・双方向）	異なる伝統、教育システム、言語を持つ国同士のコミュニケーションを促進するインターカルチュラルな実践を学ぶ。

社会課題解決基礎	1	講義	メディア授業（非同期・双方向）	社会課題の解決に必要な地域アセスメント、課題抽出、目標設定、方策立案、評価計画立案の一連の流れをシミュレーションシナリオを用いて学ぶ。
社会課題解決応用	1	講義	メディア授業（非同期・双方向）	社会課題の解決に必要なステークホルダーとの合意形成と対立の解決方法、コンサルテーションの実際をシミュレーションシナリオを用いて学ぶ。
専門職間社会課題解決演習（Interprofessional Service Learning: ISL）	2	演習	同期/非同期オンライン、現地演習（海外連携大学）	海外の提携大学所在地において、現地のサービス活動にチームとして参加し、健康に関連した社会課題解決に取り組む。事前学習、現地演習、事後のバーチャルワークショップにより構成する。

各科目についてはコンテンツを作成中である。専門職連携基礎、専門職連携実践 1、専門職連携実践 2 については IPERC での蓄積を下に、Cultural Competency and Cultural Humility については専門家であるメーカー亜希子氏のコンサルテーションを受けつつ構成する。社会課題解決基礎、社会課題解決応用では、社会課題解決のプロセスとスキルについて学ぶことを目的として、実際に地域における社会課題とその解決のための介入に取り組んでいる学内教員や、学外組織・施設等の支援者を講師として招聘し、実例について学ぶ構成とする。これには ISL のフィールドである活動や組織を含め、ISL につながるものとする。

2-2. 教材開発

2-2-1. 学習要項の作成

学習ガイドとして、学習要項を作成した（資料　参照）。構成は、GRIP プログラムの説明、単位履修、大学院副専攻、獲得する能力・到達目標、具体的な学習の流れ、フィールド演習のトピック、使用する学習ツール、現地演習のフィールドテンプレート、ワークシート、最終プレゼンテーションのテンプレートなどから成る。

内容は GRIP プログラム申請時書類および、参加学生募集説明用資料に準拠しており、特に、獲得をめざす能力とその到達目標については同じ内容である。なお、文化的対応能力である Cultural Competency and Cultural Humility については、GRIP プログラムが、健康関連の社会課題解決の支援についての考察等を目的とするため、目的や内容の近似するものとして、米国の CLAS, cultural competency, and cultural humility, US Department of Health and Human Services Office of Minority Health を参考として内容を追加した。

SIU 学生には大学院副専攻の履修等を除き、取得・向上をめざす能力とその説明、フィー

ルド演習のトピック、提出物や成果発表会などの必須部分をのみを抽出し、ボリュームを少なくしたサマリー版を提示した。ワークシートや最終プレゼンテーション用のテンプレートは、直接記入できるように、別添として提示した。

2-2-2. ワークシートおよび学習成果発表プレゼンテーション用テンプレートの作成

ワークシートの作成

常に取得・向上をめざす 3 つの能力について意識して学習に取り組み、自己の成長と学習課題を認識して計画的に次の学習活動に取り組むため、現地演習について、中間日(4 日目)と最終日 (8 日目) に、リフレクションを行うためのシートを作成し、提示した。なお、本 GRIP プログラムでは多職種共同実践 (IPCP: Competencies for Interprofessional Collaborative Practice) 能力取得を目標の一つとしてチームでの課題解決に取り組むため、学生個々のリフレクションに加え、チーム全体としてのリフレクションシートも加えた。

学習成果発表用プレゼンテーション用テンプレート

社会課題解決の能力の項目について焦点化するために、テンプレート化した。さらに、IPCP についても発表項目として含めた。文化的対応能力については、個人的な体験を主となるので個人のレポートとして記述・提出することとした。

2-2-3. 事前学習課題・資料等の作成

IPCP および課題解決

本 GRIP プログラムの主な目的であり必須要素である IPCP 能力そして、IPCP での課題解決への取り組みについて、GRIP プログラム担当教員でもある IPERC（看護学研究院附属専門職連携教育研究センター Interprofessional Education Research Center）教員が主となってメディア教材を作成した(図 10)。

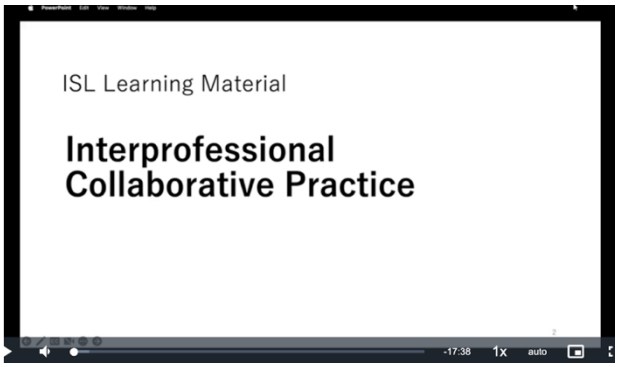


図 10 IPCP の動画教材スクリーンショット

オンデマンドで視聴できるようにした。加えて、WHO の"Framework for Action on Interprofessional Education & Collaborative Practice" (https://www.who.int/publications/i/item/framework-for-action-on-interprofessional-education-collaborative-practice)を閲覧できるように掲載した。

学生同士の交流ならびにチームビルディング推進

各大学内および大学間の学生の交流を推進するために、各学生の自己紹介動画(2, 3 分程度/人)を事前課題として課し、全参加学生がオンデマンドで視聴できるようにした。なお、SIU 学生は渡航準備の VISA 取得手続き等で非常に繁忙であるとのことで、動画で

はなく文書での提出となった。

さらに、双方の大学の学生が、相手大学の学生の学習テーマに関して、自国の資料を提示することを事前提出課題とした。具体的には、千葉大学の学生はインドにおいて子どもに関する課題に取り組むため、SIU 学生がインドの子どもの状況に関する資料(Web 上のデータ、文献等)を検索・提示することを課した。その逆として、SIU 学生は日本で高齢者に関する課題に取り組むため、千葉大学学生は日本の高齢者に関する資料を提示した。特に、千葉大学の参加学生の一人である看護学研究科博士後期課程の学生はプレゼンテーション資料として独自にまとめて英語で作成しており、この資料も SIU 学生に提示した。こうして、双方の学生が、まずは自国のことについて調べ、そして他学生の学習を支援するという、相互学習ならびに交流を促進する仕組みとした。

千葉大学学生については、渡航前に、対面での集合は困難であったが、メタバースプラットフォームである oVice においてリアルタイムで全員が集合し、顔合わせや渡航に係る問題提起と検討（インドの学生へのお土産持参について）を行い、チームビルディングに取り組んだ。

日本の地域包括ケアシステム

後述するが、SIU 学生は日本における現地演習テーマとして「日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム」にもとづいて学習活動を行うため、事前にこの地域包括ケアシステムに関する知識を得ておく必要がある。そのため、GRIP 推進メンバーでもある IPERC メンバー教員がメディア教材を作成し、提示した。

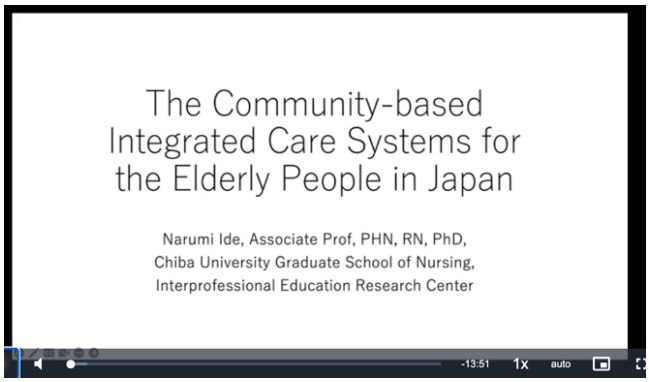


図 11　日本の地域包括ケアシステムに関する動画教材

インドの困難な状況にある子どもに関する資料

千葉大学学生が、インドで困難な状況にある子どもとその支援活動について参加し、学習するため、SIU の SCOPE よりインドの子どもを支援する NGO 活動についての動画教材を提供していただいた。オンデマンドで視聴できるようにした。さらに、インドの危機的状況にある子ども達に関する文献を reading material として提示していただいた。

2-2-4. 学習用プラットフォーム（LMS：Learning Management System）の設定

Google Classroom 上でのクラス作成・設置

千葉大学の LMS である Google Classroom を 2022 年度の GRIP プログラムにおいても使用するため、同プラットフォーム上に、クラスを作成・設置し、教材や課題を配置、提出できるように設定した(図 12, 13)。学習要項においても、そのように予定し、記載した。2022 年度の本プログラムに参加あるいは担当する SIU の参加学生 10 名分、SCIE メ

ンバー1 名分、SCOPE 教員 1 名分、SCON 教員 1 名分の Google Classroom のアカウントを千葉大学本部に申請し、ビジターアカウントとして取得し（学生は後に千葉大学特別聴講生となったためビジターアカウントではなく、通常の学生アカウントとなった)、同クラスに登録し、SCIE にその旨を伝え、ログインの招待を送った。しかし、SCIE 担当者によると技術的に障壁があるとして Google Classroom 自体にログインがなされず、他の SIU 教員や学生も同クラスにログインすることはなかった。その結果として、この Google Classroom 上のクラスを、SIU 学生や SIU の教員は使用できなかった。そのため、SIU 学生については、事前学習教材や課題については、来日前は SCIE 担当者へメール送信にて周知し、提出物も SCIE 担当者よりメールにて回収した。そして、日本に到着後に Google Space へのログイン法をインストラクションし、Google Space 上での資料提示ならびに課題提出とした。学習要項のサマリーやフィールド資料の一部は紙媒体でも提供した。千葉大学学生に関しては、他科目同様に Google Classroom を使用して学習活動を進行した。

図 12　　GRIP プログラム専用の Google Classroom のトップ画面の一部

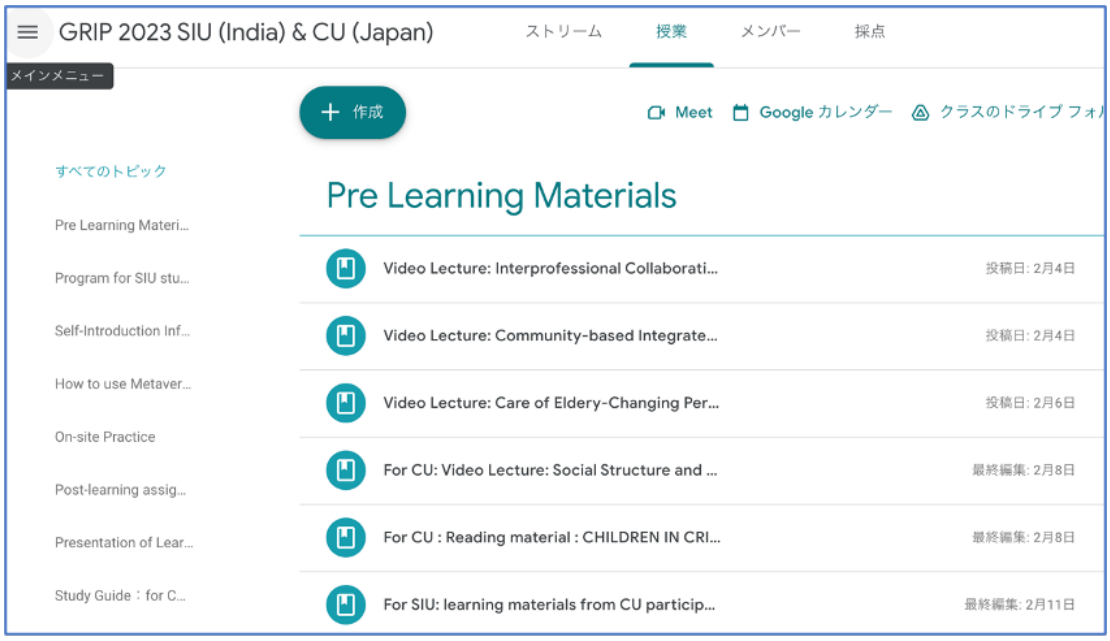


図 13　GRIP プログラム専用の Google Classroom の授業画面の一部

メタバースプラットフォーム oVice のスペース構築

メタバースプラットフォームは架空の共同学習室として使用するために GRIP プログラム専用スペースを契約し、開設した。これについては別の項で詳述する。

2-3. カウンターパートとの連携

先に述べたとおり、この GRIP プログラムでは、2022 年度はトライアルとしてシンビオシス国際大学(インド)と千葉大学(日本)での学生交換、2023 年度はこれにレスター大学(イギリス)、さらに 2024 年度はモナシュ大学(オーストラリア)が加わり、参加学生人数も最終年度である 2026 年度には派遣・受入各 40 人、計 80 人となる予定としている。

2022 年度はシンビオシス国際大学とは実際の学生交換の調整・連携を行い、レスター大学ならびにモナシュ大学とは 2023 年度以降の学生交換のための調整を行った。

以下、カウンターパートである、各大学との GRIP 開始までの交流の経緯と 2022 年度の調整・連携活動状況について記述する。

2-3-1. シンビオシス国際大学（インド）

これまでの本学/部局との交流の経緯

シンビオシス国際大学（SIU）とは、シンビオシス国際大学国際教育センター（SCIE）を介して、同大学看護学部（SCON）ならびに千葉大学看護学部との間で、教育プログラム開発・提供のエージェントである SGS の仲介により、2019 年より国際交流を開始し

た。この学生の交流プログラムは、千葉大学看護学部の自由科目である Global Health and Nursing II(2 単位)に該当するものであり、日本、インドそれぞれにおける社会文化経済的背景と看護・医療との関連を主題とする国際交流プログラムである。2019 年には千葉大学看護学部より、7 名の 2，3 年次学生が現地に実渡航し、実際に現地の医療機関やシンビオシス国際大学看護学部において、施設見学の他、保健医療システムや看護実践、看護教育の状況について、講義を受け、同大学看護学部教員ならびに学生との意見交換などを実施した。特にこの SIU との交流プログラムでは、インドの伝統医療や ASHA といったコミュニティ・ヘルス・ワーカーが活躍する独自の保健医療システム等について、社会文化経済的背景との関連を実際に見聞し、検討するという学修プログラムとなっている。また、SIU ではバディとして学生のアシスタントを配置することによって、学生同士が安心して交流を持てる環境を提供しており、プログラム受講学生からも好評であった。

2020 年以降は、COVID-19 拡大により渡航が困難となったが、オンラインでの国際交流プログラムを、1，2 回／年実施し、2020 年度は 9 名、2021 年度は計 6 名、2022 年度は 8 名が受講・修了した。オンラインであっても、講義や学生のバディとの意見交換等に加え、伝統的かつ代表的な健康法の一つであるヨガの実践などもあり、充実した内容であった。なお、SIU は、千葉大学では看護学部のみならず、普遍教育課程において他学部学生に向けて国際交流プログラムを提供している。

GRIP プログラム実施に向けた 2022 年度の調整・連携

これまでのオンラインプログラム実施や学生派遣等の交流を踏まえ、SIU との学生交換を行うべく、SGS によるコーディネートを経て、まずは大学間協定締結を行った。2022 年 9 月 1 日付にて、シンビオシス国際大学と千葉大学との大学間協定が看護学研究院が窓口となって締結され、発効となった。SGS とも連携しながら SIU との国際部である SCIE との調整を継続し、同年 11 月には千葉大学より、GRIP 推進委員会メンバーが SIU を訪問し、SCIE と学生交換に関する具体的な打ち合わせを実施した。さらに、フィールド演習については、SIU ではすでにカリキュラムの一部として、大学近隣の施設や NGO にてサービス・ラーニングを行う Symbiosis Community Outreach Programme and Extension（SCOPE）を提供しており、同 SCOPE の担当教員との打ち合わせやフィールド演習候補である村などの視察を行った。さらに 2022 年度は初回でありかつトライアルとして、SIU からは SCON Symbiosis College of Nursing 看護学部/看護学研究科の学生を千葉大学に派遣するとこととなった。SCIE の案内にて、学生の宿泊場所や学習室などを視察し、調整を行った。以降は主にメール等にて調整を継続した。

2-3-2. レスター大学（イギリス）

これまでの本学/部局との交流の経緯

レスター大学（University of Leicester: UL）は千葉大学医学研究院との間で部局間協定

を締結しており、2005 年に初めてレスター大学からの教員の訪問があり、以降、定期的な交流を継続している。本学の亥鼻 IPE プログラムの企画段階より、レスター大学教員によるコンサルテーションを受けてプログラムを発展させてきた経緯がある。本学医学部、看護学部、薬学部との合同の IPE 授業の一環として、看護学部からも 2019 年に 4 年次学生 2 名、医学部 6 年生 1 名をチームとして、UL 現地に派遣した。現地でのプログラムは、日本の包括ケアシステムのモデルともなっている integrated care(統合ケア)について学ぶ　integrated care block(ICB) と呼ばれるカリキュラムであり、本学医学部学生ならびに看護学部学生は、現地の医学生らとともに講義や臨床実習に参加した。同大学でのこの ICB は、地域で暮らす高齢者や障害者など慢性的で複雑な健康上のニーズを持つ人々を対象として全人的に評価・診療する能力の涵養をめざすものであり、地域において多職種チームの一員として効果的に働くために必要な知識・技術・態度を身に付けることなどを目的とする IPE プログラムである。ICB には、貧困地域での生活困窮者や路上生活者を支援対象とする診療所での臨地実習も含まれており、社会経済的背景や関連する政策等についても比較・検討する学修内容となっている。この ICB でのプログラムは、まさに GRIP の基盤とも言える内容となっている。2020 年以降は COVID-19 パンデミックによって、このプログラムは保留となっていたが、パンデミック後には学生交換を再開することとして、合意を得ていた。

GRIP プログラム実施に向けた 2022 年度の調整・連携

UL での GRIP プログラム開始のために、2023 年 1 月中旬に、本学より GRIP 推進委員会メンバーが現地を訪問し、ICB 担当教員らと打ち合わせ等を行った。2023 年度からの GRIP プログラムとしての学生交換の時期や人数、フィールド演習先となるフィールド等について検討した。その結果、UL においては ICB を基盤としてフィールド演習を行うこととなった。その後も具体的な調整を継続している。

2-3-3. モナシュ大学（オーストラリア

これまでの本学/部局との交流の経緯

モナシュ大学は、1994 年より、千葉大学との間で大学間協定を締結している。また千葉大学大学院看護学研究院附属の専門職連携教育研究センターの教員は、モナシュ大学での IPE プログラムを視察するために 2012 年に現地を訪問した。その際に、スチューデント・クリニック、デジタル診療および E ラーニングシステムなどを見聞し、亥鼻 IPE プログラムの改善のための参考とした。また、2020 年にグローバル IPE の一環として、IPERC が中心となって 3 名程度の派遣および受け入れを行う事として、そのためのプログラムも開発していたが、COVID-19 パンデミックにより中止となった。実渡航を伴う派遣および受入は不可となったが、グローバル IPE および Global Health and Nursing II の授業の一環として、オーストラリアにおける看護活動等についてオンラインでの講演をモナシュ大学教員に提供してもらうなど交流を継続している。

GRIP プログラム実施に向けた 2022 年度の調整・連携

GRIP プログラムでは、モナシュ大学とは 2024 年度の学生交換実施を予定している。このため、2023 年 3 月に、本学より GRIP 推進委員会メンバーが現地に赴き、うち合わせを行った。2024 年度の学生交換に備え、新たにフィールド演習のトピックとしてメンタル・ヘルスを加えることやそれに合わせた日本でのフィールド準備など、具体的な調整を開始し、その後もメール等で継続している。

2-4. メタバース環境の開発

2-4-1. メタバース環境の開発

メタバースとは

メタバース metaverse とは、電子空間（ネット）上の世界であり、利用者がログインやプレイしないときも存在する架空の世界である。それは、VR(virtual reality)や、ある活動用のプラットフォームとして、metaverse platform と呼ばれる。

GRIP プログラムへのメタバース導入の背景

GRIP プログラムでは、国や時差を越えて、学生同士や関係の教員等が参加し、自由にディスカッションする、あるいは、バーチャルワークショップとしてプレゼンテーションを行うなどの空間として、メタバースを導入することとした。メタバースの利点としては、ビデオ会議アプリのように立ち上げている時のみ参加可能ではなく常時、その空間があり、いつでも参加できることがある。学生は、仮想の共同学習室として使用することができる。また、ネット上に格納された教材へのリンクを張ることにより、メタバース空間内で自己学習を行う事も可能である。このような背景から、メタバースをプラットフォームとして導入するに至った。

メタバースプラットフォームの選定

GRIP プログラムにて使用するメタバースプラットフォームの選定にあたり、いくつかのものを実際に試用した。その結果、ゴーグル等の機器や特定のソフトウェアなどの特別な準備が必要なく、かつアバターなどの作り込みが不要ですぐに誰でも参加することのできる Web ベースのメタバースプラットフォームである「oVice」を選定した。千葉大学が求めるセキュリティ基準にも達している。これは、日本の企業が開発・提供しているメタバースプラットフォームであり、主に日本の多くの企業、大学、学会などの組織が利用している。日本の外務省においても、帰国留学生のオンラインカンファレンスに使用された実績を有している(https://ovice.in/ja/international-online-conference/)。また、空間上のデザインも教室風、公園風、さらには任意の画像ファイルをアップロードすることにより完全にカスタマイズできることも、有用性が高く、選定の理由である。oVice では、誰がそのスペース内にサインイン(参加)しているのか可視化されており、スペース内ではアバターで近づき、立ち話のように

話しかけることも可能である。誰が参加し、どのように集合しているのかということが可視化されることが、管理の立場でも利点となる。他のグループワークを中心とする学習活動などでも有用性が高い。さらに数十人希望でのテレビ会議も可能である。ダッシュボートの機能は有償で追加すれば、交流や発話数、滞在時間などのログをデータとして取得することも可能であり、今後はその導入も視野に入れている。

メタバース導入と利用

GRIP プログラム着手とともに、GRIP プログラム専用の oVice スペースを契約し、利用を開始した。まずは使用方法を周知するために、千葉大学の GRIP プログラムメンバー教員等に入室を促し、oVice による説明会を複数回開催した。

レイアウトは、図 14 の通り、oVice の既存のレイアウトデザインをカスタマイズして、実際の GRIP 推進室の学習室と同様のカラーリングとして明るい学習室風とした。

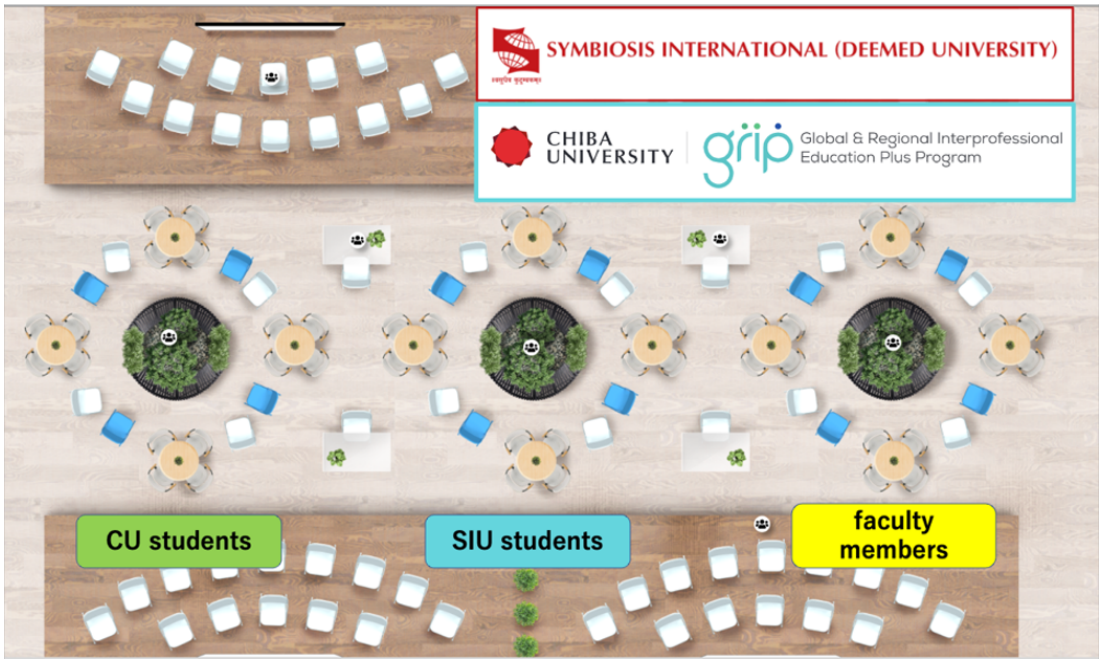


図 14　GRIP プログラムの専用の oVice スペース

参加学生に対しても、既存のマニュアルを用いて利用法を説明し、使用した。

図 15 は、学生が自主的に oVice 内で集合し、プレゼンテーションの準備を行っているところである。このように、特に、この GRIP プログラムのように、同じ千葉大学内の学生と言えども学部や研究科などが異なり、一度に対面で集合が困難な場合などは仮想の共同学習室である oVice は有用である。

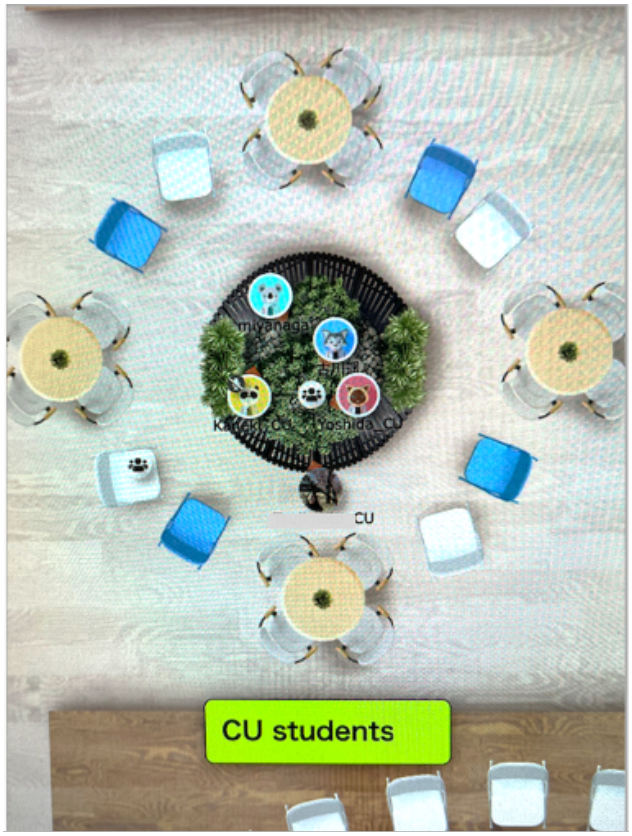


図 15　千葉大学参加学生が oVice 内で集合しグループ学習を行っている様子

最終の成果発表会としてのプレゼンテーション前には、ネット回線や参加人数の増加に備え、回線の増強やスペース内のオブジェクトやリンクを外し、軽量化するなどの調整を行った。そのレイアウトについては、成果発表会の項に記述した。

2-5. ISL プログラム開発

ISL（Interprofessional Service Learning）は本 GRIP プログラムの中核である。3 つの部分から構成され、オンラインでの事前学習、パートナー大学所在地に渡航・滞在しての現地演習(、オンラインでの事後学習となる。事前学習は教材開発のところで記述した通りである。事後学習は、メタバースを使用しての学習成果発表会とその準備であり、これについてはメタバース開発ならびに学習成果発表の項にて記述した。

本項では主に、現地での演習であるフィールド演習について記述する。

2-5-1. フイールド演習の概要

大テーマと小トピックの設定

GRIP プログラムでは健康に関連する社会課題に焦点を当てるが、先述の通り、参加学

生が学習しやすいようにある程度の焦点を絞って、テーマを提示する。テーマに合わせたフィールドを教員が選定・組み合わせ、スケジュールを組んで現地演習として提供するものである。テーマは申請書にも記述した通り、災害、貧困等である。これらのテーマから、さらに SL（Service Learning）フィールドの対象特性（例：子ども、母子、障害者等）に合わせてトピックを設定するなど、学生の学習が焦点づけられるように柔軟に設定する。

後述するが、2022 年度の、日本およびインドでの、各学生の学習テーマは表　の通りである。

表 9　各大学の参加学生の学習テーマと訪問施設・組織（2022 年度）

	Partner universities and location of on-site practice	Theme	Areas, organizations, facilities to visit/participate in	Program duration
Chiba University students	Symbiosis International University (Pune, India)	Children in difficult circumstances in India	Village schools, NGOs supporting children in need	February 14th (Tue) to February 22nd (Wed), 2023
Symbiosis International University students	Chiba University (Chiba and Tokyo, Japan)	Health of older people and community-based care systems in Japan	Self-help groups, home care facilities, disaster preparedness education, NPOs supporting people in need, walking promotion at shopping malls, etc.	March 1st (Wed) to March 9th (Thu), 2023

現地演習のスケジュール概要

現地到着後、オリエンテーションの後、学生はチームに分かれる。5 人/チームとなり、教員が提示するトピックをチームで選択し、トピックに焦点化して、チームでの役割分担や情報共有などを行いつつ学習を行う。2022 年度では、両チームの学生全員が数カ所の組織や施設にて活動に参加し、最終日には各グループのテーマについて、学習成果について発表を行う。この学習成果発表は、最終のプレゼンテーションと同じ、教員が提示したテンプレートを用いて行う。その時点で、教員や現地学生からのフィードバックを得て、最終の学習成果発表会までにさらに洗練する。

学生交流

インド、および日本双方において、インドでは GRIP 参加学生が千葉大学側の GRIP 参加学生のバディとなって、常に数人がプログラム活動に同行する。日本では、SIU 学生来訪時に、GRIP で SIU を訪問した学生が数人、同行する。さらに、現地演習の最終プレゼ

ンテーション日には双方の参加学生が全員揃い、プレゼンテーションを視聴することとなる。学習活動においても交流を行い、共同で学習を行う。

また、演習時間以外での学生同士の交流を推進している。

2-5-2. シンビオシス国際大学（インド）でのフィールド演習

インドでは国の政策としてサービスラーニング（SL）が大学のカリキュラムに組み込まれることとなっており、SIU（シンビオシス国際大学）ではすでに、SCOPE ：Symbiosis Community Outreach Programme and Extension (SCOPE)という一つの部門として組織、サービスラーニングフィールドやカリキュラムが確立されている（https://siu.edu.in/Health-Facilities.php)。活動のターゲットは、健康課題に関連したものから IT 教育や経済的教育提供など多岐にわたるものである。

GRIP プログラムでは、目標がこの SCOPE と非常に合致していることから、SCOPE でのフィールドをサ SL の活動の場として SIU および SCOPE との合意に至った。現地への引率や briefing なども SCOPE の教員が主となり、SCIE との共同にて SL 提供されることとなった。

2022 年度のトライアルにおいては、インド現地でのフィールド演習は、SCOPE からの提案にて、困難な状況にあるこども達をテーマとして、ストリートチルドレンやスラム街のこども達への支援活動への参加を主とすることになった。具体的なプログラム内容およびスケジュールについては、後述する。

2-5-3. 千葉大学（日本）におけるフィールド演習

GRIP 採択以前より、千葉大学は地域との連携を推進してきた実績がある。現在も、地域住民や団地といったところで共同でのプログラムを展開している教員も少なくない。また GRIP プログラムを中心となって推進する看護学研究院においても教員自らがサービス活動の組織メンバーとして活動していたり、あらたな支援組織を立ち上げたり、さらには学生の実習としてすでに SL を取り入れているといった状況があった。それゆえ、GRIP プログラム申請時には、すでに演習組織・場所はいくつか確保されており候補はあった。採択後、さらに GRIP 推進室および IPERC が中心となり、全学レベルでの SL フィールドを把握し、データベース化した。

さらにこれらのフィールド群について、社会課題とそれへの支援という軸と地域毎にクラスター化を行った。SIU との調整の中で、インドでは「困難な状況にあるこども達への支援」という対象特性に関する大きなテーマが提示され、千葉大学においても SIU 学生へ提示するテーマを、日本の喫緊の課題である高齢化とそれに関連する健康課題とした。さらに、フィールドの追加や調整を行いつつ、2022 年度の最終的な日本での学習テーマは、「日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム」とした。小トピックとして、高齢者の健康に関わる、「災害準備教育」と「social capital 」とした。GIRP 申請時からの計画通り、連日異なる施

設を訪問･見学し、活動に参加するプログラムとなった。千葉大学内の健康関連施設として、千葉大学医学部ならびに千葉大学フロンティア医工学センターの見学も含めた。最終的なフィールドおよびトピックによるクラスタ等は、表 10 の通りである。

表 10　日本におけるフィールド演習のトピックおよび具体的内容と組織・施設のクラスタ

トピック	内容	組織・施設	エリア
ソーシャルキャピタル	1. 生活困窮改善・防止、孤立・孤独防止【自助・互助・共助】	①山友会他(路上生活者支援)	墨田・浅草エリア
	2. 日常における健康増進機会と場の提供と活用【自助・互助】	②イオンショッピングモール・モール内ウオーキング（海浜幕張）	葛西・東京湾エリア
	3. 住民によるつながりの構築・維持【自助・互助】	③葛西のインド人コミュニティ ④東千葉地区自治会	千葉市中央 葛西・東京湾エリア
	4. 在宅ケアと集いの場所提供による包括的な健康の支援【互助・共助】	⑤Neighborhood Care(訪問看護・居場所づくり他) ⑥なごみの陽訪問看護ステーション	千葉県北エリア（柏）
	5. 在宅医療ケア提供による地域生活支援【共助】	⑤Neighborhood Care(訪問看護・居場所づくり他) ⑥なごみの陽訪問看護ステーション	千葉市中央エリア（40 分）
災害準備	4. 災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動【自助・互助・共助】	④東千葉自治会 ⑥なごみの陽訪問看護ステーション ⑦災害シチズンサイエンス(災害準備教育) ⑧りべるたす(共同生活援助)	千葉市中央エリア 墨田・浅草エリア
先端医療・医療工学開発	5. 高度医療ケア・技術開発・実践	⑨先端医療（大学病院、CCSC） ⑩フロンティア医工学センターラボ見学	千葉市中央

2-6. ISL プログラム派遣　実施

2-6-1. 参加学生

募集・選考の結果、看護学部 3 名、国際教養学部 1 名、医学部 3 名、薬学部 1 名、看護学研究科 2 名の計 10 名の学生が参加者となった。

2-6-2. プログラム期間

2023 年 2 月 14 日(月)～2 月 22 日(水)の 8 日間であった。

2-6-3. 学習内容

学習テーマ

前述の通り、Children in difficult circumstances in India を大テーマとして SIU および SCOPE より提示いただいた。現地演習 2 日目に、SCOPE 教員と千葉大学の GRIP 担当教員とで検討し、学生を 2 チームに分け、教員から 2 つのトピックを提案し、学生が焦点化したいトピックを選択した。この度の 2 つのトピックは、「Street Children in India」と「Disabled Children and Society」となった。現地演習最終日には、学生はこれらのテーマで学習成果についてプレゼンテーションを行った。

現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

図 16 の通りである。主な活動場所は、スラム街やストリートチルドレンに教育を提供している NGO の Sarva Seva Sangh、成人の精神障害者の入所施設である Sadhana Village, そして知的障害を有するこどもの入所施設である Aditya Prangan の 3 つであり、他は村の酪農家や母子保健推進施設、SCOPE スタッフの自宅、歴史的建造物を見学などした。各 NGO の説明は、表 11 の通りである。学習と次の学生交流の様子は、図 17 に示した写真の通りである。

SYMBIOSIS INTERNATIONAL (DEEMED UNIVERSITY)

Symbiosis Centre for International Education

GRIP- Study India Program

Study India Program	Weekday					Weekend		Weekday		
	13/Feb/23	14/Feb/23	15/Feb/23	16/Feb/23	17/Feb/23	18/Feb/23	19/Feb/23	20/Feb/23	21/Feb/23	22/Feb/23
	1st Day	2nd Day	3rd Day	4th Day	5th Day	6th Day	7th Day	8th Day	9th Day	10th Day
	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday
AM		Breakfast 08:30 AM to 09:15 AM	Breakfast 08:30 AM to 09:15 AM	Breakfast 07:30 AM to 08:15 AM	Breakfast 07:30 AM to 08:15 AM	Breakfast 08:30 AM to 09:15 AM	Breakfast 07:30 AM to 08:00 AM	Breakfast 08:30 AM to 09:15 AM	Breakfast 08:30 AM to 09:15 AM	Breakfast 07:30 AM to 08:00 AM
	Arrival 11:00 PM at Pune Airport	Opening Program FRRO Orientation 09:30 AM to 11:30 AM	Briefing about the visit and Day schedule 09:30 AM to 11:00 AM	Departure for the Visit 08:30 AM NGO- Sarva Seva Sangh, Visit to Mobile School & exposure visit to Ramwadi Urban slum 09:30 AM to 01:00 PM	Departure for the Visit 08:30 AM Community Work in Groups 09:30 AM to 01:00 PM	Briefing about the visit and Day schedule 09:30 AM to 10:15 AM Departure for Visit - Sadhana Village (Kolwan) 10:30 AM Activities at NGO 11:30 AM to 01:00 PM	Depart for Heritage Walk 08:00 AM Cultural Heritage Walk 09:00 AM to 12:30 PM	Briefing about the visit and Day schedule 09:30 AM to 10:15 AM Departure for Visit - Aditya Prangan 10:30 AM Briefing about Activities of NGO followed by outdoor activities with students 11:30 AM to 01:30 PM	Presentations & Closing program 10:30 AM to 12:30 PM	Departure 08:15 AM
		Welcome Lunch 11:45 AM to 12:30 PM	Brunch 11:15 AM to 12:00 PM	Lunch 1:15 PM to 02:00 PM (at Symbiosis Vimannagar campus)	Lunch 1:15 PM to 02:00 PM (at Symbiosis Vimannagar campus)	Lunch (01:15 PM to 02:00 PM)	Lunch (12:45 PM to 01:30 PM)	Lunch (01:45 PM to 02:30 PM)	Lunch (12:45 PM to 01:30 PM)	
PM		Visit to Village (Rihe/ Ghotawade)& Briefing about the Program 01:00 PM to 04:30 PM	Visit to NGO- Sarva Seva Sangh Vadagaonsheri (Near Viman Nagar) 12:15 PM to 04:00 PM	Group Activity 02:30 PM to 04:30 PM Group 1: Khulewadi site near Chandan Nagar Group 2: Khandwe Nagar site	Lecture: Education for Social Change 02:30 PM to 03:30 PM Debriefing and Interaction regarding NGO- Sarva Seva Sangh 03:45 PM to 04:30 PM	Community Visit 02:00 PM to 03:00 PM Activity with Sadhana Village students 03:00 PM to 04:30 Pm	Freetime for shopping with buddies 01:30 PM to 03:30 PM Depart for campus 03:45 PM	Indoor activities with students 02:30 PM to 04:30 PM Depart for campus Time to work on final presentations 05:30 to 07:30 PM	Freetime	
		Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	Dinner 07:30 to 08:30 PM	

Please Note: Schedule is subject to change

図 16　SIU でのフィールド学習スケジュール

表 11　SIU でのフィールド演習における訪問組織・施設に関する説明(SCOPE から学生に配布)

About the organizations

Sadhana Village Pune

Sadhana village is an NGO located in Chikalgaon village in Pune district, India. It was started in the year 1994. Sadhana village primarily focusses upon working with differently abled (mentally challenged) individuals who are above the age of 18 years. Sadhana Village has adopted a home-based rehabilitation method. Accordingly, Sadhana Village has established a very distinctive residential care for adults who are faced intellectual disabilities. Three homes are established, with each home accommodating 10-15 individuals who are differently abled. Each individual is engaged in through the day through a variety of activities that are designed to provide the differently abled individuals with a good quality of life. A home is driven by a team of house mothers, caretakers, service staff and also volunteers.
In addition to working with the special friends, Sadhana Village also works on a wide variety of projects, which are aimed at development of rural areas and women empowerement. The activities include, libraries and awareness sessions for women, activities focused at improving the education and health standards of women and children in the villages, water conservation and lift irrigation projects etc.

Aditya Prangan

Aditya Prangan is a residential school for differently abled children located in Ambadvet village in Pune district, India. The school is residential in nature, and the curriculum along with the schedule for the day is designed so as to enable the students to be self-reliant. Therefore in addition to regular schooling, skill development and sports activities are also included into their day to day schedule. The education activities are driven by a team of trained, and experienced special educators. The children who study at Aditya Prangan are divided into three groups based upon their I.Q. and they are imparted school education commensurate with their intellectual potential. The students are also involved in various activities such as drawing, handicrafts, music and agricultural activities.
Aditya Prangan also accommodated individuals who are above 18 years of age. These individuals are involved in various agro-based activities, gardening etc. This

ensures that the individuals get adequate physical exercise, outdoor play time and are also mentally stimulated.

Sarva Seva Sangh (SSS)

Sarva Seva Sangh, started its operations in the year 1979 by offering courses such as tailoring and embroidery, type writing etc to people. However, with the onset of rapid development in Pune city the needs of the people and their job prospects also underwent a sea change. Thus, SSS chose to reach out to children who in difficult circumstances in 1990s.

Currently SSS works with a wide variety of children who are faced with exceptionally difficult circumstances in various social situations. It provides institutional care to children who are living and etching their livelihoods from streets and pavements. Institutional care includes provision of safe accommodation, food, education and other emotional and mental needs of a child. Additionally, SSS also equips the resident children with various job-oriented skills.

The classroom on wheels, provides the children with access to education at their homes. The objective of classroom on wheels is to provide the children with informal education with the aim of initiating them to formal education. Currently, over 250 children are taught through mobile classroom.

SSS also caters to mental and physical health needs of the children through a team of social workers, doctors and nurses who provide medical care to children wherever required.

図 17　千葉大学学生のインドでの現地演習の様子

2-6-4. 学生交流

プログラム中には、現地 SIU の GRIP 参加予定学生（千葉大学学生が帰国後、SIU 学生が千葉大学を来訪というスケジュール）が数人、バディとして千葉大学学生に同行し、交流を行った。訪問先でもバディの学生が追加で説明を行うなど、学習での交流を行った。最終日には、GRIP 参加予定学生 10 名全員が参加し、千葉大学学生のプレゼンテーションを視聴した。最終プレゼンテーション後には、千葉大学生も SIU 学生も伝統衣装であるサリーを着て写真撮影を行うなどの交流があった。

2-6-5. 生活支援

千葉大学学生は全員がキャンパス内にある SIU 運営のホテルに宿泊していた。1 名の学生が食中毒様の症状を呈し、3 日間、現地活動への参加をとりやめホテル内の自室で療養し、

その後回復し、他学生とともにプログラムに参加した。この体調不良の学生には同行した千葉大学教員と、SCIE ならびに現地コーディネーターが対応し、宿泊所での療養だけで回復に至った。現地活動を 3 日間とりやめて学生は、他の学生から情報を共有してもらい、ともにプレゼンテーションを行った。

予定通りにプログラムを終え、参加学生全員が無事に帰国した。

2-7. ISL プログラム受け入れ　実施

2-7-1. 参加学生

SIU にて募集・選考の結果、看護学部学生 2 名、看護学研究科学生 8 名の計 10 名の学生が参加者となった。2022 年度は初回であり、トライアルであるので看護学部(SCON: Symbiosis College　of Nursing)から優秀な学生を選抜し、派遣することになった。

2-7-2. プログラム期間

2023 年 3 月 1 日(水)～3 月 9 日(木)の 9 日間であった。

2-7-3. 学習内容

学習テーマ

前述の通り、「Health of older people and community-based integrated care systems in Japan　日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム」を大テーマとした。下位のトピックとして、ソーシャルキャピタル、災害準備の 2 つを設定した（図 18 参照)。千葉大学医学部附属病院ならびに千葉大学フロンティア医工学センター見学については、見学の目的として、先端医療・医療工学開発、とした。

プログラム初日に、インドでの学習と同様に、学生を 2 つのチームに分けた。2 日目の朝のブリーフィングにて、各学生チームが焦点化するトピックを選択し、決定した。千葉大学生がインドで行ったのと同様に、現地演習最終日には、学生はこれらのテーマで学習成果についてプレゼンテーションを行った。

現地演習スケジュールと訪問施設・組織等

表 12 の通りである。この受入プログラムについては、インドでのプログラム同様に、2，3 箇所の施設・組織での活動参加として、同一施設・組織に 2，3 日続けて参加し、一つのトピックについて学習する案も出されたが、前述の通り、プログラム立案会議にて、同一施設での連日の活動は行わない趣旨であり、トライアルとして表 13 の通り 10 カ所の組織・施設での活動というスケジュールとなった。施設の規模や個人宅への訪問看護同行など、10 名では多すぎる場合があり、数名ずつに分けて 2 回訪問するなどの方法をとった。10 カ所の組織・施設についての説明は、テンプレートでの資料に示した通りである。健康な住民が自ら集まり、体操等を行う活動から、企業が健康促進の機会を

提供する活動、そして障害を持つ人々の入所施設、在宅で療養する人々への訪問看護同行、路上生活者や生活困窮者を支援する組織での活動など、幅広いものとなった。Neighborhood Care では、場所がもともと一般の一軒家であり、日本の一軒家での生活の体験や、利用者である地域住民との懇談を持ち、利用者の皆さんの手作りの昼食をいただき、御礼としてインドの音楽やダンスを披露するなど、交流の機会となった。災害シチズンサイエンスでは、石橋准教授らの提供によるアプリを用いて墨田近辺を散策し、災害時の設備などを確認し、偶然にも設備を管理する地域住民の方から直接お話を聞くこともできた。また、訪問看護の同行では、施設スタッフのアレンジにより、患者とご家族の皆様にはインドの学生並びに通訳の同行をお引き受けいただき、在宅での療養の様子を見せていただき、お話を聞かせていただいた。

2-7-4. 学生交流

日本においても、インドでと同様に、すでに GRIP 参加学生として SIU を訪問した学生がバディとしてプログラムに同行した。毎回 2，3 人の学生が同行した。最終プレゼンテーション時には、学部によっては実習時期と重なっているため 10 名全員が参加することはできなかったが、9 名の学生が参加した。また、プログラム以外でも、SIU 学生の要望に応じて千葉大学学生が夕食の同伴や、浴衣の着付けなどを行っていた。

2-7-5. 生活支援

SIU 学生は、千葉大学の留学生寮に空きがなく、千葉駅直結のホテルに滞在した。コーディネーターである SGS と、千葉大学教員による google スペースにて 24 時間連絡がとれる体制で対応した。連日、異なる施設に電車やバスで出かけ、インドに比べると圧倒的に歩行距離が多かったとのことだが、体調不良者もおらず予定通り演習を終えた。

食事については、ほぼ全員が食品や料理等の吟味と選択に時間を要した。レストランやフードコート、コンビニエンスストアにおいても日本語のみの表記であることがボトルネックであり、介助を要した。さらに、時間通りの集合が困難であることが何度かあり、集合時刻を早めにするなどして対応した。

2022 年度　GRIP プログラム　日本を実施場所とする GRIP プログラム ISL のフィールド

1. 日本を実施場所とする ISL のテーマとトピック、フィールド、活動等（案）

1）テーマ　：Health of older people and community-based integrated care systems in Japan
日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム

2）概要：世界で最たる超高齢社会である日本では同時に少子化および人口減少の状況にあり、増加し続ける高齢者の医療・福祉等のアクセス向上、そしてその結果としての健康寿命の延伸や QOL の向上は、世界においても喫緊の課題である。2022 年度の日本での ISL は、高齢者の健康と QOL 向上のために、多様な社会文化経済的状態ならびに健康レベルにある住民の生活場所や、住民自らが行う自助や互助、そして民間の施設や組織による支援の場においてフィールドスタディを行い、高齢社会における社会課題とその具体的解決策ならびに枠組みとしての地域包括ケアシステムについて学習する。

3）トピックと扱う内容、フィールドとなる組織・施設等

トピック	内容	組織・施設	エリア
ソーシャルキャピタル	1. 生活困窮改善・防止、孤立・孤独防止【自助・互助・共助】	①山友会他(路上生活者支援)	墨田・浅草エリア
	2. 日常における健康増進機会と場の提供と活用【自助・互助】	②イオンショッピングモール・モール内ウオーキング（海浜幕張）	葛西・東京湾エリア
	3. 住民によるつながりの構築・維持【自助・互助】	③葛西のインド人コミュニティ ④東千葉地区自治会	千葉市中央 葛西・東京湾エリア
	4. 在宅ケアと集いの場所提供による包括的な健康の支援【互助・共助】	⑤Neighborhood Care(訪問看護・居場所づくり他) ⑥なごみの陽訪問看護ステーション	千葉県北エリア（柏）
	5. 在宅医療ケア提供による地域生活支援【共助】	⑤Neighborhood Care(訪問看護・居場所づくり他) ⑥なごみの陽訪問看護ステーション	千葉市中央エリア（40 分）
災害への備え	4. 災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動【自助・互助・共助】	④東千葉自治会 ⑥なごみの陽訪問看護ステーション ⑦災害シチズンサイエンス(災害準備教育) ⑧りべるたす(共同生活援助)	千葉市中央エリア 墨田・浅草エリア
先端医療・医療工学開発	5. 高度医療ケア・技術開発・実践	⑨先端医療（大学病院、CCSC） ⑩フロンティア医工学センターラボ見学	千葉市中央

図 18　　日本での ISL 学習テーマとトピック、組織・施設等

表 12　現地演習スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
2 月 27 日	2 月 28 日	3 月 1 日 （1 日目）	3 月 2 日 （2 日目）	3 月 3 日 （3 日目）	3 月 4 日 （4 日目）	3 月 5 日
現地 departure	07:30 arrival@Narita lunch@亥鼻	9:00　ホテルピックアップ、オリエンテーション 亥鼻に移動 ⑨大学病院見学 10：00－11：40	10:00 ブリーフィング@ホテルロビー 10:30 各フィールドに向けて出発 A グループ 5 名 12:45～15:00 ①山友会（台東区）アウトリーチ B グループ 5 名 12:45～15:00 ⑤Neighborhood Care(柏)	9:20　ブリーフィング@ホテルロビー、移動開始 11:00 集合@千葉大学墨田サテライトキャンパス ⑦墨田・浅草　災害シチズンサイエンス ブリーフィング	10:00　ホテルピックアップ 11:15 西葛西駅到着 11:30～ ③葛西：インド人コミュニティ、Holi 祭参加	【自己学習】歴史的建造物探訪など
	15:00 ホテルチェックイン	西千葉 Campus tour 13：00-17:30 ⑩フロンティア医工学センター見学 (13:30 正面玄関集合) チーム分け 18：00 解散		11:30～アプリを用いてウオーキング 13:00 再集合 デブリーフィング 13:30 解散	13:00 西葛西駅集合、移動 ③葛西：インド人コミュニティ 14-:00-17:30 ヨギさんご講義(インド文化センター) ＊中間評価(リフレクションシート)	【自己学習】歴史的建造物探訪など
3 月 6 日 （5 日目）	3 月 7 日 （6 日目）	3 月 8 日 （7 日目）	3 月 9 日 8 日目			
A グループ 5 名 8:10 集合@ホテルロビー、移動 9:40～ ⑤Neighborhood Care B グループ 5 名 10:00 集合@ホテルロビー、移動 11:30～ ⑤Neighborhood Care 全員 11:30～lunch@Neighborhood Care 15:00	2 名 8:30 集合@ホテルロビー、ブリーフィング 移動 10:00~11:30 ⑥なごみの陽訪問看護ステーション 8 名 8:50 集合@ホテルロビー、移動 10:00～12:00 亥鼻正門から車で移動 ⑧りべるたす見学 Lunch@イオンモール 14:00～16:00 ②イオンモールウオーキング(海浜幕張) 解散	8:20 集合@ホテルロビー、ブリーフィング、移動 9:30~ ④東千葉地区訪問 A グループは 10:30 まで、 B グループは 11:00 まで、その後自由時間 A グループ 12:45～15:00 山友会アウトリーチ参加	チェックアウト 亥鼻（GRIP 推進室）に移動 9:50　プレゼン準備 10:00～10:50 Final presentation 10:50-11:00 修了証授与(酒井先生) 11:10-11:30 久保田様懇談 11:45-12:00 Joshi 先生講評 ＊最終評価(リフレクションシート) 12:00-13:00 farewell lunch ランチ後ホテル、空港に移動 18：40 Departure@Narita			

表 13　日本でのフィールド演習における訪問組織・施設 1～10 に関する説明

施設・組織等番号	1.　山友会
学習トピックと内容	ソーシャル・キャピタル 1. 生活困窮改善・防止、孤立・孤独防止【自助・互助・共助】
名称	認定 NPO 法人山友会
所在地	〒111-0022　東京都台東区清川 2 丁目 32 番 8 号
施設概要	無料診療、生活相談、炊き出し・アウトリーチ、食堂（食事提供）、宿泊支援、居場所・生きがいづくり、スタディツアーなどの活動を通して、路上生活を余儀なくされた人々との社会的なつながりを築いています。（無料診療・地域保健、生活相談・地域生活支援事業、給食サービス事業、居住支援事業、居場所・生きがいづくりプロジェクト、共同墓地の維持・管理、山谷・アート・プロジェクト）
施設 URL	https://www.sanyukai.or.jp/ https://www.youtube.com/watch?v=WiqNcVSsxUs&t=18s 山友会公式チャンネル　https://www.youtube.com/@npo491 配付資料： 事前視聴 YouTube 動画多数（別紙）
交通機関	最寄り駅 南千住（日比谷線、JR、筑波エクスプレス）
連絡担当教員	野崎
演習時の同行教員	1 回目：無し、　2 回目：野崎
演習日時	1 回目：2023 年 3 月 2 日(木)　12：45～15：00 2 回目：2023 年 3 月 7 日(火)　12：45～15：00
演習時の参加学生人数・氏名	参加学生人数 1 回目：SIU の看護学生 5 名、通訳兼任コーディネーター2 名、計 7 名 2 回目：SIU の看護学生 5 名、SIU 教員 1 名、千葉大学ボランティア学生 1 名、教員(野崎)1 名　計 7 名
演習内容	1. 目標 路上生活者の状況を知る 路上生活者への支援内容を知る 2. 演習活動の内容(予定) 炊き出しのアウトリーチに参加：実際に路上生活者に食事を配布、体調

	を聴取、相談室等の社会資源の紹介 山友会内の仏壇や遺影等の見学・説明を受ける 無料クリニックの見学、患者、診療活動の説明を受ける
当日の スケジュール	集合時刻・場所 1，2 回目とも、12：45 に山友会集合。13 時から現地に移動、食事配布、ブルーテント訪問等。 15 時終了、山友会に移動。15 時半頃解散。 山友会に戻った後に、山友クリニックの見学と説明（10 分程度）。 Joshi 先生のみ徒歩 3 分の「神の愛の宣教者会」にインド人ブラザーに会いに行ったが不在で会えず。
持ち物・服装・ 注意点など	屋外活動となるので、寒くない服装、歩きやすい靴

①山友会　配付資料（抜粋、山友会より配布）

https://www.sanyukai.or.jp/_files/ugd/800a75_06230830f6ea4023bc5a484f848f6c9e.pdf

施設・組織等番号	2.　イオンショッピングモール　モール内ウオーキング
学習トピックと内容	ソーシャル・キャピタル 2. 日常における健康増進機会と場の提供と活用【自助・互助】
名称	イオンショッピングモール　（モールウオーキング） イオンモール幕張新都心
所在地	〒261-8535 千葉県千葉市美浜区豊砂１－１他
施設・活動概要	ショッピングモール 千葉大との共同にて、モール内ウオーキングの効果検証済み。
施設URL	イオンモールウオーキング https://makuharishintoshin-aeonmall.com/news/information/882
交通機関	最寄り駅 京葉線　幕張豊砂駅（当時は海浜幕張駅、そこからバス）
連絡担当教員	野崎
演習時の同行教員	野崎
演習日時	2023年3月7日(火)　14時-16時
演習時の参加学生人数・氏名	参加学生人数 SIUの看護学生10名、SIU教員1名、通訳兼任コーディネーター2名、 千葉大学ボランティア学生2名、教員(野崎)1名　計16名
演習内容	1. 目標 民間企業が住民に提供している健康増進の場と動機付け、方法などを知る 2. 演習活動の内容(予定) ショッピングモール担当者より説明を受ける 実際にコースを歩いてみる、アプリをインストールして使用してみる（任意）
当日のスケジュール	集合時刻・場所 14：00　従業員入り口前(建物外部)集合　（入場者は数日前の事前予約が必要、セキュリティチェック有り） 14：00-15：00　説明（日本語のスライドで日本語での説明、要通訳） 15：00-16：00　実際にアプリを入れて（任意）コース（短い1km のコース）を歩く
持ち物・服	歩きやすい靴

装・注意点など	アプリインストールは任意

②イオンモールウオーキング　説明文書(教員から学生へ)

Reference for AEON MALL WALKING in this afternoon（イオンモールの Web サイト説明文書を英訳したもの）

==========

Let's start! Aeon Mall Walking

Take a casual walk while shopping!

You can use the mall as a walking course.

What is Aeon Mall Walking?

As an initiative to support our customers' healthy lifestyles, we have set up courses inside Aeon Mall and made them open to the public. We also provide leaflets and signs indicating walking distance and calories burned to support your walking!

What makes Aeon Mall Walking different?

4 comfortable features of Aeon Mall Walking:

Make the most of your time while shopping!

By incorporating walking into your shopping routine, you can turn your usual shopping time into a healthy activity.

Not affected by time or weather!

Have you ever planned to go for a walk but then it started raining? At Aeon Mall, you can walk at any time regardless of the weather or time!

Rest spaces for peace of mind

There are plenty of rest spaces throughout the mall, equipped with sofas and benches. You can use them freely depending on your physical condition and pace.

Vending machines and food shops abound!

With vending machines and food shops available throughout the mall, you can replenish your energy and hydration according to your pace. If you get hungry while walking, please enjoy delicious food at the food court or restaurants!

Start with your posture! Walk with a beautiful posture!

The Japan Walking Association's Certified Healthy Walking Instructor supervised videos on walking with a beautiful posture. (Click to play the video.)

☆ Basic form of walking

☆ Warm-up stretch

☆ Cool-down stretch

☆ One point of walking with a bag

To ensure safe and enjoyable walking, we would like to ask you to:

・Pay sufficient attention to your physical condition and those around you, and enjoy walking safely.

・Be especially careful and give way to others during events or crowded times.

・Please refrain from running or walking while looking at your phone, as it can be dangerous.

・Please stop and use the escalator when moving, as it can be dangerous.

・Please note that we cannot be held responsible for accidents that occur during Aeon Mall Walking.

==========

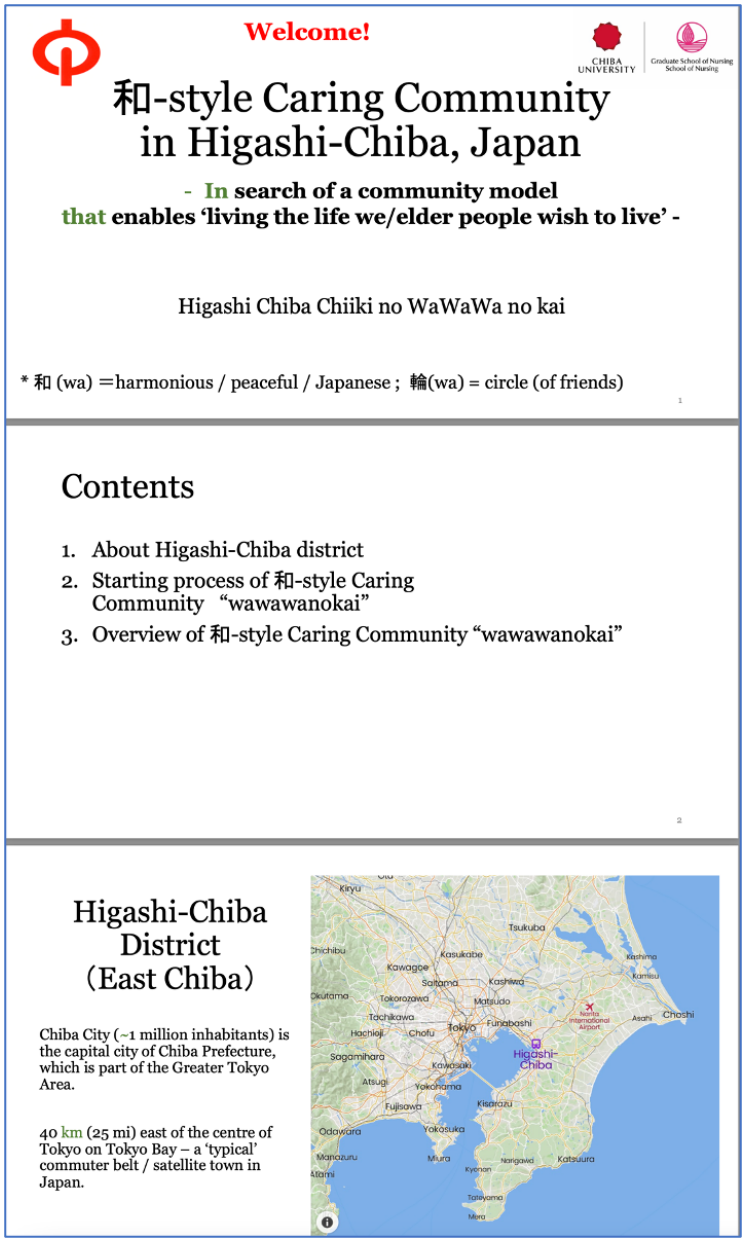
施設・組織等番号	3.　葛西のインド人コミュニティ訪問 　　プラニク・ヨゲンドラ様　ご講演
学習トピックと内容	ソーシャル・キャピタル 　2. 日常における健康増進機会と場の提供と活用【自助・互助】
名称	1. ホーリー祭参加 2. 江戸川印度文化センター
所在地	1. 〒134-0088 東京都江戸川区西葛西 6-11 2. 〒134-0084 東京都江戸川区東葛西 6-23-11
施設・活動概要	1. 第 5 回 色の祭ホーリーの集い（5th Holi Mela in Tokyo 2023 年 3 月 4 日（土）10:00～16:00 西葛西・恐竜公園にて開催。以下 URL より「ホーリー祭り」は、インドやネパールで、春の訪れ祝うヒンドゥー教の春祭りです。黄色、青、緑などのカラフルな色粉と水を掛け合い、春の訪れと豊作をお祝いします。今年も多くのインド人が多く住む西葛西に位置する恐竜公園を会場に開催されます。2019 年以来の開催となり、今回で第 5 回目を迎えます。 2. 江戸川印度文化センター 江戸川区は、葛西地区を中心にインド住民が多く生活する日本屈指のインド人コミュニティを有する。江戸川印度文化センターは、インドに関する正しい情報や教育を発信することを目的に、西インド出身のプラニク・ヨゲンドラ氏が中心となり 2017 年に設立された。ヨガ、語学、料理、美術等の文化的レッスンを開催する他、大型手彫り祭壇を備えた 2 階の印度寺院ではヒンドゥー教の宗教関連行事も行われ、地域に住む日本人と印度人の交流の場となっている。
施設 URL	1. Holi 祭　5th Holi Mela in Tokyo https://event.exantenna.net/tokyo/ironomatsuri-holi.html 2. 江戸川印度文化センター https://rekacorp.com/culture-center
交　通　機　関	最寄り駅 1. 東西線西葛西、2. 東西線葛西
連絡担当教員	1. 無し（SGS）、2. 天井
演習時の同行教員	1. 野崎、孫 2. 野崎
演習日時	2023 年 3 月 4 日(土)
演習時の参加学生人数・氏名	参加学生等人数 SIU の看護学生 10 名、SIU 教員 1 名、通訳兼任コーディネーター3 名、

	千葉大学ボランティア学生2名、教員(野崎)1名　計17名
演習内容	1. 目標 ・日本で暮らす外国人が抱える課題を知る ・島国であり多くの国と比べると文化の混ざりが少ない日本で、誰もが暮らしやすい環境をどのように作っていけるのかを考える 2. 演習活動の内容(予定) ・インド人を中心とした在日外国人が抱える、医療へのアクセス、言語の壁、子どもたちの教育を含む課題について、プラニク・ヨゲンドラさんの講義を聴く。 ・意見交換
当日の スケジュール	集合時刻・場所 10：00　ホテル　ロビー集合 11：10　西葛西駅到着 　　恐竜公園に移動 11：20～　Holi祭参加 13：00　西葛西駅改札集合、移動 14時　インド文化センター集合、講義聴講 17：30　終了
持ち物・服装・注意点など	特になし

施設/組織等番号	4. 東千葉地区自治会
学習トピックと内容	ソーシャル・キャピタル 3. 住民によるつながりの構築・維持【自助・互助】 災害への備え 4. 災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動および支援【自助・互助・共助】
名称	東千葉地区自治会
所在地	東千葉住宅地５自治会集会場
施設概要	自治会 東千葉地区　元気カフェ
施設 URL	https://chiiki-kaigo.casio.jp/chiba/info_services/47866
交　通　機　関	最寄り駅　　JR 東千葉駅
連絡担当教員	井出
演習時の同行教員	井出、野崎
演習日時	2022 年 3 月 8 日(水)　9：30～11：00
演習時の参加学生人数・氏名	参加学生人数：SIU の看護学生 10 名、SIU 看護学部教員 1 名、ボランティア学生２名、通訳兼任コーディネーター2 名、千葉大教員 2 名、計 17 名 10 時半に SIU 学生 5 名、SIU 看護学部教員は移動
演習内容	1. 目標 住民の住民による健康やつながりの維持・構築のための活動を知る 住民の災害への備えについての活動状況について知る(地域住民ならびに地域特性を踏まえた災害準備支援) 2. 演習活動の内容(予定) 地域・組織概要の説明を聞く、 活動や参加者の様子の見学・参加(体操、朝市など) 災害準備・準備支援活動について説明を受ける 意見交換
当日のスケジュール	集合時刻・場所 １．バス集会所到着： 9:30 ２．各位自己紹介　：　9:30 ～ 9:40　　千葉大、わの会 自己紹介 ３．わの会の紹介　：　9:40 ～ 10:00　　わの会の紹介(スライド)

	４．元気カフェ　　：10:00 ～ 10:30　　元気カフェ体操（前半部分） （B グループ 5 名、Joshi 先生と野崎はここで退席、山友会に移動） ５．質疑応答　　：10:30 ～ 11:00　　留学生から、先生から ６．終了　　：11:00
持ち物・服装・注意点など	一緒に運動するので運動できる服装

④東千葉自治会　配付資料（抜粋）　当該組織よりいただいたもの



施設・組織等番号	5. Neighborhood Care（ビュートゾルフ柏、Neighborhood Café）
学習トピックと内容	ソーシャル・キャピタル 4. 在宅ケアと集いの場所提供による包括的な健康の支援【互助・共助】
名称	非営利型一般社団法人 Neighborhood Care
所在地	〒277-0082 柏市緑ヶ丘 11-5
施設概要	訪問看護ステーション(ビュートゾルフ柏) Neighborhood Café 介護保険法に基づく居宅サービス事業等 前号以外の看護、介護、介護予防、生活支援に関する事業 子育て支援に関する事業 成年後見に関する事業 コミュニティカフェに関する事業 地域ケアに関する調査研究、情報収集、情報発信事業
施設 URL	https://neighborhoodcare.jp/
交　通　機　関	最寄り駅　JR 柏
連絡担当教員	酒井、野崎
演習時の同行教員	野崎
演習日時	１回目：2023 年 3 月 2 日(木) ２回目：2023 年 3 月 6 日(月) 詳細は下記、スケジュール参照
演習時の参加学生人数・氏名	1 回目：SIU の看護学生 5 名、SIU 教員 1 名、千葉大教員(野崎)1 名、ボランティア学生 2 名　計 8 名 2 回目：SIU の看護学生 5 名、千葉大学ボランティア学生 4 名、教員(野崎)1 名　計 7 名 昼食前に SIU の看護学生 5 名、通訳兼コーディネーター4 名が合流、昼食時以降　計 16 名
演習内容	1. 目標 訪問看護ステーションと訪問看護の実際を知る 住民の健康やつながりの維持・構築のための支援としての居場所提供について知る 居場所において住民がどのような活動をしているのか、どのような意味があるのか知る

	居場所において住民と交流を持つ 2. 演習活動の内容(予定) 地域・組織概要の説明を聞く 活動や参加者の様子の見学・参加(訪問看護に同行) 居場所において住民の皆さん提供の食事を一緒にとり歓談する 文化的な交流活動として歌唱などを披露する 意見交換
当日の スケジュール	集合時刻・場所 １回目：2023 年 3 月 2 日(木) ２回目：2023 年 3 月 6 日(月) A グループ 5 名：　9 時 40 分現地集合（ホテル発 8：20） 10 時~訪問看護同行、地域の関係者会議同行 11：30～Neighborhood Care に戻りランチ B グループ 5 名：　11：30 頃　現地到着　ランチに合流 全体　　ランチをとりながら自己紹介、懇談、インドの歌・ダンス披露 15 時頃　終了、柏駅で解散
持ち物・服装・注意点など	訪問看護同行に差し支えない服装

⑤Neighborhood Cafe 配付資料（抜粋、施設より配布いただいた）

Photo①

"Neighborhood Café" is in Midorigaoka, Kashiwa City, Chiba Pref. We entertain the eyes of elderly people by various flowers throughout the year. Tomatoes and other summer vegetable are grown on the left side of the photo for the ingredients for lunch here.

"BUURTZORG" at the top of the signboard is Dutch for "Neighborhood Care" and is the trademark of a non-profit home care organization founded in the Netherlands in 2006.

"Neighborhood Care" at the bottom of the signboard is a non-profit corporation established in 2015, providing home service, nursing care and life support services based on the Long Term Care Insurance Act. Six or more nurses are responsible for home-visit nursing care in the community.

"Neighborhood Café" was founded in the fall of 2016 following philosophy of BUURTZORG by "Neighborhood Care" Japan. From 10:00am till 3:00pm the elderly people enjoy chatting, singing and playing games while spending time to know each other.

⑤ビュートゾルフ柏（配付資料　抜粋　施設からいただいたもの）

訪問看護ステーション ビュートゾルフ柏

- 特徴
  - 土日祝日も含めて365日稼働しています
    - ただし、週末は配置数が少ないため必要最低限の訪問にしています
  - ICT（カナミック）による情報連携を積極的に行っています
    - カナミックで連携している事業所の方は当事業所の看護記録をすべて閲覧可能です
    - ICT活用により電話を必要最小化する努力をしています（電話により患者対応が中断してしまうため）
  - 管理者／非管理者の区別がありません
    - 全員対等な同僚として働いています
    - 各患者の対応は基本的に担当看護師が中心になって対応します
  - 在籍型出向により他法人と連携しています
    - 柏訪問リハビリ看護ステーション等の療法士が当事業所に出向しています
    - 逆に当事業所の看護師が柏訪問リハビリ看護ステーション等に出向しています
  - 夜間の待機当番を複数法人で協同しています
    - 上記の在籍型出向を用いて、柏訪問リハビリ看護ステーションと夜間の待機当番を協同しています
    - 毎日の待機当番に負担を感じている他ステーションともぜひ連携できるとありがたいです
  - 働き方改革を意識しています
    - 常勤でも週4日32時間勤務が多く、週3日24時間の短時間常勤者もいます
    - ほぼ常時定時退勤のため17:30（早いと17:00過ぎ）以降は待機当番にしか電話がつながりません

施設番号	6. なごみの陽訪問看護ステーション
学習トピックと内容	ソーシャル・キャピタル 5. 在宅医療ケア提供による地域生活支援【共助】 災害への備え 4. 災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動および支援【自助・互助・共助】
名称	特定NPO　ウェルネスライフパートナーズ 　訪問看護事業　なごみの陽訪問看護ステーション
所在地	〒266-0032　千葉県千葉市緑区おゆみ野中央7丁目35-3
施設概要	• 特別な医療処置等の実施（全内容）、 • 理学療法士、作業療法士,言語聴覚士による訪問リハビリテーションを実施 • 看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士の医療専門職が在籍 • 小児から高齢者まで幅広い年齢層に対応し、終末期の看護、リハビリテーション看護、小児看護、難病や心疾患など進行性疾患や慢性期疾患看護など幅広く対応 • その方の能力を最大限に引き出し、可能な限り自立した生活が（セルフケア能力の評価）その人らしくおくれるように支援 • 24時間対応 • 地域づくりの行事企画、開催、場所の提供など （下記URLより）
施設URL	http://wellnesslife-nagomi.p1.bindsite.jp/pg3000.html https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/12/index.php?action_kouhyou_detail_004_kani=true&JigyosyoCd=1260190439-00&ServiceCd=130
交通機関	最寄り駅　JR鎌取駅からバス、おゆみの南で下車
連絡担当教員	野崎
演習時の同行教員	野崎
演習日時	2022年3月7日(火)　10:00～11:30
演習時の参加学生人数・氏名	SIU学生2名、SGS若尾さん、野崎　計4名

演習内容	1. 目標 訪問看護ステーションおよび訪問看護の実際を知る 訪問看護の他、地域住民の健康づくり推進活動の状況を知る 災害への備えについての活動状況について知る 2. 演習活動の内容(予定) 施設概要の説明を聞く、 訪問看護同行・見学、 地域住民の健康づくり推進活動の見学・あるいは説明を受ける 災害準備・準備支援活動について説明を受ける
当日の スケジュール	集合時刻・場所 集合場所：なごみの陽訪問看護ステーション 千葉市緑区おゆみ野中央７−３５−３ 集合時間：10 時 予定内容：当事業所の訪問看護や地域支援の状況などの説明後、1 名は、訪問看護の実際の見学、もう 1 名は地域住民の自主活動を見学（雨天は中止）予定。 患者さん宅への訪問は、学生と通訳と 2 名で同行させていただく。 訪問スケジュール：9 時 30 分～10 時 30 分、11 時～12 時
持ち物・服装・ 注意点など	持ち物：特になし 服装：自宅や地域に馴染みやすいもの（利用者や地域の方が緊張しない）

⑥なごみの陽訪問看護ステーション　配付資料(抜粋　施設よりいただいたもの)

施設・組織等番号	7. 災害シチズンサイエンス(災害準備教育)ワークショップ
学習トピックと内容	災害準備教育 4. 災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動【自助・互助・共助】
名称	当日の拠点として使用した場所　千葉大学墨田サテライトキャンパス
所在地	〒131-0044 東京都墨田区文花１丁目１９－１
ワークショップ概要	災害準備教育用として開発されたアプリを用いて、実際に1時間強、町歩きを行う。 町歩きを体験し、災害準備教育の重要性や方法について考察する。
施設URL	墨田サテライトキャンパス アクセス　https://www.chiba-u.ac.jp/access/files/access2021.pdf
学生対応者(施設代表)	ワークショップ担当教員：石橋みゆき准教授（看護学研究院）
交通機関	最寄り駅 東武亀戸線　小村井駅　徒歩5分（他にも都バス）
連絡担当教員	野崎
演習時の同行教員	石橋先生、孫先生、野崎
演習日時	2023年3月3日（金）
演習時の参加学生人数・氏名	• SIU(シンビオシス国際大学)：　看護学部学生10名、同学部長　Dr. Joshi　計11名 • CU（千葉大学）：　石橋みゆき先生、石井彩先生、野崎、SGS（通訳：中路様、若尾様　計2名)、ボランティア学生（医学部、看護学部、薬学部、国際教養学部、計6名） うちボラ学生2名欠席　総計18名
演習内容	1. 目標 • 平常時における災害準備教育用として開発されたアプリを用い、実際に街の中を歩いてみることにより、街の中の様子を知る。（ウオーキング体験をする） • すでに発災時に備えて準備されている物品や場所等を知り、減災のための活用方法を考察する。 • 高齢社等の他者への支援としての災害準備教育の必要性や、効果的な方法、自国への移転可能性等について考察する。

	2. 演習活動の内容(予定) 1. 集合、ワークショップの目標・方法・アプリの使用法等の説明を聞く 2. 6, 7 人のグループとなり、実際にアプリを使用しつつアプリに登録されている目標物やコースに沿って歩く。 3. 楽しみながら、約 1 時間強、町歩きを行う。 4. 町歩き後には出発点である墨田サテライトキャンパスに再集合し、感想や意見を交換する。その後、現地解散。
当日の スケジュール	1) ホテル集合の方　(野崎他) 09：20　ホテルロビー集合・出発・千葉駅に移動 09：43 千葉駅発各駅停車「中野行き」出発 10：27　亀戸　着・下車 東武亀戸線にのりかえ 10：33　出発　東武亀戸線「曳舟行き」、10：38　小村井駅（おむらい駅）到着　徒歩 7 分 10：47 頃　千葉大学墨田サテライトキャンパス到着見込み 以下、現地集合に続く 2) 現地集合の方　(SGS 様) 11：00　千葉大学墨田サテライトキャンパス　1 階　集合 2 階に移動し、Briefing（説明・石橋みゆき先生）　2 階 11：20 頃　アプリを入れるなどして出発、(3 グループにわかれて) 町歩き実施 12：50　千葉大学墨田サテライトキャンパス　2 階　集合 Debriefing（感想を述べる） 13：00　グループ写真撮影後、解散
持ち物・服装・ 注意点など	歩きやすい靴、水など各自準備、 専用アプリは可能であれば入れる、同行の日本人がアプリを入れて見せるなどして対応

⑦災害シチズンサイエンス（災害準備教育）ワークショップ　（石橋准教授　提供配付資料）

2023　GRIP (JAPAN)　　March 3, 2023 (Friday)

Walking Tour Preparing for Disaster Using “Mimamoriai” App

NISHI INO MATSU
CHIBA TOMO

What to Do During the Walking Tour

- Using the “Mimamoriai” App, we will walk around the points indicated on the map.
- While listening to the app's voice guidance, we will walk around the town and observe its nature, facilities, and people, with a focus on how we can enhance our disaster preparedness.

Exploring the town with a focus on how we can enhance our disaster preparedness.

- Tips for Walking Safely:
  - ✓ Take breaks as needed, such as stopping to rest or think.
  - ✓ Wear comfortable and appropriate clothing and footwear for walking.
  - ✓ Adjust your clothing to suit the temperature.
  - ✓ Bring water or other hydration options and check for nearby nutrition replenishment options ahead of time.
  - ✓ Walking in an unfamiliar town, or even a familiar one with a new perspective, can be surprisingly tiring.
  - ✓ Allow enough time for the walk and leave extra time for unexpected events.
  - ✓ Prioritize your own questions and curiosities based on your experience.
  - ✓ If there are any concerns, let the teacher know during the preparation time.

Enjoying a town walk.

- Tips for Enjoying a Town Walk:
  - ✓ "Fun" is the driving force that moves people.
  - ✓ Use your five senses to experience the town (pay attention to what your body senses, such as the town's smells, sounds, views, colors, ease of walking, and the terrain's high and low points!)
  - ✓ Discover new findings that are not included in the program.
  - ✓ Confirm the things you have considered in advance.
  - ✓ Enjoy serendipity (be flexible and take advantage of serendipitous events).
  - ✓ Planning is important for enjoying the walk.
  - ✓ On the other hand, there is also learning from things that do not go according to plan.

March 3, 2023

Walking Workshop: Preparing for Disaster using “Mimamoriai” App

- The program was created by students, specifically Team Sumida. Please watch it together with the presentation materials attached separately.
- What you need: a smartphone or tablet (either iPhone or Android is acceptable).
- There are two ways to watch the program:
  - Method 1: Click on the URL: https://mimamoriai.com/programs/Nnk2s9xyevgR0CNV. Please click the URL on your smartphone. If you haven't downloaded the "Mimamoriai" app yet, clicking the URL will direct you to the app download page. After downloading the app, click the URL again on your smartphone to watch the program.

  - Method 2: Scan the QR code (below)

If you haven't downloaded the Mimamoriai app, you will need to scan the QR code twice on your smartphone.

- 1st time: It will take you to the app download screen.
- 2nd time: Follow the download instructions and press "Read" below the text "By reading the QR code, you can join the group and receive information on the home screen" on the screen where the character appears to scan the QR code.

The Mimamoriai app has a limited distribution function that allows you to build connections without collecting personal information. You only need to input your name and affiliation on the bottom of the screen, and you don't need to provide personal information such as email addresses. Also, since only people who know this QR code can watch the program, it is a mechanism that allows people with common goals to connect with each other.

Disaster Citizen Science Exercise
Disaster preparedness town walk

Mukojima area, Sumida Ward
story

A university student who moved to the Mukojima district of Sumida Ward saw a fire and investigated fire prevention measures. As the student researched alleys that use water, I spread it to flood control.

Sumida Ward and Mukojima District
Sumida Ward, Tokyo, is located in the delta between the Sumida River and the Arakawa River, and along with Ota Ward in Tokyo and Higashi Osaka Ward in Osaka Prefecture, it has been known as a representative industrial cluster.

Sumida Ward is currently one of the special wards located in the eastern part of Tokyo, with an area of 13.77 square kilometers and a population of 279,300 (as of October 1, 2022). The population is increasing due to the construction of condominiums.

Until the Edo period, it belonged to Shimousa Province with the Sumida River as its border, and was a rural area. Triggered by the Great Fire of Meireki in 1657, the daimyo and hatamoto mansions were relocated, and the southern Honjo district was divided into towns. Urbanization and industrialization progressed after the Meiji period, and Honjo Ward was established in 1878, and Mukojima Ward was established in 1932 in the northern part of the ward, which was once a farming area. Sumida Ward was in 1947 born from the merger of Honjo District and Mukojima Ward. As a result of these developments, the urban structure of Sumida Ward differs greatly between north and south. The city has survived the disaster, and the urban area has progressed in a state where infrastructure development has been delayed, and there is a complicated topography.

・The Mukojima district has a low non-combustibility rate.
Sumida Ward has been carrying out fireproofing projects for 10 years, but the Mukojima area is still low. This time, I investigated the Mukojima area in detail.

Workshop Guidelines for Disaster Preparing Citizen Science on March 3, 2023 (Friday)

1. Participants:
   • Symbiosis International (SIU): 10 nursing students and the Dean of the School of Nursing Dr. Joshi, totaling 11 participants
   • Chiba University (CU): Prof. Miyuki Ishibashi, Prof. Aya Ishii, Ms. Nosaki, SGS (interpreters: Ms. Nakaji and Ms. Wakao, totaling 2), and 6 volunteer students from the medical, nursing, pharmaceutical, and international liberal arts departments, totaling 20 participants.

2. Timetable:
   1) Participants meeting at the hotel (Nosaki and others):
   9:20 AM: Meet at the hotel lobby, depart for Chiba Station
   9:43 AM: Take the local train "Nakano-bound" from Chiba Station
   10:27 AM: Arrive at Kameido Station, transfer to the Tobu Kameido Line
   10:33 AM: Take the Tobu Kameido Line "Hikifune-bound"
   10:38 AM: Arrive at Omurai Station, walk 7 minutes.
   Around 10:47 AM: Expected arrival at the Chiba University Sumida Satellite Campus
   Continued with on-site gathering.

   2) Participants meeting on-site:
   11:00 AM: Gather on the first floor of the Chiba University Sumida Satellite Campus. Move to the second floor for briefing (by Prof. Ishibashi).
   11:10 AM: Depart in 3 groups for a town walk.
   12:50 PM: Gather on the second floor of the Chiba University Sumida Satellite Campus for debriefing (share impressions)
   1:00 PM: Dismissal

3. Program Coordinator: Prof. Ikuko Sakai (Graduate School of Nursing, Chiba University)

4. Contact Person: Ms. Akiko Nosaki (Lecturer, Graduate School of Nursing, Chiba University)
   Email: nosakiko@chiba-u.jp, Phone & Fax: 043-226-2773

施設・組織等番号	8. りべるたす
学習トピックと内容	災害への備え 4. 災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動および支援【自助・互助・共助】
名称	社会福祉法人りべるたす
所在地	〒260-0802　千葉県千葉市中央区川戸町 468-1
施設概要	障害福祉サービス 相談支援事業、共同生活援助、自立生活援助、居宅介護、移動支援 共同生活援助・介護サービス包括型 就労移行支援・就労継続支援 B 型 生活介護、訪問看護　等
施設 URL	https://www.libertas-mail.jp/
交通機関	最寄り駅　千葉駅
連絡担当教員	野崎
演習時の同行教員	無し（博士後期課程の看護師資格所有者に同行を依頼）
演習日時	2022 年 3 月 7 日(火)　10:00～12:00
演習時の参加学生人数・氏名	参加学生人数：SIU の看護学生８名、SIU 看護学部教員 1 名、ボランティア学生２名、通訳兼任コーディネーター4 名、研究科博士後期課程院生 1 名　　計 16 名
演習内容	1. 目標 施設の活動状況を知る 災害への備えについての活動状況について知る(地域住民の特性【例：身体障害を有する高齢者など】を踏まえた災害準備支援) 2. 演習活動の内容(予定) 施設概要の説明を聞く、 施設や入所者の様子、活動の見学 災害準備・準備支援活動について説明を受ける
当日のスケジュール	集合時刻・場所 3 月 7 日(火) （8：50　ホテルロビー集合、亥鼻にバスで移動） 10:00　千葉大看護学部入り口(旧正門)ロータリー内集合　りべるたす

	のバスでピックアップ、終了後蘇我駅で降車 ・ワークステ−ション(千葉市中央区長洲)にて、医療的ケアなどがある方の障害者就労を見学 ・ＡＬＳ や電源が必要な方が多く入所する施設の見学(千葉市中央区川戸町) 防災に関する説明 ・振り返り、意見父換
持ち物・服装・注意点など	持ち物、服装の注意は特になし。サージカルマスク着用とのこと。

施設・組織等番号	9. 千葉大学医学部附属病院、同 CCSC
学習トピックと内容	先端医療・医療工学開発 5. 高度医療ケア・技術開発・実践
名称	千葉大学医学部附属病院
所在地	〒260-8677 千葉県千葉市中央区亥鼻 1-8-1
施設概要	千葉大学医学部附属病院 特定機能病院、高度急性期病院、
施設 URL	https://www.ho.chiba-u.ac.jp/ https://www.ho.chiba-u.ac.jp/hosp/en/index.html
交通機関	最寄り駅　JR 千葉駅、JR 蘇我駅
交通費	千葉駅からの公共交通機関利用時の料金 京成バス「南矢作行き」あるいは「千葉大学病院行き」乗車、220 円
連絡担当教員	酒井、野崎
演習時の同行教員	野崎、天井、孫
演習日時	2023 年 3 月 1 日（水）
演習時の参加学生人数・氏名	SIU(シンビオシス国際大学)：　看護学部学生 10 名、同学部長　Dr. Joshi　計 11 名 千葉大教員 3 名、千葉大学学生ボラ 6 名　計 20 名
演習内容	1.　目標 最先端とも言える高度医療を提供する施設を見学し、看護師等のスタッフより説明を受け、日本の高度医療の現状を知る 2.　演習活動の内容（予定） 病院内を見学し、実際の医療の現状を知る CCSC を見学し、高度医療の基盤となる医療技術者の教育状況や方法を知る
当日のスケジュール	（千葉大学医学部附属病院看護部より送られてきた文書） 1.　見学目的 千葉大学病院内での高度な医療を提供する施設見学 2.　日時

	3月1日（水）10：00～12：00 集合場所：1階　時間外玄関前 3.　見学者 インド・シンビオシス国際大学看護学部学生10名　教員1名 同行者：千葉大学看護学研究院　教員、学生ボランティア等　計20名 4.　見学内容と対応者 キャリア開発室：大野、渡邉、もう1名の看護師様　　計3名 5. 見学内容： 1）病院見学（3グループに分かれて実施） ①大野：1階時間外玄関　⇒　高齢者医療センター　⇒　患者支援部　⇒　リハビリテーション部　⇒　地下1階CT・MRI　⇒　ひがし棟10階　⇒　CCSC ②渡邉：1階時間外玄関　⇒　地下1階CT・MRI　⇒　高齢者医療センター　⇒　患者支援部　⇒　リハビリテーション部　⇒　ひがし棟10階　⇒　CCSC ③もう1名の看護師様：上記ルートを重複しないように見学、最後はCCSCに集合 2）CCSCにてシミュレーターや研修用のベッドなど見学、その後病院概要の動画鑑賞、質疑応答 11：30　解散
持ち物・服装・注意点など	マスク着用、病棟は特別室ならびに緩和ケア病棟のみ見学（ちょうど空室であった）

施設・組織等番号	10. フロンティア医工学センター
学習トピックと内容	先端医療・医療工学開発 5. 高度医療ケア・技術開発・実践
名称	千葉大学フロンティア医工学センター
所在地	千葉大学西千葉キャンパス内
施設概要	フロンティア医工学センターは，2003 年に医学・工学の枠を超えた医工学の研究機関として設立され，高精度な診断・治療の実現する機器を社会に送り出すことを目指して研究開発を積み重ねてきた。
施設 URL	https://www.cfme.chiba-u.jp/en/ 資料　https://www.cfme.chiba-u.jp/files/brochure/cfme_brochure202304.pdf
交　通　機　関	最寄り駅　JR 西千葉駅
連絡担当教員	野崎
演習時の同行教員	野崎
演習日時	2023 年 3 月 1 日(水)　１３：３０～
演習時の参加学生人数・氏名	SIU の看護学生 10 名、SIU 教員 1 名、千葉大教員(野崎)1 名、ボランティア学生 4 名 SGS 通訳兼コーディネーター4 名、計 20 名
演習内容	1. 目標 • 千葉大学医工学フロンティアセンターの概要を知る • 医療技術開発の最先端の状況について知る • 学際的な連携や協同、融合による最新技術開発活動について知る • 研究開発の clinical question を知り（例：認知症者介護ロボットなど)、日本の医療関連課題を知る 2. 演習活動の内容(予定) • 上記について見学し、説明を受ける。 • 意見交換等を行う。
当日の スケジュール	集合時刻・場所 日程：2023 年 3 月 1 日(水)　13:30～ プログラム 13:30 集合（フロンティア医工学センター 正面玄関）

	13:35 センター・コースの紹介（B204，10 分） 13:45 移動 13:50 動物実験施設見学（サイエンスパークセンター，15 分） 14:05 移動 14:10 中口研究室見学（A204，30 分） 14:40 移動 14:45 羽石・岡本研究室見学（A 棟 4 階，30 分） 15:15 移動 15:25 兪研究室見学（自然１５階，30 分） 15:55 移動 16:00 川村研究室見学（自然１５階，30 分） 16:30 移動 16:40 高橋研究室見学（自然２７階，30 分） 17:10 移動 17:20 林研究室の紹介（B204，15 分） 17:35 解散
持ち物・服装・注意点など	特になし

図 19　　日本でのフィールド演習の様子

2-8. 成果発表会

最終の学習成果発表会は、予定通り、oVice を使用して、2023 年 3 月 16 日の午後に開催した。学習目標および学習ガイド等に沿った内容として、表 14 のような構成として行った。グループ毎に、トピックに沿って学習成果をまとめ、プレゼンテーションを行った。

インド SIU および千葉大学からの参加学生計 20 名に加え、関係者が参加した、総勢 30 名程度での開催となった。

表 14　最終の学習成果発表会の構成内容および時間配分等

Preparation and Method for Learning Achievement Presentation on March 16th.

1. Date and Time: March 16th, 2023 (Thursday) - Approximately 2 hours: 10:30-12:30 (IST) / 14:00-16:00 (JST)
2. Format: Online (Synchronous and Real-time) (Attendance via archived viewing is permitted for the 2022 academic year)
3. Platform for Presentation: using ppt slideshow on Metaverse Platform (oVice)
4. Presenters and Content: Students will create presentation materials in English, including the following content for each team from their respective activities focusing the assigned topic, and make their presentation using the provided template:

1) Overview introduction of team members and field activity schedule,

2) Explanation of case studies related to solving social issues (assigned topics),

3) Evaluation of IPCP.

5. Presentation Details and Time Allocation

I. Presentation time for each team is approximately 15 minutes (tentative):

1. Introduction of Team and Schedule - 3 minutes

Introduction of team members (affiliation, major, grade) and overview of the learning schedule (introduction of each activity field, learning theme, and actual implementation details)

2. Explanation of Case Studies related to assigned topic - 7 minutes Presentation of the assigned topic by each team, including all following items:

- required items

organization/facility of each field, social issues being addressed, target people for services, actual support/service activities, goal and evaluation criteria for services (if any), activities carried out by students, good points and well-designed approach, suggestions or new ideas for improvements or remaining problem, transferability to home country and reasons for it.

3. Self-evaluation as a team - 5 minutes

Presentation of overall evaluation of IPCP as a team, and its dependence on the situation, future issues, and prospects.

li. Q&A: After each team's presentation, there will be 10 minutes of Q&A time. Presentation time per team: 15 minutes + Q&A time of 10 minutes = 25 minutes.

*Note: This presentation will be recorded and available for archived viewing. *In addition, as a model case for the following year, participating students in the next academic year will also be able to view the presentation.

Presentation Order:

1. Group A (Symbiosis International University) Title: Disaster Preparedness: Health of Older People and Community-Based Integrated Care Systems in Japan Presentation Duration: 15 minutes Question and Answer Session: 10 minutes
2. Group B (Symbiosis International University) Title: Social Capital: Health of Older People and Community-Based Integrated Care Systems in Japan Presentation Duration: 15 minutes Question and Answer Session: 10 minutes
3. Group 1 (Chiba University) Title: Disabled Children and Society: Children in Difficult Circumstances in India Presentation Duration: 15 minutes Question and Answer Session: 10 minutes
4. Group 2 (Chiba University) Title: Street Children in India: Children in Difficult Circumstances in India Presentation Duration: 15 minutes Question and Answer Session: 10 minutes

図 20 は、学習成果発表時の oVice のレイアウトである。前述の通り、回線の負荷を減らすためオブジェクトやタイムテーブルなどをレイアウト内に埋め込み、また、学生同士の交流促進のために学生の了承を得て学生の写真も挿入した。

図 20　最終の学習成果発表時のメタバースプラットフォームである oVice のレイアウト

発表では、時々音声が聞き取りにくい部分があったものの、回線が途切れることなく、予定通り発表を終えることができた。

図 21 は、実際の発表時の場面のスクリーンショットである。発表後の質疑応答も活発に行われた。

図 21　実際の発表時の画面の様子

3. 事業評価

3-1. 事業評価の観点と方法

3-1-1.事業評価の観点

本事業は主に 2 つの観点で評価される。1 つめの観点はプロセス評価であり、学習プログラムの開発、派遣/受け入れの時期や人数について目標値を達成できたか、また、事業の遂行過程や現場での運営が円滑であったかを評価するものである。2 つめの観点は学習成果の評価であり、GRIP を通して育成を目指す「どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人」が含有する 3 つの能力：①連携実践能力、②問題解決能力、③Cultural Competence がプログラムを通してどの程度、またどのように発達したかを評価するものである。

3-1-2. プロセス評価の方法

プロセス評価と学習成果の評価は共に、定量的評価と定性的評価を併せて総合的に実施した。プロセス評価は、事業計画と実績の数値的な比較による定量的評価のほか、今年度のカウンターパート大学であるシンビヨシス国際大学のスタッフおよび現地演習にご協力いただいた各フィールドの担当者からのヒアリングに基づいて、次年度以降踏襲すべき点と改善すべき点を定性的に収集した。 ヒアリングは全てのプログラム終了後にオンラインで担当者へ依頼し、オンラインの文書で回答を得た。

3-1-3. 学習成果の評価方法

学習成果の評価のためには，GRIP 参加前後に 3 つの能力を測定し統計的にその変化を検討する定量的評価と、参加学生有志からのインタビューに基づく定量的評価を実施した。定量的評価の実施時期は、千葉大学およびシンビヨシス国際大学の学生ともに、事前学習開始前（2 月）とメタバースでの最終プレゼン終了後（3 月）である。回答は任意であり、Google Forms と BEVI※を使用してオンラインで回答依頼を送り、プログラム評価を目的とした測定であることや回答の有無や内容が成績に影響しないこと等の説明事項を読んだ上で「同意し回答を始める」を選択した学生のみが回答に進んだ（資料 5）。インタビューは最終プレゼン後に口頭とオンラインで協力依頼をし、定量的評価と同様に個人情報保護の方針を含む事項に同意した有志学生に協力してもらう形をとった。説明事項に同意した学生がスケジュール調整ツールを用いて都合のよい時間を予約し、一人につき約 30 分オンラインでのインタビューを実施した。以上のプログラム評価は千葉大学看護学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 NR4-109）。学生に提示した説明事項や質問項目等、詳

細は資料 5 の研究計画書の付帯資料を参照されたい。
※BEVI: The Beliefs, Events, and Values Inventory の略称であり、ライセンスを得た大学のみが実施できる独自のオンラインプラットフォームを用いた信念や価値観の測定・分析ツール。

3-2. プロセス評価

3-2-1. 目標値の達成状況

「大学の国際展開力強化事業」の申請書に則り、2022 年度の数値目標は提携校数 1 校、派遣学生数 10 名、受入学生数 10 名、派遣と受入の日数はそれぞれ 10 日程度であった。これらの目標に対する実績は、提携校数 1 校（シンビヨシス国際大学)、派遣および受入学生数は 10 名ずつで計 20 名、それぞれが 8 日間の現地演習を含む 10 日程度の渡航日程でプログラム実施を完了し、数値目標を達成したと言える。

学習のプロセスとして重要である現地演習の事前事後学習をオンラインで行う計画についても、提携校のインターネット環境や制約の下で想定していた Google Classroom が機能的に使用できない等の困難はあったものの、代替案として Google Space を用いるなどの工夫によりほぼ計画通りに実施できた。特にメタバース（oVice）を学習のプラットフォームとして利用した点には本学の他の留学プログラムにはない独自性が表れている。次年度以降は、メタバース、および、事前学習における JV-Campus の更なる活用を目指している。

また、GRIP プログラムの特徴のひとつは学部や研究科等の専門性、並びに学部生から博士後期課程の学生まで学年を問わないインタープロフェッショナルなチームで課題に取り組む点である。この点においては、千葉大学では看護学部、看護学研究科（博士前期課程および後期課程)、薬学部、医学部、ならびに非医療系である国際教養学部の学部生と大学院生が混在したチームを形成し、通常の授業では経験することがない編成でのプログラム参加が叶った。一方、シンビヨシス国際大学は学部生と大学院生の混在ではあったものの全員が看護学部あるいは看護学研究科の学生であったため、チームメンバーの多様性という点では当初の想定に届かない編成であった。次年度は、数値目標（提携校数 2 校、派遣学生数 15 名、受入学生数 15 名）の達成を目指すと共に、学生の多様性を確保し、よりプログラムの特徴を活かした学習経験を図る。

3-2-2. 協定校およびフィールドからの評価

シンビヨシス国際大学、並びに、11 のフィールドのうち 6 組織/施設の連絡担当者より、今年度のトライアル実施までの準備および当日の運営について、良かった点と改善すべき点のフィードバックを得た。得られた回答は以下の通りである。一部、組織/施設が特定されないよう表現を加工した。

良かった点

- 見学実習を通してインドと日本の違いを互いに知ることができたので、これから社会に出ていく学生さんにとっては、働く環境を選択する視点は広がったのではないかと思います。
- 想定していたよりも質問が多く、ゆとりをもって見学のスケジュールを組み立てていましたので、時間的にはちょうどよかったと思います。
- 事前に希望内容を伺っていましたので、参加者の皆さんの関心に合わせた紹介ができました。見学中も皆さん大変熱心で、所定の時間をオーバーするほど質問や議論が活発に行われて、我々も大変刺激になりました。
- インドに行かれた生徒がインドの文化、経済などについて学ぶ機会と、日本に来られた生徒が日本の生活、商習慣などについて学ぶ良い機会になったと思います。
- インドの留学生を迎えるという貴重な体験ができた。
- 小グループになって回れたのであまり利用者さんの迷惑にならずに移動できた。
- 通訳できる医学生やスタッフがついていてすべて伝えるのは難しかったので助かった。
- 質疑応答が活発でみんなのモチベーションが感じられた。
- 新しい取り組みに参加したことで、既存のものではない何かを提供するために工夫する工程を楽しませていただきました。日々忙しく活動しており、地域住民の活動になかなか参加できない現状もあり、私たちも実習を受け入れたことで、交流できる良いきっかけとなりました。また、地域住民のフレンドリーな感覚を知り、異文化への受け入れという面で、地域住民の素敵な部分を見ることができ、更に尊敬の想いが強くなりました。
- 国籍や文化の違う方に対して、普段行っている活動をどう伝えていくか、考える中で、自身の日々行っているケアを見つめ直す良い機会となりました。国籍は違っても同じ気持ちで活動をおこなっていることが感じられて、良い経験になりました。
- The buddy system allowed students to become close friends and promote exchange between SIU and CU students. This led to the natural formation of a team of 20 students.（バディシステムはシンビヨシス国際大学と千葉大学の学生が交流し親しい友人になるために役立ちました。これにより 20 人の学生が自然とチームになれました。）
- I would like to express my gratitude for arranging cultural activities like wearing Yukata, preparing Japanese Tea, etc for Indian Participants that helped to introduce them to Japanese culture.（インドの学生が日本文化に親しむための浴衣やお茶などの文化的プログラムに感謝します。）
- A special thank for arranging overcoats for winter season.（冬用のコートを用意していただきとても助かりました。）
-

改善できる点

- 見学していただいた場所については、研修の目的を考慮して案内を行いましたが、リクエストがあれば、補足説明ができたかもしれません。こちらで説明する内容を決めてしまっていたので、ニーズに合っていたのかどうか少し心配です。
- 見学する方の人数が、前日に急に増えて、見学するグループ数を増やして対応しました。
- 千葉大学の学生さんが通訳兼世話役として同行されていましたが、同行が必要だったのかどうか少し疑問に感じました。
- 事前に伺っていた人数よりかなり多く参加されまして会場が少々混乱いたしました。参加者の人数を早めに確定していただけますと助かります。
- 学生の通訳ボランティアの方々なのかわかりませんが、あまり関心なさそうで、スマホをずっといじっている様子は印象が良くありませんでした。我々下手ながらに英語でご説明を準備していますので、通訳ボランティアの方は最低限で結構かと思います。
- 次回は先に生徒に予めアンケートし、学びたい・知りたい内容をもう少し絞られたらと思います。
- 事前に zoom を使って準備の打ち合わせができるとよりスムーズで中身のある対応ができると思います。
- 私たちの情報不足ではありましたが、本研修の目的があまり理解できないままの対応となってしまいました。「高齢者支援を学びにきた」と聞いていたので、高齢者のことに特化した方がよいと思っていましたが、全員が高齢者看護に興味があったわけではなかった。
- 事前に内容やスケジュールの打ち合わせや実習生の希望などわかるようでしたら、希望に沿ったことを考えられたかもしれません。内容は良かったのかなど気になっています。また、もう少し長めに時間が取れるとよりゆっくり訪問を見ていただいたり、お話したりすることができたかもしれません。
- We need to clearly define learning outcomes in advance.（事前に学習のアウトカムを明確にしておく必要があります。）
- There should be briefing and debriefing classroom sessions to explain and understand student learning.（学生の学びについて説明したり理解したりするために、ブリーフィングとでブリーフィングのセッションを設けた方がよいです。）
- Check list of student responsibility and documents required to be shared in advance.（学生がすべきことや提出書類のチェックリストを作成して事前に共有する必要があります。）
- Evaluation and report formats to be shared with students in advance with strict deadlines.（評価やレポートのフォーマットと明確な提出期限を事前に学生に示して

おくべきです。）

- We should draft Roles, Responsibilities of every stakeholder in advance.（各関係者の役割や責任の範囲を事前に決めておくべきです。）
- One contact person for all the activities as Principal Program Coordinator to be identifies to avoid miscommunication and misunderstanding.（主任プログラムコーディネータとして連絡係を 1 人に絞り全ての連絡をその人に集約した方が、情報の行き違いや誤解を防げると思います。）
- Orientation and Pre- Online sessions should be attended by both side students along with the Faculty accompanying the group for travel to each other country, these sessions should be mandatory for each student and faculty person who are travelling under this program.（オリエンテーションとプレオンラインセッションを必須とし、渡航する両国の全学生および全職員が参加するべきです。）
- Introductory lectures from both (India & Japan) side to be delivered which will help students for comparative studies.（学生たちの比較学習に役立つ、インドと日本の両方からの導入的な講義を実施しましょう。）

以上の通り、プロセス評価としては今年度の数値目標を全て達成し、メタバースの利用やフィールドにおける学習プログラムも概ね計画通り達成できたと言える。運営上改善すべき点も多々挙がったが、今年度はトライアルプログラムであったため、次年度からの本格始動に向けて課題を洗い出せたことは有意義であった。引き続き、次年度以降も数値的な目標達成とより円滑で学習効果の高いプログラム運営のために検討・検証・改善を続けていく。

3-3. 学習成果の評価

連携実践能力および問題解決能力については、千葉大生 7 名とシンビヨシス国際大学生 10 名の計 17 名（男性 4 名、女性 13 名）から、BEVI には千葉大生 7 名とシンビヨシス国際大学生 7 名の計 14 名（男性 3 名、女性 11 名）から事前事後 2 時点揃った回答を得た。インタビュー協力者は千葉大生 7 名とシンビヨシス国際大学生 3 名の計 10 名（男性 2 名、女性 8 名）であった。2023 年 4 月に実施したインタビューはスクリプト作成中のため、以下では主に 3 月実施したインタビューの一部を抜粋して掲載する。

3-3-1. 連携実践能力

連携実践能力は、King et al. (2016)による Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21)※1 を用いて測定した（例：I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.）。21 項目 1 次元から成り、0（全くあてはまらない）から 6（非常によくあてはまる）の 7 件法で測定する尺度である※2。本尺度の日本語版は未発表であるこ

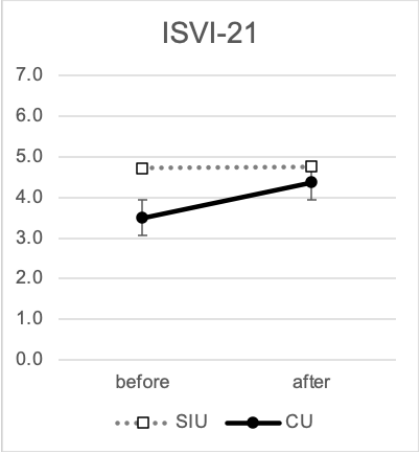
とと、プログラムの特性上千葉大学の学生は一定の英語能力により選抜されていることから、日印の学生共に英語で項目を表示し回答を求めた。

※1:厳密には尺度は Interprofessional Socialization、つまり多職種協働に関する個人の概念の社会化を測定するものであるが、本調査では表現のわかりにくさを避けるため連携実践能力として扱う。

※2: 元は 24 項目 3 次元（King et al., 2010）の尺度であったが、より高い妥当性・信頼性と回答者の負担軽減のために 21 項目の簡略版である ISVI-21 が開発され、単次元の尺度として使用されている。

事前事後測定の結果

本尺度の取りうる値は 0〜7 である。全体平均は事前 4.21（SD = .80）、事後 4.60（SD = .67）であり、プログラム全体として事前より事後の方が自己評価の有意な上昇が見られた。大学毎に値を見ると、千葉大生においては事前 3.50（SD = .39）、事後 4.37（SD = .47）と有意に上昇したものの、シンビヨシス国際大学生においては事前 4.71（SD = .61）、事後 4.76（SD = .77）と変化が見られなかった。プログラム開始前には千葉大生よりシンビヨシス国際大生の方が有意に高い値を示したが、千葉大生の自己評価の上昇により、プログラム後にはこの差は消失した。



インタビューからの抜粋

- We are now getting more confident to present ourselves in front of others also, and we are like having that thing in our behavior to cooperate with others and the knowledge we have gained from there and the things we have observed, behavioral things we have observed from there, we are trying to implement it in our behavior like the calmness, discipline – all these things we have seen in the Japanese people. So, we are trying to grasp those things in our personality also.
- It (GRIP) acted as a catalyst in bringing us closer to the Japanese culture, people, and values. I think that only working together, and interacting with people of different backgrounds can boost our thinking, and innovative skills. We experienced firsthand how people from different faculty or different department had so many different things to contribute as each one of us have different experiences, perspectives, and ideas.
- まず考え方はあまり変わっていないと思います。元々、チームの中で自分がどういう立ち位置であるべきかを考えながら動くタイプでした。でも、実際に経験してみて、ここまで達成できたので、次同じような状況になったときのマインドセットは変わったと思います。他の学部の学生に対して、看護の考え方を強みにして関わる

ハードルがちょっと下がったかもしれません。

- 学習目標について、自分が何をどこまで、このチームの中でやればいいのかが、最後の方でやっとわかってきました。でもインドにいる時やバディを日本で受け入れてる時は全然分かりませんでした。自分は、何を求められてるのかと、自分ができる範囲のどこまでやったらいいのかの 2 つについてずっと迷っていました。自分たち自身ができることを、もう少し最初に自己開示をお互いにすべきだったと思います。私の場合、分野横断的なところはそんなに課題に感じませんでしたが、縦に（学年が）混ざってる時に、みんなの段階をアセスメントしながら、それぞれに必要な情報をどう出していけるか、また、一緒に考えていけるとかっていうところに気を遣いました。

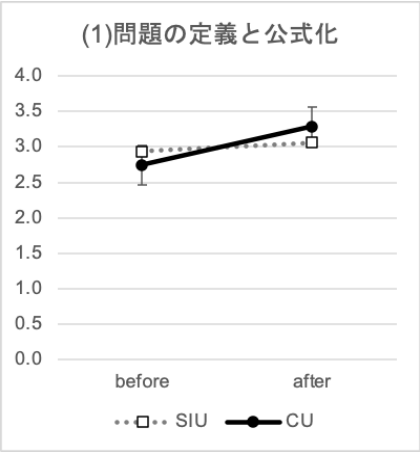
3-3-2. 問題解決能力

題解決能力は、D'Zurilla et al. (1998)による.SocialProblem-SolvingInventory-Revised (SPSI-R)、並びにその日本語版である佐藤ほか.(2006)を用いて測定した。20 項目 4 次元から成り、0（全くあてはまらない）から 4（大変よくあてはまる）の 4 件法で測定する尺度である。(1)問題の定義と公式化、(2)さまざまな解決法の案出、(3)意志決定、(4)解決法の実行と検証の各次元は 5 項目ずつの平均値で算出した。

事前事後測定の結果

(1)問題の定義と公式化

SPSI-R の取りうる値の範囲は 0〜4 である。1 つめのサブスケールである「問題の定義と公式化」は、「解決すべき問題を抱えている時は、状況を分析し、どのような障害物が自分の望みの達成を妨げているのかを明らかにしようとする」や「問題を解決しようとする前に、自分の達成したい具体的な目標を設定する」等の 5 項目で測定される。



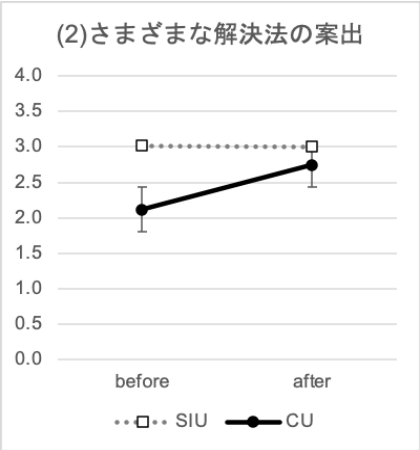
全体平均は事前 2.86（SD = .42）、事後 3.15（SD = .36）。そのうち千葉大生においては事前 2.74 (SD = .36)、事後 3.29（SD = .30）と有意に上昇したものの、シンビヨシス国際大生においては事前 2.94（SD = .45）、事後 3.06 と有意な変化は見られなかった。

(2)さまざまな解決法の案出

SPSI-R の 2 つめのサブスケールである「さまざまな解決法の案出」は、「問題を解決しようとしている時は、しばしば異なった解決策を考え、それらのいくつかを組み合わせて良い解決策を生み出そうとする」や「問題を解決しようと試みる時は、できるだ

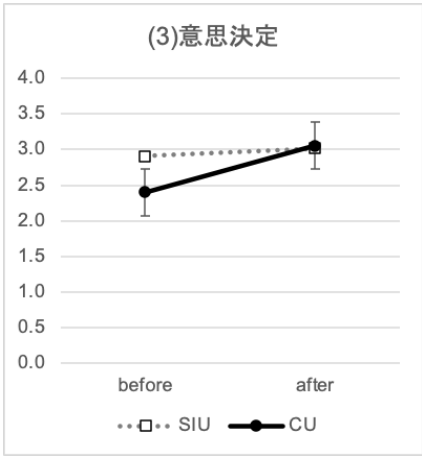
け多くの違った角度から問題に取り組む」等の 5 項目で測定される。

全体平均は事前 2.65（SD = .64)、事後 2.89（SD = .45）であり、全体としては事前より事後の方が有意に高かった。そのうち千葉大生は事前 2.11（SD = .41)、事後 2.74（SD = .50)。シンビヨシス国際大生は事前 3.02（SD = .48)、事後 3.00（SD = .41）であった。千葉大生にのみプログラム参加前後で有意な上昇が見られ、シンビヨシス国際大生には変化が見られなかった。そのため、事前に見られた有意差（千葉大生 < シンビヨシス国際大生）は事後の時点では消失した。



(3)意思決定

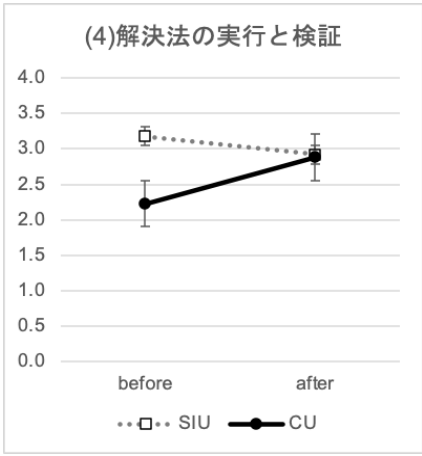
SPSI-R の 3 つめのサブスケールである「意思決定」は、「決断する時は、それぞれの選択肢の直後の結果と、長い目で見た結果の、両方を考慮する」や「決断する時は、選択肢を判断し、比較するために体系化された方法を用いる」等の 5 項目で測定される。



このサブスケールの　全体平均は事前 2.78（SD = .62)、事後 3.01（SD = .34）であり全体としては有意な上昇がみられた。しかし、前後で有意差が見られたのは千葉大生のみである。千葉大生においては事前 2.40（SD = .49)、事後 3.06（SD = .41）と上昇したものの、シンビヨシス国際大生においては事前 2.91（SD = .70)、事後 3.02（SD = .32）と有意な変化は見られなかった。

(4)解決法の実行と検証

SPSI-R の 4 つめのサブスケールである「解決法の実行と検証」は、「解決策を実行した後で、何が良くて何が悪かったのか分析する」や「問題に対する解決策を実行した後で、状況がどのくらい良くなっているかを、できるだけ注意深く評価しようとする」等の 5 項目で測定される。



全体平均は事前 2.79（SD = .66)、事後 2.91（SD = .48)。そのうち千葉大生は事前 2.23（SD = .48)、事後 2.89（SD = .43)、シンビヨシス国際大生は事前 3.18（SD = .45)、事後 2.92（SD = .54）であっ

た。他のサブスケールと同様、全体としてはプログラム前後で有意な上昇があったと言えるが、上昇したのは千葉大生のみであり、シンビヨシス国際大生においては有意な変化は確認されなかった。

インタビューからの抜粋

- I have actually developed a sense of problem-solving towards it (social issues). Initially, I used to think it is not my problem. So I used to not focus on solving it. But then I realized if the main problem is not solved, then it can have a lot of negative impacts on many lives. So through every institution that I visited during the interaction, I think it helped me to develop more good solutions towards the problem.
- While accompanying Japanese students on different visits we also experienced firsthand how the people in slum areas and streets actually survived. We knew about these people but we had not witnessed them firsthand. This led us to think more deeply about the challenges faced by India.
- 社会問題解決に対する私の考え方はすごく変化しました。まず国内に関して、日本はかなり固定概念が強くて、同調圧力があって、みんな同じ言語をしゃべって同じ服装しているというイメージだったんですけど、自分が見てなかっただけで日本の中にも社会的弱者の方がいたりダイバーシティーってすごくいっぱいあるんだと気付けました。インドの方の発表とかを聞いて、日本の問題についてただ解決策をぽんと考えるのではなく、いろんな職種の方やいろんな専門の方の見方も多角的に踏まえて考えていかないといけないなと強く思いました。
- 社会課題解決ってやっぱり大変だなと改めて思いました。（中略）それと、分かった気になってても意外と駄目なんだと気づきました。自分自身についていろいろ変えていくべきところがたくさんあるとも、改めて思いました。（中略）NGO、NPO もそうですし、住民参画型で何かを行おうとした時に、どういうふうに動きを作っていけるのかについても課題だと思います。住民を巻き込むというのが今までの動きだったので、自分たちから発信して巻き込まれる土壌を作っていくみたいな、そういう感じも考えていきたいです。お金がないのは一緒だけれども、プレゼンすればもしかしたらどうにか予算を獲得できるかもしれない行政と、本当にお金のない民間の差で、どういうふうに資金を獲得していけるのかは、もう少し勉強したいと思いました。

3-3-3. Cultural Competency

BEVI（Wandschneider et al., 2015）は、留学プログラムの成果を定量的および客観的な測定・検証を目的として開発されたツールである。日本を含む 140 カ国・8 万件のデータを基に、異文化受容性をはじめとする個人の様々な信念･価値（Belief and Value）を 185 の項目から統計的に算出する。留学プログラムの評価には、社会的オープン性（Sociocultural

Openness）並びに世界との共鳴 （Global Resonance）が頻用される。それぞれの測定項目は非公開である。取りうる値は 0 から 100 であり、世界平均を 50 として相対的に数値を解釈する必要がある。

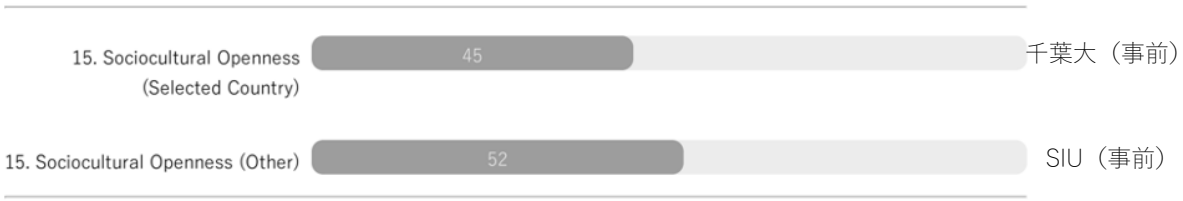
事前事後測定の結果

(1) 社会文化的オープン性（Sociocultural Openness）

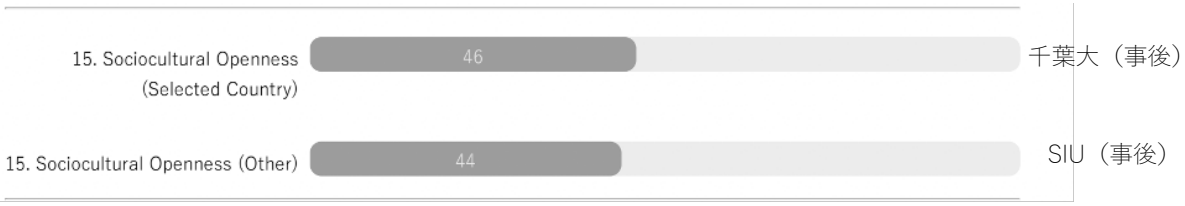
社会文化的オープン性とは、文化、経済、教育 環境、ジェンダー、国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践に ついて進歩的でオープンである程度を表すものである。測定項目は非公開であるが、「私たちは、自分たちと異なる文化を理解しようとすべきだ」等の項目が含まれるとされている。

全体平均は事前 48、事後 45 であった。そのうち千葉大生は事前 45、事後 46 でほぼ変化がなかった。シンビヨシス国際大学生は事前 52、事後 44 とプログラム後に低下した。BEVI の値は統計的に有意な変化であるかどうかの検定を行うことができないが、開発者によると 5 以上の増減が見られた場合に明確な変化があったと見なすのが一般的である。以下のグラフは、上側が千葉大生、下側がシンビヨシス国際大生を表している。

Sociocultural Openness（事前）



Sociocultural Openness（事後）

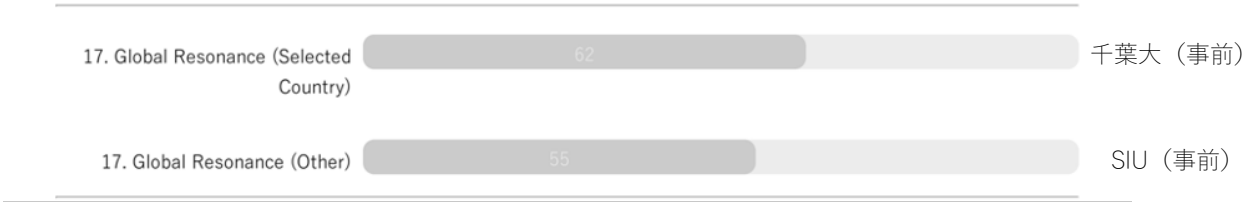


(2) 世界との共鳴（Global Resonance）

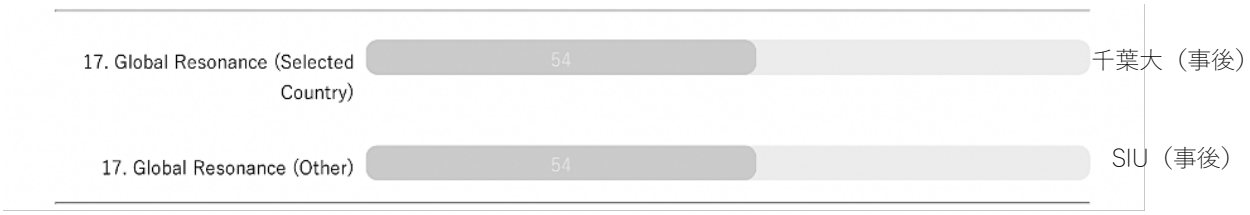
世界との共鳴とは、さまざまな個人、集団、言語、 文化について学ぶことや出会うことを努力している程度や、グローバル社会への関与を望んでいる程度を表すものである。「世界の出来事について多くの知識を持っていることは大切だ」等の項目から測定される。

全体平均は事前 58、事後 54 であった。そのうち千葉大生は事前 62、事後 54 と低下した。一方、シンビヨシス国際大生は事前 55、事後 54 と変化が見られなかった。

Global Resonance（事前）



Global Resonance（事後）



インタビューからの抜粋

- In our country, there are 50 different cultures. But the culture of Japan is a way different from Indian culture if we talk. So yes, ma'am, the knowledge about the cultural competency and the interest to know the different culture has increased because if we learn something new, it just create a space in our brain to just grab the thing from that new thing, whatever you like from that culture. So, yes, ma'am. Now, it's like I just want to explore more different country cultures to grasp more new things from that. So, yes, definitely from GRIP, I have got that idea of knowing the culture from, you know, very closely from visiting that place. So, yes, it increased a lot of curiosity and it has given a lot of new knowledge to me about the culture.
- Yes, I really feel I'm getting attached to Japanese culture. And I'm very much into like knowing more about Japanese culture. And very soon I might consider learning the languages as well. I think you can see that as a positive influence.
- 日本にインド人学生が来て受け入れた時に、時間にルーズな文化から時間に厳しい文化への適応が難しそうだなと思いました。だからある程度は、日本の文化に合わせてもらうだけじゃなくて、相手の文化のことも考慮しつつ対応するべきなんだろうなと思いました。腹が立ったりしたこともありますけど、だからといって、イライラするだけではどうにもならないと思います。相手に歩み寄る姿勢を持ったほうが、こっちも精神的に楽ですし、そういう姿勢を持つべきなんだと思います。今後もしインドや、ほかの国から来る人と関わることがあれば、そのような考え方を大事にしようと思いました。
- あんまりインドの文化について知らなかったのですが、やっぱりインドの人それぞれにも個人の文化があって、個人の集積でその国の文化ができているんだと思いました。文化に対する考えというのは、やっぱり直接話してみないと分からないと思いました。インドの人ってこういう考えがあるよとかこういう感じだよとか聞いて

も、やっぱりその中にも個別性があるし、自分が文化について考えるための切り口がちょっと増えたと思います。国としての文化だったり、住んでる場所の文化だったり、社会的地位の文化だったり、職業としての文化があって、たぶんインドの方はみんな看護の学生だったので看護の文化だったり。私たちは同じ千葉大生でも医学部の方と薬学部の方の文化も違うし、もう本当に、ただ知識の違いというわけじゃなくて、考え方も違うので、そういう意味では本当に文化っていろんな見方があるのかなと思いました。

以上のように、学習成果の評価としては、千葉大生の連携実践能力と問題解決能力が統計的に上昇した点が最も強調すべき点である。一方、シンビヨシス国際大生の連携実践能力と問題解決能力には有意な変化は見られなかった。これは、シンビヨシス国際大生の自己評価がプログラム評価前から相対的に高かったことや、日本での現地演習のスケジュールが過密で十分なブリーフィング/デブリーフィングの時間を設けられなかたこと、また、参加者が看護学部/看護学研究科の学生のみで異なる専門性を持つ学生が混在したチームでプロジェクトを遂行するという本プログラムの特徴を十分活かせなかったこと等、複数の要因が絡んでいる可能性が考えられる。しかし、インタビューに協力してくれた学生からは、”We experienced firsthand how people from different faculty or different department had so many different things to contribute as each one of us have different experiences, perspectives, and ideas.（私たち一人一人が異なる経験、視点、およびアイデアを持っており、異なる学部や領域の人が貢献することがたくさんあるということを直接経験しました.）”, “I have actually developed a sense of problem-solving towards it (social issues). （社会課題に対する問題解決の感覚が実際に開発しました.）”等、ポジティブな発言が見られた。シンビヨシス国際大生のうちインタビューに応じたのは一部の学生のみであるため、インタビューでの発話を般化することはできないが、プログラム参加学生の中に高い学習効果を得た学生とそうではない学生が混在していたと推察されるため、今後はより多くの学生が考えを深めたり自身の変化を実感したりできるよう、プログラム内容の改善が求められる。

また、Cultural Competence に関しては、測定項目が非公開であることから詳細な考察が困難だが、実際に文化や他国の人と交流することでこれまで持っていた文化や自国外の出来事についての主観的イメージが崩れ、自分なりの視点や考えを再構築する必要が高まった場合、プログラム後に BEVI の値が単純に上昇するとは考え難い。本プログラムで学生は、自分の渡航と提携大学の学生の受入という二重の文化体験に身を置く。さらに自国と他国の社会課題を学び、自分の国（つまり同じ文化圏）の中で起きている社会問題や自分と大きく異なる生活をしている人々（つまり異なる文化を持つ人々）と出会う中で、文化とは何かを考え直したり、自分自身が無意識に持っている文化や偏見に直面したりする経験もあったかもしれない。このように、自国と他国の異質性および同質性を意識したり、国という文脈だけでなくその中の個々人が持つ文化や自分の固定観念を発見したりする経験の渦中で

「揺らぐ」ことも、社会に出る前の大学生・大学院生にとっては貴重な経験である。今後は定量的な変化と定性的な語りを併せて今回の結果の分析を進めると同時に、Cultural Competence の測定方法についても再考していく所存である。

3-4. 外部評価

外部有識者から評価を受けプログラムの質の向上を図るため、GRIP 推進委員会の規定を整備し GRIP 外部評価委員会を置くことを定めた。GRIP 外部評価委員会は、日本、提携大学の所在国、並びにアメリカ等の国外の有識者を委員とし、年に 1 回開催する。一年間のプログラム運営のプロセスおよび学習成果を、本年次報告や参加学生による最終プレゼンテーションの動画等の記録を基に客観的に評価していただき、次年度以降のプログラム改善の基盤とする。

2022 年度の外部評価委員会は、2023 年 6 月に zoom で日本とアメリカを繋ぎ実施された。それぞれ、異文化感受性、国際交流プログラムの評価、地域創生に精通した 3 名の外部評価委員の先生より、プログラムの目的や問題解決に取り組む際の各国の社会システムの捉え方等について質問をいただき、活発な議論が交わされた。

プログラムの強みとして特に評価していただいたのは以下の 6 点である。

(1)正規科目・副専攻として位置付け長期的な実施を可能とする枠組みを構築した点
(2)レベル別の学習達成目標を設定している点
(3)自国と他国の双方の文化理解や双方向の学びを意図している点
(4)これまで千葉大学で実施してきた IPE の経験を活かしている点
(5)学生の学びのプロセスを考慮し渡航前から帰国後までの学習をデザインしている点
(6)協定校と密にコミュニケーションを取り協働体制を築いている点

また、課題としては以下の 8 点が挙げられた。

(1)カルチャージェネラルなナレッジ・フレームワークの導入
(2)プログラム終了の先にある将来的なビジョンの検討とプログラム概要への包含
(3)国内の異文化・国内の多様性（ミクロなダイバーシティ）という観点の統合
(4)フィールドノートを活用した経験のリフレクションの仕組みの改善
(5)最終的なアウトカムの評価指標および方法の検討
(6)学生にとっての履修・専攻の意味の明確化とブランディング
(7)少ないマンパワーで持続的にプログラムを回すための仕組み作り
(8)社会システムに捉われない（あるいはそれを壊すような）知見やスキルの獲得

外部評価委員会終了後にいただいた最終評価票では、プログラム全体の進捗状況について 3 名の外部評価委員のうち 2 名が「予定どおり進展」、1 名が「予定を越えて進展」と評価した。その理由として自由記述欄に記載いただいた内容は以下の通りである。

- 予定と実際の進展状況を比較したとき、紙面上では「予定どおり進展」と見立てられる方もあるかもしれませんが、私はあえて「予定を越えて進展」を選択しました。新しい取り組みの初期というものは、想定外の出来事が起こることも多く、往々にしてすべてが遅れ気味になったり、計画の一部が大幅に削られてしまったりするものだと思います。今年度のレポートを拝見する限り、GRIP に関してはそれが見受けられません。非常に賞賛に値することだと思います。コロナ禍により起きた影響、文化的差異から起きたスケジュール等の調整の必要性、参加者の健康問題等、様々な軌道修正要因があったようですが、それぞれに適切な対応をされてきたことが伺われます。それらを総合的に考慮して、「予定を越えて進展」していると判断します。
- 初年度である 2022 年度は、インドのシンバイオシス大学とのトライアル的なプログラムとして開始されている。その中で、教材を作り込み、学生を相互に行き来させて教育を実施する段階に入っており、プログラムの評価や持続的改善につなげるという計画通りに進められていると思われる。 プログラムの計画は、これまでの千葉大における海外の大学との協力関係を利用して行われている。互いの特色や強みを活かしたプログラム内容となっており、実際に学生が互いの国のプログラムに参加することで、計画していた学びがなされるだけでなく、例えば互いの置かれている生活基盤の大きな違いなどからも様々な学びが生じた印象がある。プログラムのプロセスは、想定通りに進められたと思われる。教育プログラムは問題点に小さな問題があったとしても学習の質を損ねてしまう可能性があるため、想定通りの進捗がなされたことは重要性が高い。 プログラムのアウトカムは、想定通りの結果が出ている部分、出ていない部分がある。これは、本事業プログラムが研究という意味合いも強く帯びており、プログラム評価に用いられている既存のアウトカム指標が学生の学びを広い形では捉えきれていないことを示す可能性がある。プログラム評価が、元々設定された指標による評価を中心になされるべきかどうかについては、プログラム評価の視点の違いの議論がなされることも重要かもしれない。例えば Fitzpatrick らによる Program Evaluation: Alternative Approaches and Practical Guidelines (4th Ed., 2010)の記載によると目的志向型で今回の評価が行われていると思われるが、マネジメント志向型、消費者志向型、専門家志向型、自然および参加者志向型といった視点での評価も考えるとよいかもしれない。
- 「カリキュラム・マップによる学習到達目標の明確化と質保証」については、学習到達目標の明確化は難しいところである。特に、双方の大学が関係する場合、目標と、その到達方法・手段は、異なるだろうから、それほど時間はないかもしれないが、相互理解を深め丁寧に進める必要がある。それらの難しさ、問題は、相手方の

ヒアリングからもでているところであるが、このようなフィードバックを得ながら、改善できる仕組み、体制を整えているところは評価できる。

Fact Sheet

資料１　GRIP 実績

年		学生交換数		学生交換国		展開段階		備考
年次	年度	派遣学生数	受入学生数	学生の派遣国	学生の受入国	PHASE	STEP	
初	2022	10 名 ： 医学部 3 名 薬学部 1 名 看護学部 3 名 看護学研究院 2 名 国際教養学部 1 名 ※JASSO 2022 年度海外留学支援制度(協定派遣)派遣学生 10 名分採択	10 名 ： シンビオシス国際大学 学部生 8 名 大学院生 2 名 ※JASSO 2022 年度海外留学支援制度(協定受入)受入学生 10 名分採択	インド	インド	1 GRIP モデルの構築（2022-2023 年中間評価まで）	1 教育、教育ロジスティックス、教育プログラム質保証の仕組みづくり シンバイオシス大学で社会課題解決演習およびバーチャルワークショップのトライアル	SIU との大学間協定締結
	期間	2023.2.13-2.22	2023.3.1-3.9					

資料２　受け入れプログラム実績

2023 年 3 月 1 日～3 月 9 日　渡航期間 2023 年 2 月 27 日～3 月 10 日
シンビオシス国際大学（Symbiosis International (Deemed University)）
学部生 8 名　大学院生 2 名
※JASSO 2022 年度海外留学支援制度(協定受入)受入学生 10 名分採択

資料３　派遣プログラム実績

2023 年 2 月 13 日～2 月 22 日　渡航期間 2023 年 2 月 13 日～2 月 23 日
医学部 3 名、薬学部 1 名、看護学研究科 2 名、看護学部 3 名、国際教養学部 1 名
※JASSO 2022 年度海外留学支援制度(協定派遣)派遣学生 10 名分採択

資料４　教員交流実績

1. シンビオシス国際大学（インド）2023 年 11 月 22 日～11 月 26 日
　シンビオシス国際大学を拠点とした現地演習プログラム構築のための現地視察及び現地教員と打ち合わせ
シンビオシス国際大学：Dr. Anita Patankar, Ms. Swati Sahasrabudhe, Dr. Sonopant G Joshi, Ms. Bhakti Padhye
千葉大学：酒井郁子、朝比奈真由美、野崎章子

2. レスター大学（イギリス）2023 年 1 月 16 日～1 月 21 日
　レスター大学とアライアンス、GRIP プログラム実施のための現地視察及び打ち合わせ
レスター大学：Prof. Elizabeth Anderson, Prof. Jayne Marshall, Prof. David Wright, Dr. Anil Sood, Dr. Maria Keering, Prof Richard Holland, Prof Tom Robindon
千葉大学：酒井郁子、朝比奈真由美、飯田貴映子

3. シンビオシス国際大学（インド）　2023 年 2 月 13 日～2 月 23 日
　GRIP 受入プログラム　千葉大学派遣学生に同行
シンビオシス国際大学：Dr. Lelith Daniel
千葉大学：野崎章子

4. シンビオシス国際大学（インド）　2023 年 3 月 1 日～3 月 9 日
　GRIP 受入プログラム　シンビオシス国際大学学生に同行
シンビオシス国際大学：Dr. Sonopant G Joshi
千葉大学：酒井郁子、野崎章子、天井響子

5. シドニー大学（オーストラリア）　2023 年 3 月 27 日
　GRIP プログラム実施のための現地視察及び現地教員と打ち合わせ、今後の学生派遣の可能性を協議するため
シドニー大学：Prof. Brendan McCormack, Lecturer Dr. Karen Watson, Associate Lecturer Kazuma Honda

千葉大学：酒井郁子、朝比奈真由美、笠井大、飯田貴映子

6. モナシュ大学（オーストラリア）2023 年 3 月 28 日～3 月 29 日
　2024 年度より学生派遣予定の GRIP プログラム実施のための現地視察及び現地教員と打ち合わせ
モナシュ大学：Dr. Fiona Kent, Prof. Brett Williams
千葉大学：酒井郁子、朝比奈真由美、笠井大、飯田貴映子
シドニー大学：本田一馬

研　究　計　画　書

研究題目　「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究者　酒井郁子

共同研究者：　井出成美、石橋みゆき、飯田貴映子、野崎章子、ｶｽﾞﾉﾌﾞ ﾀﾞﾋﾞｯﾄﾞ、仲井あや、関根祐子、石川雅之 、伊藤彰一、山内かづ代、鋪野紀好、笠井　大、岩崎　寛、中口俊哉、朝比奈真由美、中村絵里、臼井いづみ 、孫佳茹、天井響子

Ⅰ　研究の必要性及びその背景

千葉大学は2007年から、日本初となる医療系学部を横断した「専門職連携教育プログラム−亥鼻IPE」を必修科目として推進してきた。また、2020年度からは全入学生を対象とするENGINEプランを開始し、「全員留学」を実施している。グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP、以降GRIPと表記）は、15年間実施してきた専門職連携教育を全学に発展させ、また日本以外の国や地域の課題にも対応できる専門職業人材を育成することを目指した新たな留学プログラムである。GRIPでは、「地域特有の健康課題」に対して、専門領域の異なる学生がインター・プロフェッショナル且つインター・ナショナルに協働して取り組み解決方策を提案する。地域対応型の人材を、専門を跨いだサービス・ラーニングにより育成する。

本研究は、このGRIPプログラムの教育評価を量的および質的に分析し、プログラムの学習効果を高める要因と教育方法の改善点を明確にすることを目的とする。具体的には、2022年度から2026年度までの千葉大学および海外連携大学のGRIP参加学生を対象とした、①専門職連携能力、社会課題解決能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さの変化を評価するためのプログラム参加前後の質問紙調査、②変化の個人差や共通要因を質的に分析するためのインタビュー調査を実施する。

持続可能な社会を創生するため2015年に採択された「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」では、環境や平和の維持という全世界的な課題から、災害や貧困、医療資源へのアクセスという国や地域特有の課題まで多様な社会課題が対象とされている。これらの課題解決のためには、まさに多様な職種間の連携協働および国際的な比較と考察、資源を創造する柔軟な発想が必要とされる。そのためGRIPは、どの国や地域の社会課題に対しても他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人の養成を目指している。しかし、インター・プロフェッショナル且つインター・ナショナルに協働して社会課題を解決できる人材のコンピテンシーとして挙げられる専門職連携能力、社会課題解決能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さの包括的な育成を図った留学プログラムは非常に稀有であり、その評価研究も未だ国内外を通して実施されていない。よって、GRIPプログラムの教育効果、並びにプログラムとしての改善点を定性的、定量的、且つ縦断的に検討することの社会的意義は大きいと考えられる。

なお、本研究は対象をGRIPプログラムの参加学生に限定しているが、千葉大学では既にその他の留学プログラムやオンラインプログラムの参加学生に対して、後述するシステムBEVIを利用して文化的対応力および文化的謙虚さの評価に取り組んでおり、BEVIのスコアについて他プログラムとGRIPの比較という形で検討を行うことでGRIPのみならず他プログラムの評価や改善に貢献できる可能性がある。留学プログラム参加学生に対するBEVIの利用は既に千葉大学大学院医学研究院倫理審査委員会の承認を受け行われている。

Ⅱ　研究目的

GRIPプログラムの教育評価を量的および質的に分析し、プログラムの学習効果を高める要因と教育方法の改善点を明確にすることを目的とする。

本研究は、参加者のコンピテンシーの変化の測定と、その変化の要因となった学習内容や経験の構造化の二側面から構成される。まず、研究１は、GRIP参加者の専門職連携能力、社会課題解決能力、文化的対応能力及び文化的謙虚さをプログラムの前後により測定し、定量的に学習効果を評価する質問紙調査である。次に研究２は、プログラム終了後に個別に実施するインタビュー調査である。参加前の自己の状態、参加中の経験、そして現在の自己の状態を回顧的に語ってもらい、変化の要因となった学習内容や経験、それらと個人差の関連、学習効果をより高めるためのプログラムとしての改善点を定性的に評価する。

これらの定量的および定性的調査を千葉大学の学生と提携大学の学生に対して継続して実施し、プログラムの評価、改善、並びに学内外への波及を目指す。

Ⅲ 評価対象となる学習プログラムの概要

GRIPはオンラインによる事前学習、現地演習、メタバース上で実施する成果発表会の三段階から成る。参加学生は事前学習の開始前と成果発表会の終了後に質問紙への回答を求められる。個別インタビューは成果発表会終了後に実施する。

1. 事前学習

(1) 学習目標

① 演習の計画・準備；演習の目標を共有する。

② 自国の保健・医療・社会経済文化・制度等について概要を理解する。

③ 地域アセスメント方法について理解する。

④ 文化的能力・文化的謙虚さについて理解する。

⑤ 健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health: SDH）について相対的に把握する。

(2) 方法

オンライン学習（対面を含むハイブリッド型）、オンラインテスト

(3) 内容

専門職連携基礎、専門職連携実践１、専門職連携実践２、Cultural Competency and Cultural Humility、社会課題解決基礎、社会課題解決応用の６科目を通して、知識構築と参加学生同士のチームビルディングやシミュレーション学習を行う。

2. 現地演習

(1) 学習目標

① フィールドにて多様な文化的・学際的背景をもつ学生が協働して、地域の問題解決に取り組む。

② チームとしての対立の対処法と、専門家間の関係を発展方法を学ぶ。

③ 他の専門職がリソースとなり、自身の実践の補完となることを学ぶ。

④ 他の専門職への理解を深める。

⑤ 地区踏査等によってアセスメントおよび課題を明確化する。

(2) 方法

実渡航を伴う現地施設やコミュニティ、プログラムの見学、参加、運営

(3) 内容

渡航先の対象地域において、以下のテーマでの社会課題解決演習を行う

（例）災害被災者の健康、医療資源へのアクセシビリテイ、認知症者とともに作る介護、パンデミックと文化、ホームレスネスと社会

3. 成果発表会

(1) 学習目標

① 学習成果の具現化を行う。

② 自身の研究や実践に対する実装準備を行う。または実装する。

③ 自他国への移転可能性を検討する。

④ 自身の専門家としての活動へ知識と経験を活用する。

(2) 方法

メタバースプラットフォームを用いたリアルタイムな成果発表会

(3) 内容

・グループプレゼンテーションの実施

・各大学教員からのフィードバック受容およびそれを受けたプレゼンテーションの改善

・社会課題解決ケースシナリオの提出（最終課題）

Ⅳ 研究方法

研究 1:「GRIPプログラムによる学習効果の定量的評価」質問紙調査

(1) 対象

2022年度のGRIPプログラム参加学生のうち、後述する研究手続きと倫理的配慮に則った説明を受け、研究協力に同意した学生。上述の参加学生には、千葉大学から派遣する学生のほか、GRIPプログラムを通じて協定校から千葉大学が受け入れる学生も含む。

(2) 期間

倫理審査承認後から2023年9月末日までを研究期間とする。

(3) データ収集

Google Spaceをプラットフォームとし、オンラインの質問紙調査を実施する。GRIPプログラム参加学生へ、プログラム開始前、現地演習終了後、成果発表終了後の最大3回、質問紙への回答依頼を送信する。Google Space上に研究協力依頼(資料 1・2)および誓約書(資料 3)を掲示し、学生が同意した場合に以下の内容に対応した回答画面に進む。測定項目は資料9の通りである。

a. 専門職連携能力

Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21) (King et al.、 2016) 21項目

b. 社会問題解決能力

Social Problem-Solving Inventory-Revised (SPSI-R) (D'Zurilla et al.、 1998) 52項目

c. Cultural competencyを含む信念および世界観

BEVI (Shealy、 2016) 185項目

尺度a～cは国内外で広く使われており、本研究の申請者はこの尺度の背景にある概念や理論についてよく理解した上で使用する。尺度cは千葉大学として使用ライセンス契約をしている。いずれも著作権侵害の恐れがない。また、英語力による選別を突破した学生が参加することと全ての学習活動を英語で実施するというGRIPプログラムの特性上、尺度への回答も基本的には英語で実施予定であるが、尺度bおよび尺度cは項目数が多いことと両尺度とも妥当性と信頼性が確認された日本語版が開発されていることから、回答者の負担軽減のため日本語による回答も選択可能とする。

(4) 分析

回収されたデータは匿名化・符号化の上で回答者ごとに紐づけし、プログラム開始前から終了後の値の変化を成長曲線モデルで分析する。加えて、分散分析により、千葉大学の学生と協定校の学生の比較、あるいは、千葉大学内でGRIPと同時期に実施された他の渡航を伴う留学プログラムやオンライン留学プログラムとの効果比較を行う予定である。

研究 2:「GRIPプログラムを通した学習体験の構造化」インタビュー調査

(1) 対象

2022年度のGRIPプログラム参加学生のうち、後述する研究手続きと倫理的配慮に則った説明を受け、研究協力に同意した学生。上述の参加学生には、千葉大学から派遣する学生のほか、GRIPプログラムを通じて協定校から千葉大学が受け入れる学生も含む。

(2) 期間

倫理審査承認後から2023年9月末日までを研究期間とする。

(3) データ収集

GRIPプログラムにかかわる全ての活動終了後、Google Space上に研究協力依頼(資料 4・5)および誓約書(資料 6)を掲示し、研究手続きや倫理的配慮、協力の有無により不利益を被らないこと等についての説明の上で協力学生を募集する。研究協力に同意する学生にのみ同意書(資料 7)をGoogle Space上で提出してもらう。インタビューはインタビューガイド(資料 8)に則った半構造化インタビューとする。個別にzoomで実施し、同意を得た上で音声記録を取る。

(4) 分析

音声記録は直ちに匿名化・逐語化し、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：TEM）を参考に参加者の体験と学習の経時的な整理と構造化を行う。

Ⅴ 倫理的配慮

1. 研究許可・承諾を得る手続きにおける任意性の保障

(1)研究対象者関連施設（研究対象者の所属・利用等による関連施設。研究協力機関も含む。）への質問紙やインタビュー等の協力を得るための手続き

千葉大学：

・本研究には2022年度のGRIPプログラムに参加予定の看護・薬・医学部、看護学研究科、医学薬学府、国際教養学部の学生が対象者として含まれる可能性がある。GRIPは全学を対象としたプログラムであり、目的、概要、教育効果検証の必要性等、事業に関する説明および協力要請は既に千葉大学全体で行われている。

・上記に加え、看護学研究科では、所属学生を対象としたインタビュー調査を実施する際に倫理審査とは別途学生支援委員会にて研究計画およびインタビューガイドの確認を受ける必要がある。本研究は倫理審査終了後速やかに規定の確認を受ける予定である。

・看護学研究科以外の関連する他学部および研究科に確認したところ、本研究について倫理審査とは別に上述のような審査を受ける必要性はないことが確認された。

協定校：

・GRIPプログラムが「大学の世界展開力強化事業」として申請および採択されるにあたって、学生の派遣、受け入れ、それらの前後の教育、並びに教育効果の検証についての協力関係が既に構築されている。

・研究の計画および実施に際しても協定校の研究責任者と連携し、双方の学生に対し十分な倫理的配慮がなされるよう留意する。

(2)研究対象者の承諾を得る手続き

研究１：質問紙調査

・ 対象者に対しGoogle Spaceを通じて研究協力依頼書(資料１・2)を提示する。任意性の保障などの説明を徹底し、強制力が行使されない配慮を行う。

・ 研究協力は対象者の自発的意志に基づくもので、常時協力中止の申し出が可能であり、中止の申し出により不当な扱いを受けないことを研究協力依頼書で説明する。

・ 調査協力の撤回は自由であることを研究協力依頼書に記載する。

・ 研究参加の協力・非協力に関わらず、それによる不利益が生じないことを、研究協力依頼書を用いて十分に説明を行う。

・ 研究協力依頼書を読み、理解の上、協力に同意してもらえる場合のみ、調査票(資料9)へ回答をもとめる。また、調査票への回答および送信を以って、この研究に同意すると判断する。同意しない場合、調査票への回答は不要とする。

研究２：インタビュー調査

・ インタビューの実施に関する研究協力依頼(資料４・5)は、成績評価に関わらない研究者(以下「特任教員」とする)が行う。

・ 研究説明のはじめに、研究協力は対象者の自発的意志に基づくもので、常時協力中止の申し出が可能であり、中止の申し出により不当な扱いを受けないことを研究協力依頼書で説明する。

・ 研究協力の同意は文書で回答し、Google Space上に提出する(資料7)。

・ インタビュー開始直前にも倫理的配慮等の口頭説明と協力意志の確認を行う。また、インタビュー中および終了後も協力の撤回は自由であることを伝える。

・ 研究を公表するときに、研究協力への意志を再確認する。

2. 研究実施における安全性・負担の軽減の保障

(1)申請者の研究遂行能力の担保・研究への準備状況

申請者および共同研究者は、質的研究および量的研究に関する豊富な経験および業績を有している。また、研究メンバー間で合意形成を行いながら研究計画を立案し、研究の実現可能性は保証されている。さらに、データ分析は研究経験者複数名により実施し、分析プロセスにおいては研究者間での討議を十分に行うことでデータの信頼性・妥当性を確保する。

(2)研究協力に伴う不利益やリスクに対する対応(身体的・精神的・社会経済的・時間的負担等に対する配慮も含む)

研究 1:質問紙調査

・研究協力依頼は、各学部の状況に合わせて研究協力者の負担の少ない時期を選んで行う。例として、医学部や看護学部の国家試験前、教育学部の教員採用試験前や、実習の時期にはデータ収集を実施しない。

研究 2:インタビュー調査

・インタビューの実施日は、学生に予定を確認し、学生の都合(希望)に合わせて設定する。

・インタビューに対する抵抗感や拒否感を最小限にするために、インタビューは特任教員が担当する。インタビューは協力者の利便性やプライバシーを確保するためzoomで個別に実施する。

・インタビュー内容の録音についての諾否を確認し、承諾しない場合は録音を行わない。

・インタビューにより不快感が発生しないよう、インタビュー実施者はその場の状況や研究協力者の様子に敏感になり、研究協力者の精神的負担が推測される場合は、データ消去や途中終了等を躊躇せず行う。

・インタビュー実施後も、研究協力者から話した内容の一部分については使わないで欲しいというような申し出があった場合には、インタビュー実施後6か月以内であれば、データ消去や途中終了など躊躇せず行う。それ以後の場合、消去の希望に応じかねる旨を依頼書に明記し、予め研究協力者に伝えておく。

3. データ収集から公表におけるプライバシー・匿名性・個人情報の保護

(1)データ収集時の配慮

研究 1・研究 2ともに、個人を特定し得るデータは記号化する。万が一散逸した場合にも個人が特定されないように氏名および所属学部の固有名詞は使わない形でデータを保存する。

研究 2：インタビュー調査の場合、さらにインタビュー直前に個人情報保護の注意を喚起し、もしそこに参加していない個人が特定される発言があったときにはその時に記録や録音を停止し、削除する。

(2)データ分析における配慮

研究 1・研究 2 ともに、研究協力の諾否および、ID 化前の個人が特定されるデータについて成績評価担当者にはアクセスさせない。そのため特任教員をデータ管理者とし、ID 化・テキストファイル化の作業を統括し、データアクセスの可否を判断する。

(3)研究資料の管理方法

以下、研究 1・研究 2 ともに採用する管理方法である。

・本研究は複数の研究者による共同研究のため、以下に示すデータ収集、管理、処理方法を研究者間で合意し、倫理的配慮で明文化した具体的ルールを遵守する。

・本研究の参加者が学生であり、授業担当教員が中心メンバーの研究活動となるため、強制力を極力回避するため、データ保管者を決め、徹底する。こうすることにより、研究対象者の不利益を阻止する。成績評価担当者は、データ収集・保管には原則的に関わらないこととする。

・データ保存は研究成果発表後 10年間を原則とする。管理責任者は特任教員とする。管理責任者は特任教員が異動する際は、次期データ管理者を選定し引継ぐものとする。

・成績評価にかかわらない特任教員の中からデータ管理者 1 名を決め、データは電子媒体および紙媒体に保管し、そのデータの保管は鍵のかかるキャビネット内とし、施錠開錠と鍵管理を確実に行う。

・データは紙媒体および電子媒体ともにコピーは必要最低限とし、データ管理者がデータアクセスの承認・非承認を決し、承認された場合はコピーの日時、部数、承認を受けた者の名前を記録に残す。データを預かった共同研究者は各自、専用のデータ収納ボックスを準備し、施錠管理を行う。

上記のほか、研究 2 はさらに以下のことを配慮する。

・録音した電子データおよび逐語録は、データ期間保存終了後に復元不可能な状態にして処分する。

・インタビューにおいて、他の参加者の人権侵害(個人情報の漏洩や名誉毀損)にかかわる可能性が認められたときは即座にインタビューを中断し、可能性がある部分の記録を廃棄する。

(4)研究成果公表及び対象への還元の方法とその際の配慮

・研究 1・研究 2はいずれも研究を公表する予定があること、またその際は個人が特定できないよう十分配慮することを研究協力依頼書の中に記載する。

・研究データの公表に際して、すべての個人が特定できないよう改めて点検する。

・研究 2 は研究公表について事前に研究協力者へ確認した上でGRIPの HP にて周知する。

資料 1

令和　年　　月　　日

年度GRIP参加学生の皆様

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究1 質問紙調査＞へのご協力のお願い

千葉大学は、令和４年度から、国や地域、また文化や専門性の違いを超えて社会課題の解決に貢献できる人材の育成を目指し「グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP、以降GRIPと表記）」を開始しました。

この亥鼻 GRIPプログラムについて、教育効果を明らかにすると同時に、さらに効果的なプログラム構築のための基礎資料を得ることを目的に教育評価研究を行います。

研究内容につきましては、研究計画書および研究を行うにあたっての研究者の遵守事項(次頁以降)をご覧ください。なお、本研究は千葉大学大学院看護学研究院倫理審査委員会にて承認を受けております。ご不明な点などございましたら、お手数ではございますが、下記のお問合せ先へご連絡ください。

当研究の意義をご理解いただき、なにとぞご協力を賜りますようお願い申し上げます。

研究者: 酒井郁子、井出成美、石橋みゆき、飯田貴映子、野崎章子、ｶｽﾞﾉﾌﾞ ﾀﾞﾋﾞｯﾄﾞ、仲井あや、関根祐子、伊藤素行、石川雅之 、伊藤彰一、笠井　大、岩崎　寛、中口俊哉、朝比奈真由美、中村絵里、臼井いづみ 、孫佳茹、天井響子

問い合わせ先　千葉大学看護学研究院附属専門職連携教育研究センターGRIP推進室
センター長 酒井郁子

〒260-8672　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL　043-226-2614
FAX　043-226-2614
e-mail　inohana-ipe@office.chiba-u.jp

次ページ以降をご覧ください

資料 2

令和　年　月　日

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究1 質問紙調査＞に関する研究協力のお願い

この文書は、研究の目的および研究活動全体において、私たち研究グループが、研究協力者の皆様に不利益がないように努める遵守事項について記載しております。

以下の項目をお読みいただき、本研究の趣旨をご理解・ご同意いただきました上で、研究へのご協力をいただきたくお願い申し上げます。

研究への協力にご同意いただける場合のみ、Google Spaceから調査票にご回答ください。

記

本研究は下記の目的で行うものです。研究の趣旨をご理解の上、何卒ご協力をお願い致します。

1. 研究の目的

本研究の目的は、GRIPプログラムの学習効果を評価するとともに、プログラムの有用性を検証し、より教育効果の高いプログラムに改善するための基礎的データを得ることです。

2. 研究方法・期間

1)調査内容

GRIPプログラムに参加した学生ご自身の専門職連携能力、社会課題解決能力、Cultural Competencyの主観的な評価の変化を検討します。

2)調査方法

Google Spaceを通したオンラインの質問紙調査です。回答は全部で30分程度と予想されます。

（1） Google Space上に掲示された研究協力依頼書をお読みいただき、ご協力いただける場合は Google Spaceから「同意して回答を始める」をクリックの上で調査票へご回答ください。

（2） ご回答が終わりましたら、送信ボタンを押してください。

3)日時

学生への協力依頼は、各学部の状況に合わせて学生の負担のない時期を選んで、Google Spaceを通じて行うように配慮します。例として、医学部や看護学部の国家試験、教育学部の教員採用試験等に影響しうる時期や実習時期には調査を実施致しません。

3. 個人情報の保護について

データは、研究者が厳重に保管し、データ保管期間終了後に責任をもって破棄致します。ご回答いただいた内容は、本研究においてのみ使用し、他の研究に用いることはありません。また研究成果を公表する際にも施設や個人が特定される形では公表しないことをお約束いたします。この研究の期間中および終了後でも、この研究に関する質問がありましたら、いつでも文末の問い合わせ先にお問い合わせください。

4.研究協力に伴う不利益やリスクについて

研究への協力・非協力にかかわらず、学生は一切の不利益を被りません。学生への強制力を回避するため、GRIPの授業担当教員は、データ収集・保管には原則的に関わらないこととします。また、特任教員をデータ管理者とし、ID 化・テキストファイル化の作業を統括し、データアクセス者を制限します。

5.研究に要する費用

研究にご協力いただけることでの謝礼はございません。この研究にかかる費用について、貴施設の直接の経済的負担は一切ありません。研究に必要な費用は、研究者がすべて負担致します。

6.研究計画等の開示

ご希望があれば、いつでもこの研究の研究計画の内容をご参照していただくことができます。

7.研究への協力の拒否権について

この研究への協力はお断りになることができます。また、一旦同意した場合であっても、いつでも途中でやめることができます。

学生においても、研究協力は自発的意志に基づくもので、常時協力中止の申し出が可能です。回答時に中止の申し出により不当な扱いを受けないことをお約束致します。

8.研究データの利用について

この研究のために提出いただきました調査の内容は、本研究においてのみ使用し、他の研究に用いることはありません。

9.研究結果の報告

研究の進捗状況やその成果、学術的な意義については、ご希望に応じ、分かりやすい形で説明致します。研究成果を公表する際には、公表前にデータの共有と公表内容の合意を得て行います。個人が特定される形では公表しませんし、できる限りの配慮を致します。

10.研究中・終了後の対応

この研究の期間中および終了後でも、この研究に関する質問がありましたら、いつでも下記の問い合わせ先にお問い合わせください。

問い合わせ先
看護学研究院専門職連携教育研究センター GRIP推進室　センター長 酒井郁子
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL/FAX　043-226-2614　inohana-ipe@office.chiba-u.jp

資料３

「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究協力に関する誓約書

<研究１　質問紙調査>

****

私は、研究活動全体において別紙でご説明したことを遵守し、データ提供者のプライバシーを守り、これを研究以外に使用しないことを約束します。また、研究論文に個人を特定しうるような方法による論述や公表を行わないことを約束します。

研究者名＿＿＿＿＿＿酒　井　郁　子＿＿＿＿＿＿

資料 4

令和　年　月　日

年度GRIP参加学生の皆様

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究2 インタビュー調査＞に関する研究協力のお願い

千葉大学は、令和４年度から、国や地域、また文化や専門性の違いを超えて社会課題の解決に貢献できる人材の育成を目指し「グローバル地域ケアIPEプラス（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program GRIP、以降GRIPと表記）」を開始しました。

この亥鼻 GRIPプログラムについて、教育効果を明らかにすると同時に、さらに効果的なプログラム構築のための基礎資料を得ることを目的に教育評価研究を行います。

研究内容につきましては、研究計画書および研究を行うにあたっての研究者の遵守事項(次頁以降)をご覧ください。なお、本研究は千葉大学大学院看護学研究院倫理審査委員会にて承認を受けております。ご不明な点などございましたら、お手数ではございますが、下記のお問合せ先へご連絡ください。

当研究の意義をご理解いただき、なにとぞご協力を賜りますようお願い申し上げます。

研究者: 酒井郁子、井出成美、石橋みゆき、飯田貴映子、野崎章子、ｶｽﾞﾉﾌﾞ ﾀﾞﾋﾞｯﾄﾞ、仲井あや、関根祐子、伊藤素行、石川雅之 、伊藤彰一、笠井　大、岩崎　寛、中口俊哉、朝比奈真由美、中村絵里、臼井いづみ 、孫佳茹、天井響子

問い合わせ先　千葉大学看護学研究院附属専門職連携教育研究センターGRIP推進室
センター長 酒井郁子

〒260-8672　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL　043-226-2614
FAX　043-226-2614
e-mail　inohana-ipe@office.chiba-u.jp

次ページ以降をご覧ください

資料５

「GRIPプログラムの教育評価に関する研究」

＜研究2 インタビュー調査＞に関する研究協力のお願い

この文書は、研究の目的および研究活動全体において、私たち研究グループが、研究協力者の皆様に不利益がないように努める遵守事項について記載しております。ぜひ、下記の内容をご理解の上、研究へのご協力をいただけますようお願い申し上げます。

以下の項目をお読みいただき、研究に協力することにご同意いただける場合は、同意書に記入の上、Google Space上に提出してください。

記

1　研究の目的

本研究の目的は、GRIPプログラムの学習効果を評価するとともに、プログラムの有用性を検証し、より教育効果の高いプログラムに改善するための基礎的データを得ることです。

2　研究方法

Zoomを利用したオンライン個別インタビュー調査

研究協力に同意の得られた皆様には、今回のGRIPでの学習の体験について、インタビュー調査をします。実施日はご都合に合わせて個別に決定します。インタビューの内容は、研究協力者に可否を確認したうえで、IC レコーダーにて録音します。インタビューの時間は、30分から最大で1 時間ほどです。終了後に謝礼としてアマゾンギフトカード3,000円分をメールアドレスにお送りします。

3 調査の手順および特記事項

1)研究に同意していただける方には研究協力への同意書に署名し、Google Space上の提出場所へ提出していただきます。

2)インタビュー内容は、GRIPでのご自身の経験や考えです。

3)インタビューは、研究協力者と日程調整のうえ、原則としてzoomで個別に実施します。

4)もしインタビューおよびその回答内容において、倫理的配慮が損なわれていると調査者が認めた場合(例えば、他者の尊厳を脅かす発言や患者・利用者、学生の個人情報の漏えい等)は、その場で中断し録音データを消去いたします。

5)研究への同意後だけでなく、インタビュー実施後も、話した内容の一部分について使わないで欲しいというような申し出があった場合には、インタビュー実施後6か月以内であれば、研究協力者の希望により、データ消去や途中終了など躊躇せず行います。それ以後の場合、研究が分析終了後といった消去が不可能な段階に入る可能性があるため、消去へのご希望に応じかねますことをご了承ください。

4　倫理的配慮

①研究協力に伴う不利益やリスクに対する対応

・研究協力の諾否によって、学生は、いかなる不利益も被ることはありません。

・成績評価に関与しない立場の教員を実施者およびデータ管理者とします。

・インタビューは、GRIP担当教員のうち、成績評価を担当せず、且つインタビュー調査の経験が豊富な特任教員

が行います。インタビューへの協力の有無を授業担当教員に伝えることもありません。
・インタビューにより不快感が発生しないよう、インタビュアーは、研究協力者の回答内容をよく聞き、インタビューの間に、不快感の有無や研究協力続行の意志を確認するようにします。
・インタビュー中に研究協力者の精神的負担が推測される場合にいは、データ消去や途中終了等を躊躇せず行います。
・研究協力者がインタビュー内容の録音を承諾しない場合は録音を行わず、インタビュアーが内容を筆記致します。
②研究遂行能力
・インタビューは、インタビュー調査経験を充分に持つ研究者(特任教員)2 名によって行われます。
③問い合わせ等の方法と対応
・ 教員の問い合わせ先
千葉大学看護学研究院附属専門職連携教育研究センターGRIP推進室　センター長 酒井郁子
〒260-8672　　千葉市中央区亥鼻 1-8-1
TEL043-226-2614 FAX043-226-2614　　e-mail inohana-ipe@office.chiba-u.jp
④ 研究協力の同意をいただく方法と途中辞退の保障
・ 研究協力の同意は所定の書式に記入し、Google Space上に提出してください。
・ 研究協力は学生の自発的意志に基づくもので、同意書を提出した後、またインタビュー実施後も、常時協力中止の申し出が可能です。また、中止の申し出により不当な扱いを受けることはありません。
・ 同意書を提出後、協力中止を申し出たい場合は、上記③に連絡をしてください。電話・FAX・メールどのような方法でも構いません。
・ インタビューは、開始直前に改めて意志確認を行います。協力の撤回は自由です。
⑤プライバシー・匿名性・個人情報の保護および人権侵害の回避
・ 個人を特定し得るデータは記号化することで、万が一散逸した場合にも、個人が特定されないように氏名および所属学部の固有名詞は使いません。
・ データ管理者 1 名(特任教員)を決め、データの保管と管理を確実に行います。
・ 研究データの公表に関しては、すべての個人が特定できないよう、改めて点検します。
・ インタビューに先立ち、個人情報保護の注意を喚起し、もしそこに参加していない個人が特定される発言があったとき、人権侵害に関わる内容があった場合には、その時に記録や録音を停止し、削除します。
・ 録音した電子データおよび逐語録は、データ保存期間(研究成果発表後10年間)終了後に復元不可能な状態にして処分します。
⑥研究成果公表及び対象への還元の方法とその際の配慮
・ 研究データの公表に関しては、すべての個人が特定できないよう改めて点検致します。
・ 研究公表については、事前にメールにて協力者に確認の上GRIPのHPにて周知致します。

資料 6

「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究協力に関する誓約書

<研究２ インタビュー調査>

****

私は、研究活動全体において別紙でご説明したことを遵守し、データ提供者のプライバシーを守り、これを研究以外に使用しないことを約束します。また、研究論文に個人を特定しうるような方法による論述や公表を行わないことを約束します。

研究者＿＿＿＿＿＿酒　井　郁　子＿＿＿＿＿＿

日付:令和　　年　　月　　日

資料７

「GRIP プログラムの教育評価に関する研究」

研究協力 同意書

(研究２ インタビュー調査)

研究協力に同意していただける方は下記に記入し、GRIPのGoogle Space 上の BOX にご提出ください。なお、インタビューにご協力いただける方へは、インタビュー前に誓約書をお渡し、改めてご意向をご確認した上で同意書にご署名をいただきます。

****

私は、「**GRIP プログラムの教育評価に関する研究**」について文書による説明を受け、研究の目的・内容・方法・期待される利益および起こりうる不利益などについて説明を受け、理解しました。

そこで、私の自由意思にもとづいて、この研究に協力し、インタビューを実施することに同意します。

参加者(記名)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

日付:令和　　年　　月　　日

インタビューにご協力いただける方は、下の欄にご連絡先をお書き下さい。インタビューの日程調整と、公表する前に協力者の方に閲覧していただく際の連絡のためであり、それ以外の目的には使用いたしません。

Email＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料 8

学習体験の構造化用《インタビューガイド》

このインタビューでは、GRIPでのみなさんが体験したことやそのときの考えを伺います。目的は、プログラムの評価と、授業やプログラムの改善を行う際の基礎資料を得ることです。

インタビューは成績評価とは無関係です。みなさんの人権やプライバシーを保護し、協力の有無やお話された内容が成績に影響しないことを約束します。

参加は自由です。途中でやめたくなった場合、そこで終了することも可能です。終了後にデータやその一部を使ってほしくないと考えが変わったときは、6ヶ月以内にご連絡いただけましたらデータを削除します。

ここまでで質問や心配なことはありますか？（ある場合は回答。ない場合は次に進む。）

では、これから録音を開始します。よろしいでしょうか。（許可を得た場合は録音開始）

１．まず、今回GRIPに参加したきっかけを教えてください。

・他の留学プログラムもある中で、GRIPを選択したのはなぜですか？
・GRIP参加前に、他学部（他研究科）と連携・協働して学習やプロジェクトを進めた経験はどれくらいありましたか？
・GRIP参加前に、国内外への社会問題への関心はどれくらいありましたか？
・GRIP参加前に、異なる文化や価値観に触れた経験はどれくらいありましたか？
・GRIPに期待していたことはありますか？

２．事前学習についてお聞きします。

・事前学習の中で印象に残っていることはありますか？
・なぜその出来事があなたにとって強く印象に残ったのだと思いますか？（この2点を深く聴く）
・他に印象に残っていることはありますか？（なくなるまで繰り返し）

３．現地演習についてお聞きします。

・現地演習の中で印象に残っていることはありますか？
・なぜその出来事があなたにとって強く印象に残ったのだと思いますか？（この2点を深く聴く）
・他に印象に残っていることはありますか？（なくなるまで繰り返し）

４．成果発表会についてお聞きします。

・成果発表会やその準備の中で印象に残っていることはありますか？
・なぜその出来事があなたにとって強く印象に残ったのだと思いますか？（この2点を深く聴く）
・他に印象に残っていることはありますか？（なくなるまで繰り返し）

５．あなたの考えについてお聞きします。

１）他学部（研究科）と連携・協働して学習やプロジェクトを進めること対する考え方や態度は、GRIPを通して変化したと思いますか?
・どのように変化したと思いますか？
・変化のきっかけとなったことはありますか？

２）国内外の社会問題に対する考え方や態度は、GRIPを通して変化したと思いますか?
・どのように変化したと思いますか？
・変化のきっかけとなったことはありますか？

３）異なる文化や価値観に対する考え方や態度は、GRIPを通して変化したと思いますか?
・どのように変化したと思いますか？
・変化のきっかけとなったことはありますか？

６．最後に、GRIP全体についての感想や、今後改善して欲しいことを教えてください。

資料 9

測定尺度項目一覧

専門職連携実践能力

King et al. (2016). Refinement of the Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21) and Development of 9-Item Equivalent Versions.pdf

6 I am aware of my preconceived ideas when entering into team discussions.
7 I have a better appreciation for using a common language across the health professionals in a team.
9 I have gained an enhanced awareness of my own role on a team.
10 I am able to share and exchange ideas in a team discussion.
11 I have gained an enhanced perception of myself as someone who engages in interprofessional practice.
12 I feel comfortable being the leader in a team situation.
13 I feel comfortable in speaking out within the team when others are not keeping the best interests of the client in mind.
16 I feel comfortable in describing my professional role to another team member.
17 I have a better appreciation for the value in sharing research evidence across different health professional disciplines in a team.
19 I am able to negotiate more openly with others within a team.
21 I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.
24 I am comfortable engaging in shared decision making with clients.
25 I feel comfortable in accepting responsibility delegated to me within a team.
26 I have gained a better understanding of the client's involvement in decision making around their care.
27 I feel comfortable clarifying misconceptions with other members of the team about the role of someone in my profession.
28 I have gained greater appreciation of the importance of a team approach.
29 I feel able to act as a fully collaborative member of the team.
30 I feel comfortable initiating discussions about sharing responsibility for client care.
32 I am comfortable in sharing decision making with other professionals on a team.
33 I have gained more realistic expectations of other professionals on a team.
34 I have gained an appreciation for the benefits in

問題解決能力

佐藤ほか.(2006).SocialProblem-SolvingInventory-Revised(SPSI-R)日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討.pdf

Ⅲ合理的問題解決(RPS:α=.92)

(1)問題の定義と公式化(PDF:α=.80)

11　解決すべき問題を抱えている時は、状況を分析し、どのような障害物が自分の望みの達成を妨げているのかを明らかにしようとする

29　解決しなければならない問題が起こった時は、まず最初に、その問題に関するできるだけ多くの事実を手に入れようとする

33　問題を解決しようとする前に、自分の達成したい具体的な目標を設定する

44　解決しなければならない問題が起こった時は、自分の周りのどのような要因や状況がその原因となっているかを調べる

49　問題を理解するのが困難な時は、問題を明らかにするために役立つ、より明確で具体的な情報を手に入れようとする

(2)さまざまな解決法の案出(GAS:α=.77)

5　問題を解決しようとしている時は、しばしば異なった解決策を考え、それらのいくつかを組み合わせて良い解決策を生み出そうとする

20　問題を解決しようと試みる時は、創造的になり、新しい解決策や独自の解決策を考え出そうとする

39　問題を解決しようとしている時は、もうそれ以上アイデアを思いつけなくなるまで、できるだけ多くの選択肢を考える

47　問題を解決しようとしている時は、自分の目標が何であるのかを常に気にかけている

48　問題を解決しようと試みる時は、できるだけ多くの違った角度から問題に取り組む

(3)意志決定(DM:α=.72)

18　決断しなければならない時は、それぞれの選択肢のうまくいった場合とうまくいかなかった場合の結果を予想しようとする

24　決断する時は、それぞれの選択肢の直後の結果と、長い目で見た結果の、両方を考慮する

40　決断しなければならない時は、それぞれの解決策の結果をよく考え、互いに照らし合わせて比較する

43　決断しなければならない時は、それぞれの選択肢が自分の気分にどのような影響を与えるか考慮する

46　決断する時は、選択肢を判断し、比較するために体系化された方法を用いる

(4)解決法の実行と検証(SIV:α;.77)

25　解決策を実行した後で、何が良くて何が悪かったのか分析する

26　解決策を実行した後で、自分の気分を調べ、どのくらい良くなっているか評価する

27　問題に対する解決策を実行する前に、自分の成功のテヤンスを増やすため、その解決策を復習する

35　問題に対する自分の解決策の結果に不満足な時は、何が悪かったのかを発見し、再び試してみる

37　問題に対する解決策を実行した後で、状況がどのくらい良くなっているかを、できるだけ注意深く評価しようとする

2

Cultural Competency

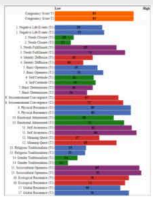
以下、BEVIのプログラムサイト（https://jp.thebevi.com/about/scales/）より

Language English

BEVI

トップ　BEVIとは　費用/サポート　ログイン　コンタクト

BEVIのすべてのバージョンは、次の相互に関連する４つの質問項目から構成されています:



1. 包括的な人口統計・背景情報に関する質問項目（プロジェクトに合わせて変更可能）
2. 生い立ちまた経歴に関する質問項目
3. 2つの妥当性と17の「尺度」に関する質問項目
4. 3つの質的な「経験に対する内省的」質問項目

妥当性の尺度には、一貫性と適合性が含まれています。17の尺度は次の7つの領域に分類されます:

I. 妥当性の尺度 Validity Scales

一貫性 *Consistency*: 類似又は同一の内容を測っているが表現の異なる質問項目に対する、回答の一貫性（「人は常に変化する」、「人は実際には変わらない」など）(e.g., "People change all the time." "People don't really change.")

適合性 *Congruency*: 統計的に推定できる回答パターンとの、回答の一致の程度（「温かさや愛情を真に欲している」、「自分の感情を深刻に受け止めている」、など） (e.g., "I have real needs for warmth and affection." "I take my own feelings very seriously.")

II. 形成的因子 Formative Variables

1. 人生における負の出来事 *Negative Life Events*: 困難な子ども時代、問題を抱えていた両親、人生における葛藤/苦闘、多くの後悔（「家族の1人または複数との衝突が多い」、「家族が金銭的な問題を抱えていた」など）(e.g., "I have had a lot of conflict with one or more members of my family." "My family had a lot of problems with money.")

III. 中核的欲求の充足 Fulfillment of Core Needs

2. 欲求の抑圧 *Needs Closure*: 不幸な生い立ち/生活史、いさかいの多い/不安定な家族構造、物事が起こる原因・状態の原因についてのステレオタイプの思考/筋が通らない説明（「素晴らしい子ども時代だった」、「他よりも運のいい数字がある」など）(e.g., "I had a wonderful childhood." "Some numbers are luckier than others.")

3. 欲求の充足 *Needs Fulfillment*: 経験・欲求・感情に対してオープン、自分・他者・より広い世界に対する気遣い/思いやり（「子どもの早期教育プログラムにもっとお金を費やすべきだ」、「自分が何者なのかを考えることが好きだ」など） (e.g., "We should spend more money on early education programs for children." "I like to think about who I am.")

4. アイデンティティの拡散 *Identity Diffusion*: アイデンティティの危機、結婚生活/家族生活についての否定的宿命論、自分や将来に対する「否定的な」感情（「つらいアイデンティティの危機を経験している」、「男性が結婚に忠実であることを期待しているが、実際はそうはならない」など） (e.g., "I have gone through a painful identity crisis." "Even though we expect them to be, men are not really built to be faithful in marriage.")

IV. 不均衡の許容 Tolerance of Disequilibrium

5. 基本的な開放性 *Basic Openness*: 基本的な思考、感情、欲求に対してオープンかつ率直（「自分というものを常に良いと思っているわけではない」、「自分の人生は孤独だと感じている」など） (e.g., "I don't always feel good about who I am." "I have felt lonely in my life.")

6. 自分に対する確信 *Self Certitude*: 強い意志、困難に対し言い訳することが我慢できない、ポジティブ思考を強調する、深い分析を好まない（「もっと頑張れば、ほとんどの問題は克服できる」、「ルールに従ってやれば、うまくやれる」など）(e.g., "You can overcome almost any problem if you just try harder." "If you play by the rules, you get along fine.")

V. 批判的思考 Critical Thinking

7. 基本的な決定論 *Basic Determinism*: 差異/行動について簡潔な説明を好む、人は変わらない/強者が生き残ると信じている、苦労の多い生活史（「エイズは神の怒りの証だ」、「強者が生き残るのは当然だ」など） (e.g., "AIDS may well be a sign of God's anger." "It's only natural that the strong will survive.")

8. 社会・情動の理解 *Socioemotional Convergence*: 自己、他者、より広い世界を認識している/オープンである、思慮深く、実用主義、意思が固い、自立の必要性を認める一方で弱者を気遣うなど世界を白黒では捉えない（「不幸な人を救うためにもっと何かしなければならない」、「自分の責任を果たしていない人が多すぎる」など） (e.g., "We should do more to help those who are less fortunate." "Too many people don't meet their responsibilities.")

VI. 自己の理解 Self Access

9. **身体への共鳴** *Physical Resonance*: 身体的欲求/感情の受容、経験主義、人間性/進化の影響を評価する（「私は自由な精神の持ち主だ」、「私の体は私の感情に敏感だ」など） (e.g., "I am a free spirit." My body is very sensitive to what I feel.")

10. 感情の調整 *Emotional Attunement*: **感情に動かされやすい、傷つきやすい、社交的、愛情を求めている、親和的、愛情表現に価値を置く、家族関係が親密（「感情を表すのは気にならない」、「弱さは美徳でありうる」など）** (e.g., "I don't mind displays of emotion." "Weakness can be a virtue.")

11. 自己認識 *Self Awareness*: 内省的、自己の複雑性を受け入れる、人の経験/状態を気遣う、難しい思考/感情を許容する（「常に自分をよりよく理解しようと努めている」、「取り組むべき課題を抱えている」など） (e.g., "I am always trying to understand myself better." "I have problems that I need to work on.").

12. 意味の探求 *Meaning Quest*: 意味を模索する、人生にバランスを求める、耐性がある/根気強い、感受性が高い、弱者への思いやり（「人生の意味についてよく考える」、「人生のバランス感覚をもっとよくしたい」など） (e.g., "I think a lot about the meaning of life." "I want to find a better sense of balance in my life.").

VII. 他者の理解 Other Access

13. 宗教的伝統主義 *Religious Traditionalism*: **宗教心があつい**、自己/行動/出来事を神/霊的な力によるものと考える、「来世」を信じる（「宗教がなければ平和はないだろう」、「天国への道がある」など） (e.g., "Without religion there can be no peace." "There is one way to heaven.").

14. ジェンダー的伝統主義 *Gender Traditionalism*: 男性と女性はある型にはまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む（「女性は男性より感情的だ」、「男性の役割とは、強くあることだ」など） (e.g., "Women are more emotional than men." "A man's role is to be strong.").

15. **社会文化的オープン性***Sociocultural Openness*: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである（「自分とは異なる文化を理解しようと努めるべきだ」、「わが国では、貧富の差が大きい」など） (e.g., "We should try to understand cultures that are different from our own." "There is too big a gap between the rich and poor in our country.").

VIII. 世界の理解 Global Access

16. 生態との共鳴 *Ecological Resonance*: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している（「環境が心配だ」、「所有者が誰であろうとも、この土地を守らなければならない」など） (e.g., "I worry about our environment." "We should protect the land no matter who owns it.").

17. 世界との共鳴 *Global Resonance*: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる（「世界の出来事についてよく知っておくことが大切だ」、「自分とは大きく異なる人々の集団といることが快適だ」） (e.g., "It is important to be well informed about world events." "I am comfortable around groups of people who are very different from me.").

IX. 経験に対する内省的な質問項目

BEVIは、「混合メソッド」的な測定方法で、量的なもの（尺度）と質的なもの（自由回答）の双方を問い（Coates, Hanson, Samuel, Ashe, & Cozen, 2016; Cozen, Hanson, Poston, Jones, & Tabit, 2016など）、これらに基づく分析を行っています。BEVIには次の３つの質的な経験に対する内省的な質問項目が含まれており、これらにはテストの最後に記述形式で答えてもらいます。

- 国際的な学習体験の、どのような出来事・側面があなたに最も影響を与えましたか？また、それはなぜですか？
- **この経験の結果、あなた自身の「自己」や「アイデンティティ」（例えば、ジェンダー、民族性、性的指向、宗教的背景、政治的背景など）が、明確になりましたか？**
- **国際経験や異文化交流体験の結果、あなたは何を学びましたか？また、あなたはどのように変わりましたか？**

BEVIデータの解釈には多種のレポートが**利用可能で**、研究者やtBEVI管理者はグループのテスト結果を様々な方法で分析することができます（グループ内の差異を含む）。もっとも単純なレポートの一例として、各尺度についてグループの事前（T1）と事後（T2）の中央値の集計例を以下に示します。

資料６　学習の進め方

2022 年度　　GRIP　プログラム

学習要項

（2023 年　1～3 月）

Ver. 3（JPN）

この学習要項の使い方

GRIP プログラムに参加して学習するにあたり、ゴールや道筋を見失わず、かつ、主体的に、他学生や教員、関係者と協同しつつ、有意義な学習となるようにガイドとして活用してください。

目次

１．　GRIP プログラムのめざすところ
　1）GRIP とは
　2）プログラムの概要
　3）育成する人材像
２．　GRIP プログラムの構成と学習活動の概要
　1）GIRP プログラムの構成
　2）学習活動の概要
　3）大学院副専攻としての GRIP プログラム
　4）修了と単位認定
３．　GRIP での取得能力と到達目標
　1）文化的対応能力
　2）IPCP：Interprofessional Collaborative Practice に関する能力
　3）社会課題解決に関する能力
４．　ISL の各パートでの具体的な学習活動と課題（2022 年度トライアル版）
　1）使用学習プラットフォームのログイン法等
　2）事前学習の具体的内容
　3）フィールド演習
　4）事後学習
５．　評価方法
６．　GIRP での ISL を安全に行うための心構えと事故発生時の対応
資料 1. 現地フィールド演習スケジュール
資料 2. 現地フィールド概要
資料 3. ワークシート
資料 3－1　個人用　リフレクションシート（中間・最終評価）
資料 3－2　チーム用　リフレクションシート(中間・最終評価)
資料 3－3　学習成果統合シート
資料 3－4　コミュニティアセスメント資料

１． GRIP プログラムのめざすところ

1）GRIP とは

GRIP とは、グローバル地域ケア IPE+創生人材の育成（Global & Regional Interprofessional Education Plus Program：GRIP Program）の略称です。2022 年度の文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」の一つです。

2）プログラムの概要

世界中の多様な「地域特有の健康課題」に取り組み、それぞれの現場での最適解を導き出す人材を育成するため、本学で 2007 年から実施している医薬系学部を横断した「専門職連携教育プログラム－亥鼻 IPE」を全学に発展させ、さらに複数の国の複数の専門領域の学生がお互いに学びあうプログラムとなっています。JV-Campus 等を活用した事前学習ののち現地演習を経て、バーチャルワークショップで共有していきます。

3）育成する人材像

どの国、どの地域であっても、自国でも他の国でも健康関連の課題に他の専門職とともに取り組み、文化的対応能力及び文化的謙虚さを基盤として、現場での最適解を導き出すことができる自律した組織人の育成をめざします。WHO が提唱する Universal Health Coverage「全ての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」を推進し、SDGs の開発目標 3「すべての人に健康と福祉を」の実現のために寄与する、地域ケアを創生できる専門職を養成します。

２． GRIP プログラムの構成と学習活動の概要

1）GIRP プログラムの構成

GRIP プログラムは、中核となる学習活動として Interprofessional Service　Learning（ISL）を実施します。実渡航し、現地で実際に活動を行うフィールドスタディとその前後の、事前学習、事後学習（バーチャルワークショップ）の 3 つのパートからなる構成です（下図参照）。

学術領域や学部・大学院を越えて、参加学生がチームとなって、それぞれの専門性や個性、強みを発揮して、健康に関連する社会課題の解決に取り組みます。

図 1　GRIP プログラムの構成と学習概要

2）学習活動の概要

事前学習：自国内でのオンライン学習

GRIP プログラムの核となる概念や取得をめざす能力である、Interprofessional work（IPCP）、Cultural Competency と Cultural Humility といった文化的対応能力、社会課題解決についてオンライン学習を行います。加えて、健康に関連する課題把握に関連する国際保健や自他国、特に派遣先の保健医療制度等について学習します。オンライン上で自己紹介を行い、チームビルディングを開始します。オンラインの LMS（learning management system）として、

千葉大学の Google Classroom やメタバースプラットフォームを用います。
オンライン学習では、ISL 全般を通してオンデマンドでの動画・資料視聴の他、リアルタイムでのディスカッションやプレゼンテーションもあるので、WEB 会議ができるだけの機材(PC、WEB カメラ、マイク、イヤホン(ハウリング防止のために使用推奨))を事前に準備してください。
フィールド演習：現地演習
パートナー大学が提供するフィールドに実際に赴きます。渡航期間は約 10 日間、実際のプログラム期間は 8 日程度です。現地での生活を送りながら、フィールドでのサービス活動に参加し、見学やシャドウイング等の実践を行い、実際の社会課題とその対策や支援法について学習します。フィールドは、例えば、子どもに関すること、高齢者に関することなど、特定の具体的なトピックとそれに関連するコミュニティや組織、施設などです。
学生は、本 GRIP の基盤として、文化対応能力を意識しつつ、チームの IPCP として、社会課題解決に取り組みます。
事後学習（ヴァーチャルワークショップ）：自国内でのオンライン学習
　千葉大学に加え、パートナー大学の GRIP 参加学生や関連教員等も加わり、参加学生の学習成果発表会として、協同でワークショップを開催します。各大学の学生はチームで発表準備と発表を行います。メタバースをプラットフォームとして使用します。そして、学生の発表事例は、次年度のケースシナリオとして活用します。
トライアル版としての 2022 年度（2023 年）の実施内容
　2022 年度は、トライアル版として、事前学習は Google Classroom、さらにメタバースプラットフォームを使用しての非同期でのオンライン学習としています。

　2023 年度以降は、これらに加えて JV-Campus を使用します。
図 2　　2022 年度トライアル版　GRIP プログラムを構成する 3 つのパートと内容

3）大学院副専攻としての GRIP プログラム

　2023 年度は、以下の通り、ISL（2 単位）に加え、所定の 6 科目の計 7 科目（8 単位）が認定されれば副専攻として修了することができます(参考：千葉大学 大学院国際実践教育 https://global-education.chiba-u.jp/globalstudies/)。千葉大学の学生であれば、いずれの大学院研究科ならびに学部学生であっても修了が可能です。2023 年度の後期に開講予定です。
図 3　大学院副専攻としての GRIP プログラムの構成

4）修了と単位認定

　千葉大学学生は、ISL を履修・修了すると、2022 年度は、学部生は看護学部の Global Health and Nursing II として、大学院生は看護学研究科の 2 単位の ENIGINE 該当科目として単位認定します。2023 年度からは、看護学部生ならびに他学部生は同様に Global Health and

Nursing II として、大学院生は ISL（Interprofessional Service Learning）として同様に ENGINE 該当科目として 2 単位の単位を認定・付与します。

パートナー大学の学生は、特別聴講学生 Exchange Student として、千葉大学在学学生と同様に単位認定・付与されます。参加を証明する認定証 certification も発行します。

３． GRIP での取得能力と到達目標

GRIP プログラムでは、取得・向上をめざす核となる 3 つの能力、すなわち、文化対応能力、IPCP、社会課題解決能力について、表の通りに具体的項目を設定しています。

また、ISL における実践では、個々の学生も学習・実践経験などのレディネスに合わせた 3 段階のレベルの到達目標を設定しています。

事前に、各能力等について、自身の状況を把握し、目標を設定し、プログラム中、終了後等に評価し、さらなる向上につなげていくことが望まれます。

1）文化的対応能力

文化的対応能力では、Cultural Competency と、Cultural Humility に焦点を当てます。異文化状況において、質の高い、効果的なヘルスケアを提供するために、次のような文化的対応能力が求められます。また、これらはケアの対象者と自身の間だけのことではなく、異なる価値基準や信念を有する多職種間や、同じ国に暮らす人々の間でも留意することが必要です。

ヘルスケア提供における CC と CH は次のような Cultural Competency とは、a developmental process in which one achieves increasing levels of awareness, knowledge, and skills along a continuum, improving one's capacity to work and communicate effectively in cross-cultural situations.

Cultural Humility とは、a reflective process of understanding one's biases and privileges, managing power imbalances, and maintaining a stance that is open to others in relation to aspects of their cultural identity that are most important to them. （出典：CLAS, cultural competency, and cultural humility, US Department of Health and Human Services Office of Minority Health https://www.minorityhealth.hhs.gov/Assets/PDF/TCH%20Resource%20Library_CLAS%20CLC%20CH.pdf）

それぞれを発達・発展させるためには、以下のような意図的な行動が必要です。常に、これらの項目について意識し、文化的対応能力を意図的に向上できるようにしましょう。

表 1　文化的対応能力　Cultural Competency and Cultural Humility strategy for practicing

Cultural Competency
Learning about your own and others' cultural identities
Combating bias and stereotypes

Respecting others' beliefs, values, and communication preferences
Adapting your services to each patient's unique needs
Gaining new cultural experiences
Cultural Humility
Practicing self-reflection, including awareness of your beliefs, values, and implicit biases
Recognizing what you don't know and being open to learning as much as you can
Being open to other people's identities and empathizing with their life experiences
Acknowledging that the patient(client) is their own best authority, not you
Learning and growing from people whose beliefs, values, and worldviews differ from yours

＊活動場所や状況に応じて、表中の「患者」は対象者(クライアント)に、「治療」はケアやサービスに読み替えます。

2）IPCP：Interprofessional Collaborative Practice に関する能力

IPCP については、表 2 のように 6 つの能力を設定しています。ISL では、社会課題の解決に、多職種専門家のチームとして取り組みます。GRIP プログラムでは、参加学生は学年や専門性も異なり、自身の専門性についての知識や経験の幅があるため、確固たる役割の違いや責任の明確化などについては幅が大きいと想定されます。つまり、より現実的な状況での多職種専門家間連携としてのチーム活動となります。この状況を踏まえた上で、IPCP の能力を常に意識して活動に取り組むことで向上を目指しましょう。

表 2　取得ならびに向上をめざす IPCP に関する能力

専門混在のチームワークでの課題解決	Problem solving through mixed-specialty teamwork
各専門の役割と責任の明確化	Clarification of roles and responsibilities for each specialty
コミュニケーションとリーダーシップ	Communication and leadership
チーム学習とその反映	Team learning and reflection
ニーズを伴うユーザーとの関係円滑化	Facilitation of relationships with healthcare users
倫理を伴う実践教育	Practical education with ethics

取得・向上を目指す 6 つの能力のアウトカム(達成指標)は以下のような例で示されます(表 3)。

表３　取得・向上を目指す６つの能力のアウトカム例

1. Teamwork:

being able to be both team leader and team member

knowing the barriers to teamwork

2. Roles and responsibilities:

understanding one's own roles, responsibilities and expertise, and those of other types of health workers

3. Communication:

expressing one's opinions competently to colleagues

listening to team members

4. Learning and critical reflection:

reflecting critically on one's own relationship within a team

transferring interprofessional learning to the work setting

5. Relationship with, and recognizing the needs of, the patient:

working collaboratively in the best interests of the patient

engaging with patients, their families, carers and communities as partners in care management

6. Ethical practice:

understanding the stereotypical views of other health workers held by self and others

acknowledging that each health workers views are equally valid and important

（出典：Framework for Action on Interprofessional Education& Collaborative Practice. P26, 2010, WHO https://www.who.int/publications/i/item/framework-for-action-on-interprofessional-education-collaborative-practice）

3）社会課題解決に関する能力

ISL において社会課題を解決する能力として、以下の 6 つを設定しています(表４)。地域のアセスメントから課題の抽出、そして地域や住民の要望や文化的背景等を考慮し、実現可能な解決方法を計画します。さらに、その上の段階として、介入方法が果たして実際に解決につながっているのか、具体的な効果をもたらしているのかという観点から、効果を測定するための指標や測定法を策定します。これらのアセスメントや介入計画そして実施について、ケアの対象である住民など地域の当事者との合意をもって行います。持続可能性を担保するためにも当事者主体であることが重要となります。

さらに、アドバンスかつ俯瞰的な視点から、一時的な介入だけでなく、課題の背景にある

システムとしての社会政策について何か改善できないか、新たに追加することができないなど仕組み作りについても考察できることをめざします。

表４　取得ならびに向上をめざす社会課題解決に関する能力

地域のアセスメント評価	Assessment of community, region
地域課題の抽出	Clarifying the problems and factors
実践型課題の解決目標設定	Goal setting for solving
効果測定の評価計画立案	Planning for evaluation of effectiveness
地域における合意形成	Consensus building in the community
社会政策等の方策立案	Planning of social policies and other measures

ISL の演習実践においては、参加学生の学年や専門家あるいは社会人としての知識や経験が異なるため、それぞれの学年に応じた社会課題解決スキルの到達目標を、表５のように設定しています。特定のトピックや専門領域に関する社会課題については、学年に関係なく設定された到達目標を超えての実践が望まれます。

表５　演習における社会課題解決スキルの到達目標

レベル	到達目標とするスキルの概要	想定する該当学生
1	特定の地域、コミュニティ、集団について、健康に関する観点から特徴、課題、ニーズ等を分析できる。健康の決定要因や関連する SDGs を用いて説明できる。	学部 1～3 年生
2	支援やサービスの対象となっている課題と関連要因、介入とその効果としての具体的指標、プロセスを論理的かつ科学的根拠となる援用理論やモデルを用いて説明することができる。	学部 3～5 年生 修士課程
3	既存の支援やサービスについて、クリティカルに評価し、改善の余地やリソースの紹介、新たな介入法などのアイディアの提言などをおこなうことができる。	学部 5～6 年生 修士～博士課程

４．ISL の各パートでの具体的な学習活動と課題（2022 年度トライアル版）

1）使用学習プラットフォームのログイン法等

学習用 LMS として、Google Classroom および web ベースのメタバースプラットフォームである oVice を用います。

それぞれのプラットフォームのログイン法やマニュアルは次の表 6 の通りです。確実にログインできるようにしておいてください。また、自身のアカウントやパスワードは、他者に教えないでください。

表 6　学習用プラットフォームと使用法等

プラットフォーム名	ログインのためのアカウント	ログインのための URL
Google Classroom	SIU 学生：各自のアカウントでログイン 千葉大学生：千葉大の Google アカウント	別途周知・連絡(TBA:to be announced) 1 月 30 日以降利用可能
oVice（メタバース）	SIU 学生：各自のアカウントでログイン 千葉大学生：千葉大の Google アカウント	別途周知/連絡（TBA） 2 月 5 日以降利用可能予定
共通の準備物品	WEB 会議可能な準備、PC、WEB カメラ、マイク、ヘッドホン(イヤホン)、インターネット	

参考資料 URL:
Google Classroom：
https://support.google.com/edu/classroom/answer/6020279?hl=en&ref_topic=10298088
他
oVice：
https://www.youtube.com/watch?v=sRC7M7ItmIw&t=121s　他

2）事前学習の具体的内容

事前学習では、オンラインでの ISL における事前の知識取得とチームビルディングが中心となります。次の表 7、8 に示したスケジュールにもとづいて、主にオンラインで、個人あるいはチームでの学習を実施します。表 7 には、提出を要する課題とその内容等を呈示しています。

自己紹介動画/資料は、自大学内および 2 大学間でのチームビルディングのための素材となります。学生間での学習リソースの呈示は、共同学習やチームビルディングの導入、そして呈示する学生自身にとっても自国での状況把握と理解の導入となります。

表 7　事前学習における学習課題とツール等　　TBA:決定次第周知

名称	方法	使用プラットフォーム	Assignment	期日	備考

			実施者		
コースオリエンテーション	非同期・オンデマンド（資料視聴）	Google Classroom	動画視聴/資料精読 個人	2023年2月3日(金)～	・コース全体の説明 ・事前学習課題の説明 ・評価基準等の説明等
Lecture 1. IPE/IPCP 2. Community-based integrated care system in Japan 3. Global Health 4. Health care system in Japan	オンデマンド（資料視聴）	Google Classroom		2023年2月3日(金)～	・ISL の学習目標に連動した学習資料の呈示
現地プログラムオリエンテーション CU 学生	オンデマンド（資料視聴）			2023年2月3日(金)以降TBA	・現地におけるフィールド演習に関するオリエンテーション(千葉大学生に向けたシンビオシス国際大学からの説明)
現地プログラムオリエンテーション SIU 学生	オンデマンド（資料視聴）	Google Classroom		2023年2月TBA	・現地におけるフィールド演習に関するオリエンテーション(シンビオシス国際大学学生に向けた千葉大学からの説明)
他学生自己紹介資料	オンデマンド、動画/資料視聴	Google Classroom oVice		2023年2月3日(金)～	・他学生が作成した自己紹介資料の視聴
学生呈示の学習課題リソー	オンデマンド、	Google Classroom		2023年2月6日	・パートナー大学学生が呈示した演習テ

ス	動画/資料視聴	oVice		(月)～	ーマに関する資料の閲覧
メタバースプラットフォーム(oVice)使用法ガイダンス	オンデマンド（資料視聴	Google Classroom		2023 年 2 月 TBA	・プラットフォームのログイン等の使用法の説明

＊上記の他に、渡航オリエンテーションや現地滞在中の生活に関するオリエンテーションを予定している。同期・非同期にて実施予定である。日時や方法が決定次第、アナウンスする（TBA)。

表 8　提出を要する課題

名称	実施者	提出先･場所・形式	提出〆切り	含める内容等
自己紹介動画作成・提出（CU 学生は動画、SIU 学生は文書)	個人	Google Classroom /mp4	2023 年 2 月 1 日(水)	各学生の自己紹介　約 3 分/人の動画作成：以下の内容を含める ・氏名、所属、専門(未経験の場合は将来の希望)、興味のある社会課題やテーマ、参加の動機・個人的目的、将来の希望活動フィールド ＊以降オプション（行ってみたい場所・やってみたいこと、自国の一押しの観光名所について、その他、他学生に伝えたいことなど)
学習リソースの呈示(パートナー大学学生に向けて)	個人	Google Classroom /word、txt	2023 年 2月1日(水)	・1～2 つ/人の、自国における相手大学学生の学習主題に関する学習リソースの紹介(英語のサイト、動画など。言語は英語) ・千葉大は日本の高齢者関連課題についてキーワードと、それに関する英文サイトあるいは論文を呈示 ・SIU はインドの子どもについて上記同様 ＊提出されたものを教員がまとめ必要に応じて補足して呈示

3）フィールド演習

演習テーマとフィールド

フィールド演習では、パートナー大学の所在する現地に渡航し、現地のフィールドである地域や組織、施設を訪問し、サービス活動に参加します(表 9)。事前学習で得た知識や技術をもとに、IPCP、文化的対応能力を意識して、地域社会のために効果的な奉仕活動に参加・

実践し、チームで社会課題解決に取り組みます。

各大学は、大学の所在する国や地域の社会課題をもとに ISL のテーマを選定・呈示します。2022 年度は、千葉大学の学生はインドにおいて、シンビオシス国際大学が提供する「困難な状況にあるこども達」としてその支援活動に参加する他、地域住民の生活知るためにコミュニティ訪問を行います。

シンビオシス国際大学の学生は日本において、「日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム」をテーマとして、フィールド演習をコミュニティ訪問や施設での活動参加を行います。

具体的なフィールド概要とそこでの学習目標は、別紙資料で示します（フィールド一覧）。また、フィールド訪問を含む現地での学習活動のスケジュールも別紙にて呈示します（現地学習スケジュール）。

表 9　フィールド演習の場所や内容　（2022 年度）

実施する学生	フィールド演習の場所・パートナー大学	テーマ	訪問/参加する地域、組織、施設等	期間（プログラム期間）
千葉大学学生	シンビオシス国際大学(プネ、インド)	インドの困難な状況にあるこども達	村の学校、生活困窮状態にある子どもを支援する NGO など	2023 年 2 月 14 日(火)～2 月 22 日(水)
シンビオシス国際大学学生	千葉大学（千葉・東京、日本）	日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム	セルフヘルグループ、在宅ケア提供施設、災害準備教育体験、生活困窮者支援 NPO、ショッピングモールでのウオーキング促進など	2023 年 3 月 1 日(水)～3 月 9 日(木)

（2）学習活動における目標設定とリフレクション

表 9 に示したようにワークシートを活用して、特にフィールド演習においては GRIP プログラムの目標の他、各フィールド固有の学習目標に沿って目標設定・計画およびそれに照らしたリフレクションを個人・チームを行います。

毎日の目標が達成できたかどうか、チームならびに個人でも検討・評価します。この各日の記録用紙は書式自由で、提出不要ですので各自で工夫してください。
そして、現地でのフィールド演習期間の中間に当たる 4 日目のプログラム終了時、そして最終日にあたる 8 日終了時には、それぞれ個人ならびにチームでリフレクションを行い、評価をします。4 日目の中間評価では、それまでの学習活動や目標達成状況を振り返り、課題や目標を明確化して、後半の 4 日間に有意義な学習活動を実施できるように活用してください。最終日の 8 日目の振り返りでは、自身やチームの学習活動と取得・向上をめざすIPCP、文化的対応能力、社会課題解決力について向上や成長を認識し、評価します。自己の将来の専門職としての学習や社会活動の資料として活用してください。
各フィールドにおけるアセスメントのための情報収集と記録については、テンプレートと資料を教員が呈示しますが（資料 3－3, 3－4)、学生がチームで検討し、項目を追加するなどして活用してください。チームで役割分担をするなどして、情報を収集・持ち寄り、チームとしてフィールドのアセスメントを行います。各ワークシートの呈示、実施者、提出等は、表 10 の通りです。

表 10　フィールド演習におけるワークシートの呈示・実施・提出等

名称	実施者	提出先・場所・形式	提出期日等	含める内容等
個人・チームの毎日の記録	個人 チーム	提出不要・書式自由	提出不要	各日の目標・計画・実施・評価・翌日の課題等
個人リフレクションシート（中間・最終評価）	個人	Google Classroom /Google document, Word など	中間：フィールド演習の 4 日目あるいは翌日（CU: Feb.17, SIU: Mar. 4） 最終：フィールド演習最終日 (CU: Feb. 21, SIU: Mar. 9)	IPCP,CC&CH, 社会課題解決能力他、シート参照（資料 3－1）
リフレクションシート（チーム用）（中間・最終評価）	チーム	Google Classroom /Google document, Word など	中間：フィールド演習の 4 日目あるいは翌日（CU: Feb.17, SIU: Mar. 4） 最終：フィールド演習最終日 (CU: Feb. 21, SIU: Mar.	IPCP,CC&CH, 社会課題解決能力他、シート参照（資料 3－2）

			9)	
学習成果統合シート	チーム	Google Classroom Ppt あるいは google slides ＊そのままプレゼンテーション資料として使用	学習成果発表会(Mar. 16)にてプレゼンテーション	資料3−4中のコミュニティアセスメントの項目、課題、解決策など(資料3−3)

4）事後学習

おもな学習活動は、自国内でのオンラインでのバーチャルワークショップです。同期(リアルタイム)オンライン上での学習成果発表会を行います。発表準備により学習体験の統合・意味づけを行い、実際に英語でプレゼンテーションすることによりコミュニケーションおよびプレゼンテーションスキルの向上を図ります。また、発表後は、パートナー大学の学生や教員とともにディスカッションを行うことで、さらにグローバルな観点から学習を深めます。そして、個人学習の内容をレポートで提出します。

学習成果発表会のプレゼンテーションの準備と方法

以下の表 11 に示した通りの内容や時間配分にて、実施します。成果発表の内容やプレゼンテーションスキルや内容についての評価は、表 12 の基準を用いて評価します。

表 11　成果発表会の日時、内容と時間配分（2022 年度）

1. 開催日時：2023 年 3 月 16 日(木)　午後　約 3 時間
2. 開催方法：オンライン（同期・リアルタイム）（2022 年度はアーカイブ視聴でも出席とする）
3. プレゼンテーションに使用するプラットフォーム：メタバースプラットフォーム（oVice）
4. プレゼンテーション実施者と内容

10 名の学生は、グループとして、以下の内容を含めてプレゼンテーション資料を英語で作成し、発表を行う。

1. メンバーおよび学習スケジュールの全体概要、2. 社会課題解決に関するケース 2 つ（あるトピックについて：日本に来る SIU 学生は①ソーシャルキャピタル、②災害の備え）について（2022 年度の場合)、3. IPCP に関する評価

5. 発表の詳細と時間配分

1 つの大学の成果発表　26 分〜30 分/大学（仮）

チームメンバー紹介（所属、専門、学年等）・学習スケジュールの全体概要（各活動フィールド概要、学習テーマ、実際の実施内容等について全体的に紹介）　5 分
ケース発表（社会課題解決）
①ケース 1（トピック）7 分
トピック(例：災害準備支援など)に焦点化して、フィールドと活動について以下の項目を含め、発表する。必須項目：各フィールドの組織・施設、扱っている社会課題、サービスの対象者、実際の支援あるいはサービス活動内容、評価指標、学生が参加・実施した活動、良い点や工夫されている点と国への移転可能性とその理由、オプション：改善の余地や新たな提案などもあれば入れる。
②ケース 2（トピック）　7 分
内容は①と同様
チームとしての自己評価　7 分
チームとしての全体的な IPCP、社会課題解決、各評価とその依拠する状況、今後の課題・展望について発表
Q&A：15 分
講評：15 分
ここまでで計 60 分（仮）
休憩　10 分後
他の大学の学生の発表　内容や時間配分は同じとする
ここまでで計　130 分（仮）
すべての大学の学生発表等がおわったとこころで、全体講評　20 分として、終了とする。
計　150 分（2 大学の場合）

＊なお、この発表は録画し、アーカイブ視聴可能とする。
＊また、次年度の、モデルケースとして、次年度参加学生も視聴可能とする。

表 12　学習成果発表の評価基準

観点の説明	レベル 1	レベル 2	レベル 3（標準点）	レベル 4
学習成果として述べるべき内容				
ケース発表（社会課題解決） 表 5 に照らして、評価する。	含めるべき要素が含まれていない	表5のレベル1	表 5 のレベル 2	表 5 のレベル 3

チームとしての評価(IPCP)」 取得・向上を目指す6つの能力のアウトカムのうち、Teamwork、Relationship with, and recognizing the needs of, the patient、Ethical practice）について評価する。	左記の要素が述べられていない。	リーダーとメンバーの両方の役割がとれる チームワークの障害となるものがわかる	対象者の関心やニーズに沿って協同する ニーズを有する関係者とパートナーとして協同する	チーム内の少数意見を尊重する
コミュニケーション				
話し方 話し手としての、1. 態度、2. 言葉遣い、3. 声の大きさ、4. 速さ	左記の4要素等が適切でなく、全体的に聞きにくい	4要素等、適切でない部分があり、一部聞きにくい	4要素等が適切で、聞きやすい	4要素等が非常によく、聞き手が引き込まれる
質疑応答 質問の意味の理解、明確な回答、誠実な態度、回答の根拠	質問の意図を理解していない	質問の意図を理解しているようだが、質問者の観点からずれた会という、またはその場しのぎの回答をしている	質問の意図に沿って、誠実に回答している	質問の意図に沿って誠実に回答しているだけでなく、根拠が示され説得力のある回答がされている

個人のレポート作成と提出

個人の学習成果についてはレポートで提出する。内容、構成等は、グループでの評価項目と同様の項目を個人について評価し、自己の成長と課題、感想として、指定された期日までに Google Classroom に提出する。英語で 1000 words 程度とする。

表 13　個人学習成果レポートの内容・提出等

名称	実施	提出先・形式	提出期日等	含める内容等

	者			
個人学習成果レポート	個人	Google Classroom/word	2023 年 3 月 23 日(木)	IPCP・文化的対応能力・社会課題解決能力についての自己の成長と課題、感想 使用言語：英語 単語数：1000 words 程度

5． 評価方法

出席・参加状況、記録・レポート、成果発表会、自己評価表を用いた評価などから、総合的に評価する。

6． GIRP での ISL を安全に行うための心構えと事故発生時の対応

(1) 自己の健康管理等への留意
(2) 演習時間の厳守
(3) 服装・身だしなみへの配慮
(4) 文化的安全への配慮
(5) 演習計画作成・実施に伴う留意
(6) 教員および演習施設の担当者への報告・連絡・相談
(7) 守秘義務・個人情報管理
(8) 事故発生時の対応

事故や不測の事態に遭遇した際には、患者さんや住民の方々の生命を第一に優先し、被害や障害を最小限にくいとめることが大事である。以下の表 14 の手順にそって、冷静に対処する。

表 14　事故発生時の対応

①被害状況を把握	事故に気づいた時点（事故を疑った時点を含む）において、患者さんや住民の方に生じた事故（物損も含む）もしくは学生自身が受けた被害の状況を捉える。
②助けを呼ぶ	事故に気づいた時点（事故を疑った時点を含む）で、まずは、患者さんや住民の方の命を第一優先に行動することを基本に、その場で自分が対処できることは行う。周囲の人にも助けを求める。
③教員と施設の実習担当者への報告	速やかに教員と施設の実習担当者に報告（いつ、どこで、誰が、誰に、何を、どうして、どうなったか、など）し、指示に従って行動する。 ※外出時は、必ず実習施設の電話番号を控え、小銭か携帯電話を持っていく。
④事故からの学び	事故が生じた原因について熟考し、事故を起こさないために必要な自分の課題に気づき、次からの実習に活かす。

⑤事故報告書の作成	必要に応じて、教員と共に事故報告書を作成する。
⑥保険金請求手続き	必要に応じて、学研災の損害保険（障害・賠償責任）あるいは旅行保険の保険金請求手続きを行う。

(9) 災害発生時の対応

・学内活動時

大学の災害時対応マニュアルに沿い、教員が避難誘導などを行い、安全を確保する。その後、大学内担当者・部署間ならびにコーディネーターや原籍大学の担当部署と連絡をとり、情報共有および対処の検討を行う。

・地域の施設での実習

施設スタッフの指示に従い、避難等を行い安全を確保する。その後、大学内担当者・部署間ならびにコーディネーターや原籍大学の担当部署と連絡をとり、情報共有および対処の検討を行う。

(10) その他の留意事項

学内・フィールド演習等にかかわらず、困ったことや気になることなどあれば、担当教員やコーディネーターに気軽に相談してください。

資料 1．現地フィールド演習スケジュール

2022 年度　GRIP プログラム　日本を実施場所とする GRIP プログラム ISL のフィールド

1．日本を実施場所とする ISL のテーマとトピック、フィールド、活動等

1）テーマ　：Health of older people and community-based integrated care systems in Japan 日本の高齢者の健康と地域包括ケアシステム

2）概要：世界で最たる超高齢社会である日本では同時に少子化および人口減少の状況にあり、増加し続ける高齢者の医療・福祉等のアクセス向上、そしてその結果としての健康寿命の延伸や QOL の向上は、世界においても喫緊の課題である。2022 年度の日本での ISL は、高齢者の健康と QOL 向上のために、多様な社会文化経済的状態ならびに健康レベルにある住民の生活場所や、住民自らが行う自助や互助、そして民間の施設や組織による支援の場においてフィールドスタディを行い、高齢社会における社会課題とその具体的解決策ならびに枠組みとしての地域包括ケアシステムについて学習する。

3）トピックと扱う内容、フィールドなる組織・施設等

トピック	内容	組織・施設	エリア
ソーシャルキャピタル	1．生活困窮改善・防止、孤立・孤独防止【自助・互助・共助】	①山友会他(路上生活者支援)	墨田・浅草エリア
	2. 日常における健康増進機会と場の提供と活用【自助・互助】	②イオンショッピングモール・モール内ウオーキング（海浜幕張）	葛西・東京湾エリア
	3. 住民によるつながりの構築・維持【自助・互助】	③葛西のインド人コミュニティ ④東千葉地区自治会	千葉市中央 葛西・東京湾エリア
	4. 在宅ケアと集いの場所提供による包括的な健康の支援【互助・共助】	⑤Neighborhood Care(訪問看護・居場所づくり他)	千葉県北エリア（柏）
	5．在宅医療ケア提供による地域生活支援【共助】	⑥なごみの陽訪問看護ステーション	千葉市中央エリア（40 分）
災害への備え	4．災害弱者・災害発生時の備えとしての日頃の活動【自助・互助・共助】	④東千葉自治会 ⑥なごみの陽訪問看護ステーション ⑦災害シチズンサイエンス(災害準備教育) ⑧りべるたす(共同生活援助)	千葉市中央エリア 墨田・浅草エリア
先端医療・医療工学開発	5．高度医療ケア・技術開発・実践	⑨先端医療（大学病院、CCSC） ⑩フロンティア医工学センターラボ	千葉市中央

4）活動スケジュール案　（すべての日程に通訳が付く予定である）

月	火	水	木	金	土	日
2 月 27 日	2 月 28 日	3 月 1 日 （1 日目）	3 月 2 日 （2 日目）	3 月 3 日 （3 日目）	3 月 4 日 （4 日目）	3月5日
現　　地 departure	07:30 arrival@Narita	ORT @亥鼻キャンパス ⑨大学病院見学 10－12	ブリーフィング	ブリーフィング ⑦墨田･浅草 災害シチズンサイエンス	③葛西：インド人コミュニティ 地区踏査	(休み) 自由行動
	15:00 ホテルチェックイン	Campus tour 西千葉 13:30-17:30 ⑩フロンティア医工学センター見学(正面玄関集合)	①山友会（台東区）アウトリーチ(A グループ 5 名 ⑤Neighborhood Care(柏)(B グループ 5 名)	⑦墨田･浅草 災害シチズンサイエンス	③葛西：インド人コミュニティ p.m.ヨギさん面談 ＊中間評価	自由行動
3 月 6 日 （5 日目）	3 月 7 日 （6 日目）	3 月 8 日 （7 日目）	3 月 9 日 8 日目			
AM⑤A グループ 5 名 Neighborhood Care	⑥なごみの陽訪問看護ステーション（2 名） ⑧りべるたす（8 名）	④東千葉地区訪問	チェックアウト 10 時頃 evaluation(亥鼻) ＊最終評価 久保田様懇談			
PM⑤全 10 名　柏 Neighborhood Care	14－16 時 ②イオンモールウオーキング(海浜幕張)	13：30 1① 山友会（台東区）アウトリーチ(B グループ 5 名) 残り 5 名はフリー	ランチ後空港に移動 18：40 Departure@Narita			

資料 2. 現地フィールド概要

名称	
所在地	
施設概要	
学生対応者(施設代表)	
電話番号	
演習日時	
交通機関	最寄り駅
交通費	千葉駅からの公共交通機関利用時の料金
連絡担当教員	
演習時の同行教員	
演習時の参加学生人数・氏名	
演習内容	目標 演習活動の内容(予定)
当日のスケジュール	
備考	
同行者	SGS　名 千葉大学ボランティア学生　名（

資料 3. ワークシート

資料 3－1　個人用　リフレクションシート（中間・最終評価）

氏名		学生証番号	

個人リフレクションシート

自分の活動をふりかえり、今後の活動に活かしましょう。（中間評価用）

前半用（4 日目終了後に記入）　　年　　月　　日　（　　）

1. 前半の個人目標
■ フィールドでの学習目標 ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標 ■ 文化的対応力に関する目標 （■ その他自分なりの目標があれば書き足してください）
2. 活動の記録
3. 目標に対しどのように行動できたか
■ フィールドでの学習目標に対するふりかえり ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標に対するふりかえり ■ 文化的対応力に関する目標に対するふりかえり （■ その他自分なりの目標に対するふりかえり　※必要に応じて削除）
4. 後半の課題

1

個人リフレクションシート

（中間評価用）

自己評価（ふりかえりのための自己評価であり成績には関係しません）

領域および項目	自己評価	理由/根拠となる出来事（任意）
1. 自己の専門性の発揮	プルダウン追加	
2. ISL の目標到達度　※個人によって目標が異なります		
3. 専門職連携力		
専門混在のチームでの課題解決に対する貢献		
各自の役割と責任の明確化		
コミュニケーションとリーダーシップの発揮		
チームでの学習		
ユーザーとの円滑な関係づくり		
倫理的な実践		
4. 文化的対応力		
Cultural Competency		
Learning about your own and others' cultural identities		
Combating bias and stereotypes		
Respecting others' beliefs, values, and communication preferences		
Adapting your services to each patient's unique needs		
Gaining new cultural experiences		
Cultural Humility		
Practicing self-reflection, including awareness of your beliefs, values, and implicit biases		
Recognizing what you don't know and being open to learning as much as you can		
Being open to other people's identities and empathizing with their life experiences		
Acknowledging that the patient/client is their own best authority, not you		
Learning and growing from people whose beliefs, values, and worldviews differ from yours		

個人リフレクションシート

（最終評価用）

後半用（最終日までに記入）　　年　　月　　日　（　　）

1. 前半の個人目標
■ フィールドでの学習目標 ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標 ■ 文化的対応力に関する目標 （■ その他自分なりの目標があれば書き足してください）
2. 活動の記録
3. 目標に対しどのように行動できたか
■ フィールドでの学習目標に対するふりかえり ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標に対するふりかえり ■ 文化的対応力に関する目標に対するふりかえり （■ その他自分なりの目標に対するふりかえり）
4. 総合的な自己評価

3

個人リフレクションシート

（最終評価用）

自己評価（ふりかえりのための自己評価であり成績には関係しません）

領域および項目	自己評価	理由/根拠となる出来事（任意）
1. 自己の専門性の発揮	ブルダウン追加	
2. ISL の目標到達度　※個人によって目標が異なります		
3. 専門職連携力		
専門混在のチームでの課題解決に対する貢献		
各自の役割と責任の明確化		
コミュニケーションとリーダーシップの発揮		
チームでの学習		
ユーザーとの円滑な関係づくり		
倫理的な実践		
4. 文化的対応力		
Cultural Competency		
Learning about your own and others' cultural identities		
Combating bias and stereotypes		
Respecting others' beliefs, values, and communication preferences		
Adapting your services to each patient's unique needs		
Gaining new cultural experiences		
Cultural Humility		
Practicing self-reflection, including awareness of your beliefs, values, and implicit biases		
Recognizing what you don't know and being open to learning as much as you can		
Being open to other people's identities and empathizing with their life experiences		
Acknowledging that the patient/client is their own best authority, not you		
Learning and growing from people whose beliefs, values, and worldviews differ from yours		

フィールド実習最終日に Google Classroom の提出場所へ提出してください。

4

資料３－２　チーム用　リフレクションシート（中間・最終評価）

チーム名	

リフレクションシート（チーム用）

チームの活動をふりかえり、今後の活動に活かしましょう。

（中間評価用）

前半用（4 日目終了後に記入）　　年　　月　　日　（　　）

1. 前半のチームの目標
■ 社会課題フィールドでの学習目標 ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標 （■ その他自分たちなりの目標があれば書き足してください）
2. 活動の記録
3. 目標に対しどのように行動できたか
■ 社会課題フィールドでの学習目標に対するふりかえり ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標に対するふりかえり （■ その他自分たちなりの目標に対するふりかえり　※必要に応じて削除）

1

リフレクションシート（チーム用）

自己評価（ふりかえりのための自己評価であり成績には関係しません）**（中間評価用）**

領域および項目	自己評価	理由/根拠となる出来事
1. メンバーそれぞれの専門性の発揮	ブルダウン追加	
2. チームとしての ISL の目標到達度		
3. 専門職連携力		
専門混在のチームでの課題解決		
各自の役割と責任の明確化		
コミュニケーションとリーダーシップの発揮		
チームでの学習と学習内容の反映		
ユーザーとの円滑な関係づくり		
倫理的な実践		
4. これまでのチーム活動でうまくいったこと		
5. これまでのチーム活動で今後改善したいこと		
6. 後半のチームとしての目標		

2

リフレクションシート（チーム用）

後半用（最終日までに記入）　　年　　月　　日　（　　）

（最終評価用）

1. 後半のチームの目標
■ 社会課題フィールドでの学習目標 ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標 （■ その他自分たちなりの目標があれば書き足してください）
2. 活動の記録
3. 目標に対しどのように行動できたか
■ 社会課題フィールドでの学習目標に対するふりかえり ■ 専門職連携/チーム活動に関する目標に対するふりかえり （■ その他自分たちなりの目標に対するふりかえり　※必要に応じて削除）

3

リフレクションシート（チーム用）

自己評価（ふりかえりのための自己評価であり成績には関係しません）　　（最終評価用）

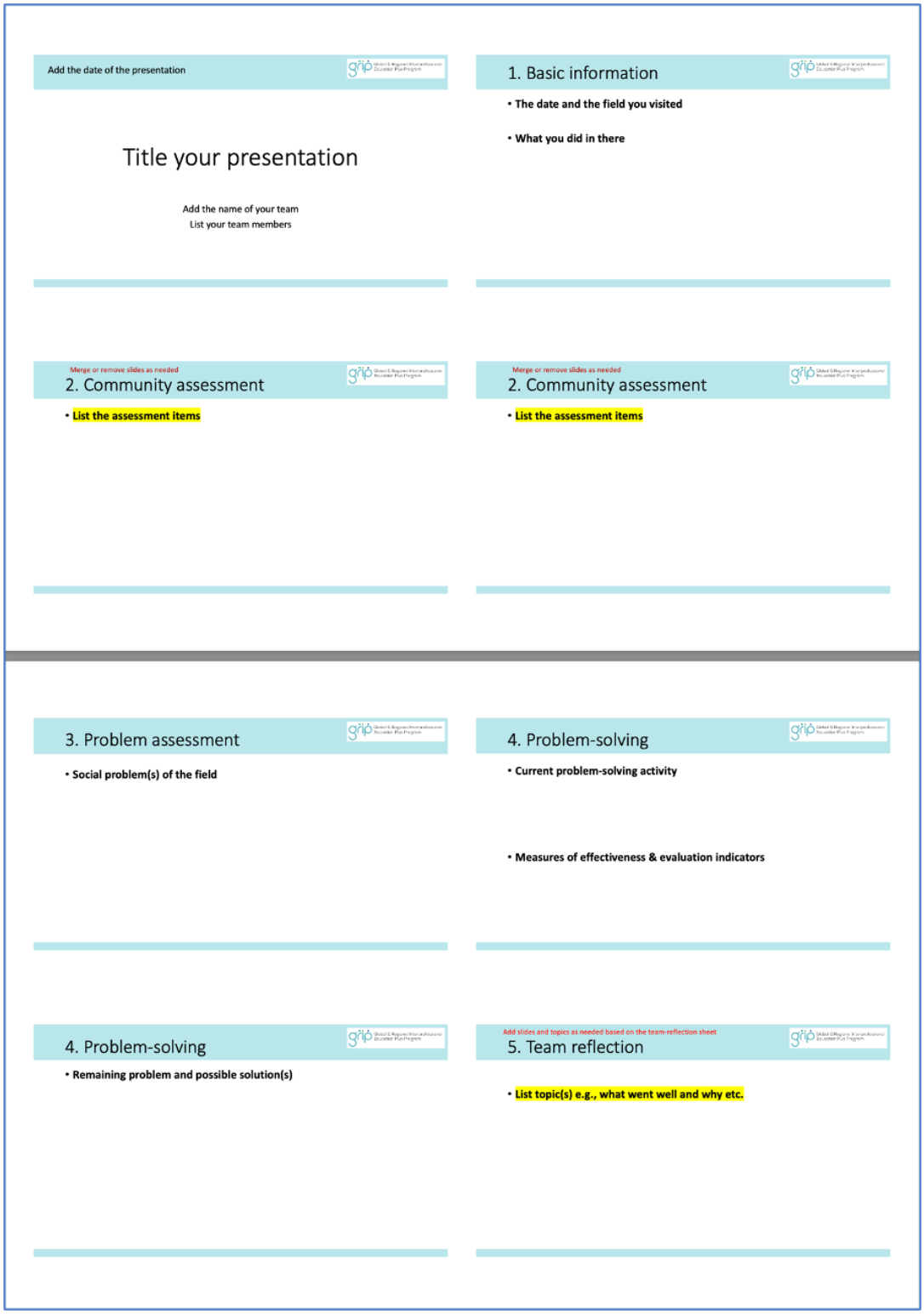
領域および項目	自己評価	理由/根拠となる出来事
1. メンバーそれぞれの専門性の発揮	プルダウン追加	
2. チームとしての ISL の目標到達度		
3. 専門職連携力		
専門混在のチームでの課題解決		
各自の役割と責任の明確化		
コミュニケーションとリーダーシップの発揮		
チームでの学習と学習内容の反映		
ユーザーとの円滑な関係づくり		
倫理的な実践		
4. これまでのチーム活動でうまくいったこと		
5. これまでのチーム活動で今後改善したいこと		
6. チームとしての総合的な自己評価		

フィールド実習最終日に Google Classroom の提出場所へ提出してください。

4

資料 3－3　学習成果統合シート

以下はスライドの抜粋である。全部で以下の 5 種類のテンプレートを準備している。適宜スライド枚数を追加し、資料 3－4 のアセスメント項目の情報を挙げて記載する。学習成果発表会にこれらのスライドを使用してよい。提出先は Google　Classroom とする。



資料３－４　コミュニティアセスメント資料

以下の項目に、次の項目も加えて情報収集およびアセスメントを行う。

・現地住民の使用言語、上下水道・ガス・電気・トイレの水洗化整備、日照・温度・湿度等の環境など

Community Assessment Guideline

item	Item content
houses and streets	State of houses, interiors, villages, materials and construction methods of houses, age, general conditions, conditions of surrounding houses, townscapes, smells and sounds, density of houses, what kind of area, what kind of people live
open spaces and vacant lots	Focusing on the size and quality of fields, parks, vacant lots, etc., things there, owners, users, usage conditions, impressions of space
boundary	geographical boundaries, sensory boundaries Boundaries of the area (whether they are natural, economic, physical, etc.), whether there is something that represents the boundary, whether there is an atmosphere or impression that seems to be a boundary
gathering of people and place	Gathering places, times, types of groups and their impressions Places where people gather and characteristics of the group, what they do when they gather, what their purpose is, and what time and closedness they have
traffic conditions and public transport	Vehicle and road conditions, traffic jam, traffic signals, pedestrian crossings, railroad crossings, types of public transportation, convenience, main users, routes, timetables, etc.
social service agency	Types of social service institutions, purposes of institutions, usage status, appearance of buildings, who uses them, and what they do specifically
medical facility	Type and size of medical institution, department name, characteristics, appearance of building, degree of closeness to district, location, opening hours, closed day, etc.
shop/street stall	Shopping places for residents, types and characteristics of shops and shopping districts, characteristics of users, transportation to shops, presence and types of stalls, users and their circumstances
people and animals walking in the streets	People and animals that are in the streets, how are they, their outfits and impressions, what kind of people you see in the area, the time of day, the characteristics and impressions of the people who pass by.
vitality of the district and self-government of residents	The state of regional development and decline and the state of activities of resident self-governing organizations Whether it is lively, presence or absence of signboards, bulletin boards, posters, and leaflets indicating the activities of the community association, state of garbage and garbage storage areas, cleanliness of the area, cleaning status, environmental beautification, etc.
regional characteristics and local color	Whether there is something that expresses race or ethnicity, industries that characterize the area, special products, festivals, sightseeing spots, unique culture of the area, local color, regional characteristics, etc.
faith and religion	Characteristics of temples and shrines, cemeteries, faith and religions of residents Whether there are facilities, buildings, or things unique to the area related to beliefs and religions
measures of people's health	Are there any indications of the health conditions of the population? Occurrence of natural disasters and traffic accidents, infectious diseases, endemic diseases, distance and convenience to medical institutions, environmental risks likely to affect health, etc.
politics	Interest in politics of residents and matters related to members of parliament Political parties, politics, parliamentary offices, posters, billboards, whether there are political influential people in the district, and residents' interest in politics
media and publications	Newspapers, magazines, town magazines, media mainly used by residents, presence or absence of cable television, their characteristics and degree of penetration among residents

(Katsuko Kanagawa, Etsuko Tadaka, eds. Community Nursing Diagnosis, 2nd edition, p.42, University of Tokyo Press, 2011.)

Translated by GRIP promotion office

2022 年度 GRIP 実施・協力者一覧（敬称略）

GRIP 推進委員※「*」は GRIP 推進室員

看護学研究院：酒井郁子、井出成美、石橋みゆき、*野崎章子、飯田貴映子、
カズノブダビッド、仲井あや、*天井響子、臼井いづみ、孫佳茹

医学研究院：伊藤彰一、山内かづ代、鋪野紀好、笠井大

薬学研究院：伊藤素行、関根祐子、石川雅之

医学部附属病院：朝比奈真由美

フロンティア医工学センター：中口俊哉

園芸学研究院：岩崎寛

受入プログラム

千葉大学医学部附属病院　菊田直美、フロンティア医工学センター　中口俊哉

一般社団法人　Neighborhood Care：吉江悟

なごみの陽訪問看護ステーション：岡田智恵

社会福祉法人　りべるたす：伊藤佳世子

江戸川印度文化センター：プラニク・ヨゲンドラ

特定非営利活動法人　山友会：ルボ・ジャン、油井　和徳

イオンモール幕張新都心　エンターテイメント推進部：最上亜紀、　北下裕基

東千葉地区　和・輪・環の会：村井克則

千葉市役所保健福祉局：久保田健太郎

（株）エス・ジー・エス：肥田木孝、中路良恵、若尾美津穂

シンビオシス国際大学 SCON：Dr. Sonopant G Joshi

派遣プログラム

シンビオシス国際大学　SCIE　：Ms. Bhakti Padhye
SCOPE：Dr. Lelith Daniel、

（株）エス・ジー・エス：Ms. Kshipra Potdar

（株）JTB　千葉支店：山本重高